日本質的心理学会 第９回大会開催にあたって

日本質的心理学会会員の皆様、日本質的心理学会第９回大会は東京都市大学環境情報学部を会場に開催されます。この大会を本学会が発足当初からの「質的心理学研究」の伝統を生かしつつ、同時に大きな社会の変化の中における理論、研究方法や研究課題といったことを集合的に捉え直す絶好の機会としてアレンジして行ければと考えています。

第９回大会は、大会テーマを「制度的な組織の境界を超えた繋がり、活動、学習」とし、近年、web、モバイル技術の進展とひろがりに伴い、個々のコミュニティ、組織の境界を超えて様々な活動が展開されています。同時に、人々の協同や繋がりのあり方、生活が大きく変化しています。こうしたことに伴い、学習、コミュニティ、実践、人工物といった概念も問い直され、また多くの新しい研究課題も浮かび上がってきています。

さらに現代は web、モバイル技術の進展とともに、質的方法を改めて再考する時期だとも言えます。過去を振り返ると、例えば、オーディオテープレコーダー、ビデオテープレコーダーの普及とともに、研究方法だけでなく研究対象も大きく変化してきました。研究対象の変化は、また、理論的観点の再編を必要としました。そして現代におけるテクノロジーの変化は過去のそれよりも幅広く、深いもののように思われます。

以上のテーマを俎上に載せ、今後の展望をひらく機会として、また現在の会員の皆さんの取り組んでいるフィールドをこのような観点から新たに見直していただく機会として、今大会を位置づけたいと思います。本大会を折に、たくさんの素敵な出会いが生まれますことを願っております。

2012 年９月

日本質的心理学会 第９回大会委員長

上野直樹（東京都市大学）

日本質的心理学会 第９回大会の概要

□大会テーマ：「制度的な組織の境界を越えた繋がり、活動、学習」

第９回大会ホームページ：http://jaqp2012.com/
日本質的心理学会ホームページ：http://www.jaqp.jp/

□大会日程・開催場所・主催等

会期：2012年９月１日（土）、９月２日（日）
会場：東京都市大学　環境情報学部（横浜キャンパス）横浜市都筑区牛久保西 3-3-1
主催：日本質的心理学会　日本質的心理学会第９回大会準備委員会

□受付

学会の入会申込手続き、その他学会や大会に関するご質問・ご案内を承ります。
大会期間中、会場では、受付でお渡しする参加証（名札）をつけて下さい。
当日参加の方は、下記の参加費を申し受けます。

場所：４号館２階カフェスペース　階段前
時間：９月１日（土）　9:00 ～ 17:15
　　９月２日（日）　8:30 ～ 16:30

□大会参加費

当日参加　会員一般　￥6,000　　会員学生　￥3,000
　　非会員一般　￥6,500　非会員学生　￥4,000

なお、学生の方は学生証の提示をお願いします。聴講生・研究生は学生に含みます。
大会期間中のお知らせや変更などは、受付の大会掲示板にてお知らせします。適宜、ご確認下さい。

□大会本部・学会事務局

大会本部・学会事務局は会場受付（４号館２階カフェスペース）と併置しております。
ご用の方は、こちらでご相談下さい。

□クローク

大会期間中、会場受付（４号館２階カフェスペース）にクロークを設けております（無料）。
荷物をお預かり致しますので、ご利用の際は必ず係員より番号札をお受け取りください。
クローク利用時間は以下になります。※貴重品はご自身で携帯いただくようお願い致します。

１日目　9:00 ～ 17:45
２日目　8:30 ～ 17:00

□大会企画招待講演の概要

第 9 回大会ではシンポジウム、講習会の他、招待講演があります。

招待講演

日時：9 月 1 日（土） 15:45 ～ 17:45 (p.16-17 をご覧ください)

場所：3 号館 1 階 31A 教室（キャンパス案内図をご覧下さい）

演題：Vygotsky 派ソーシャルセラピーの方法とマルクス

演者：Dr. Lois Holzman（Dr. ロイス・ホルツマン）

□シンポジウムの概要

大会準備委員会企画、日本質的心理学会委員会企画、会員企画のシンポジウムがあります。
それぞれのテーマ、時間、教室は、大会プログラムにてご確認下さい。シンポジウムの各部屋には、
マイク、スクリーン、プロジェクター、PC 入力端子が設置されています。
なお、パソコンを利用される場合は、各企画者が持参して下さい。

□シンポジウム打ち合わせ室

シンポジウムの事前打ち合わせなどは、カフェスペース、または 32D 教室、32E 教室をご利用下さい。

□個人発表（ポスター）の概要

個人発表は、大会 1 日目 10:30 ～ 12:30、2 日目 10:00 ～ 12:00 に、4 号館 2 階にて行ないます。
発表者は、開始時間を提示して、ポスターの前で応対してください。
責任在席時間は
1 日目発表番号が偶数は 10:30 ～ 11:30、奇数は 11:30 ～ 12:30、
2 日目発表番号が偶数は 10:00 ～ 11:00、奇数は 11:00 ～ 12:00 となっております。
できるだけ多くの方と対話が実る事を期待しております。

□ポスター賞の概要

優秀ポスター賞（Cutting Edge 賞）は準備委員会の投票によって選出されます。
その後、総会にてポスター賞発表を行います。※副賞も有り

□講習会

講習会のお申し込み期間は、5 月 20 日 (日) から 8 月 1 日 (水) までです。
講習会の予約参加申し込みは一部締め切っているものがございます。

□休憩スペース

4 号館 2 階カフェスペースを休憩スペースとします。
また、好天に恵まれれば、4 号館 1 階前のオープンテラスや、
カフェスペースの屋外テラス席もご利用ください。

□懇親会

大会 1 日目 18:00 ～ 19:30 に、東京都市大学横浜キャンパス 4 号館 2 階学生ホールにおいて行ないます。当日参加の方は下記の参加費を申し受けます。ポスター発表と同じ会場です。
多くの方のご参加をお待ちしております。

懇親会参加費 (会員・非会員の区別はありません)
予約参加　　一般 ¥4,000 学生 ¥2,000
当日参加　　一般 ¥4,500 学生 ¥2,500

懇親会予約は、大会予約参加のお申し込みと同時に行なって下さい。
予約参加の申込み期間は5月 20 日 (日) から 8 月 1 日 (水) までです。

□各費用の振込先

1. ゆうちょ銀行の口座から振込あるいは現金で振り込みの場合
ゆうちょ銀行
記号　10210
番号　97450551
名前　日本質的心理学会第 9 回大会事務局
（ニホンシツテキシンリガッカイダイキュウカイタイカイジムキョク）

2. ゆうちょ銀行以外の金融機関から振込の場合
ゆうちょ銀行
店名　028（読み　ゼロニハチ）
預金種目　普通
口座番号　9745055

□展示・販売

4 号館 2 階カフェスペース中央部にて、書籍の展示・販売を行ないます。
参加する出版社は新曜社さま、北樹出版さま、ナカニシヤ出版さまになります。
ぜひお立ち寄りください。

□昼食

学会会場内に食堂、および、コンビニがあります。両店とも大会期間の二日とも営業します。
学食は 11:30-13:30, コンビニは 9:00-16:30 にオープンしています。
大学近隣には飲食店が少ないので、いずれかをご利用ください。両店とも大会期間の二日とも営業します。

□学内分煙

東京都市大学構内は分煙を行なっております。喫煙される場合はキャンパス案内図で指定された喫煙所をご利用ください。

□コピー機の利用

学内にてコピーをとる場合は、4 号館 2 階キャンパスショップ横のコピー機をご利用下さい。
モノクロコピー 1 枚 10 円となります。

□学内インターネットの利用

大会期間中、大会参加者用に無線 LAN 接続のパスワードを発行します。 受付の大会掲示板にてパスワードや利用方法を示しますので、確認してご利用ください。なお、ネットワーク接続が不安定になるため学内はテザリングができない設定になっていますので、大会中は学内無線 LAN のみをお使い下さい。

学内無線 LAN は、キャンパス内ですと屋外を含めてほぼどの場所でも使用可能です。

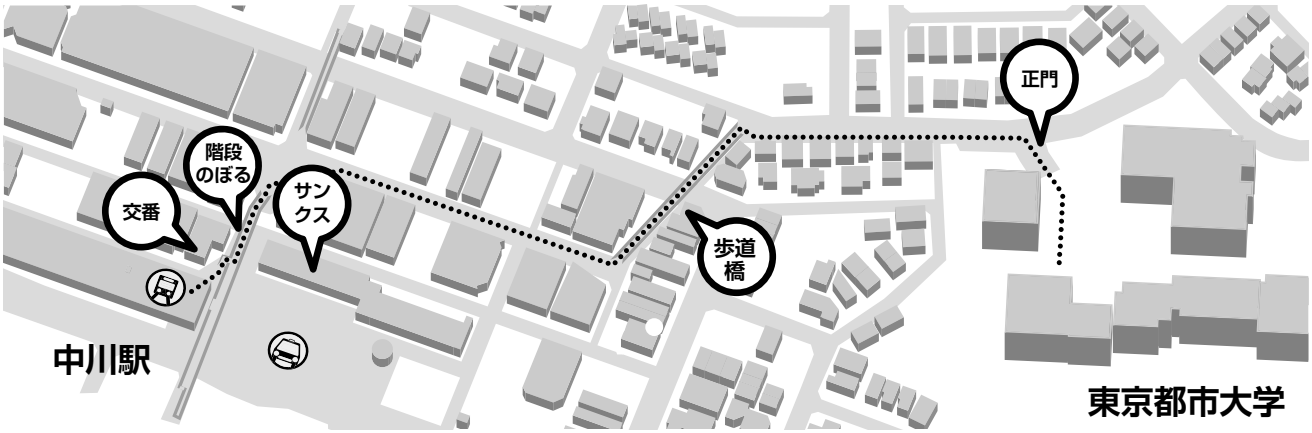
□お問い合わせ先

日本質的心理学会第９回大会準備委員会事務局 E-mail : jaqp2012@gmail.com

□会場までのアクセス

大会場の東京都市大学横浜キャンパスは、神奈川県横浜市都筑区に位置しています。

横浜市営地下鉄ブルーライン「中川駅」より徒歩 5 分です。



※横浜市営地下鉄ブルーライン「中川駅」から会場まで 中川駅のエスカレーターから外に出たら、
すぐ目の前にある高架を目指す。交番横の階段を のぼりきり直進。薬局の手前で右へ曲がり、
そのまままっすぐ直進。再びスロープ をのぼり、アーチを越え直進すると、
右手に東京都市大学横浜キャンパス正門。

＜渋谷駅から来場する場合＞

東急渋谷駅で東急田園都市線・急行中央林間行に乗り換え、「あざみ野駅」で下車 (6 駅、約 20 分、運賃 240 円) →横浜市営地下鉄ブルーライン・湘南台行に乗り換え「中川駅」で下車
(1 駅、約 2 分、運賃 200 円) →横浜キャンパスまで徒歩 (約 5 分)

＜横浜駅から来場する場合＞

JR 横浜駅で横浜市営地下鉄ブルーライン・あざみ野行に乗り換え、「中川駅」で下車 (11 駅、約 25 分、運賃 320 円) →横浜キャンパスまで徒歩 (約 5 分)

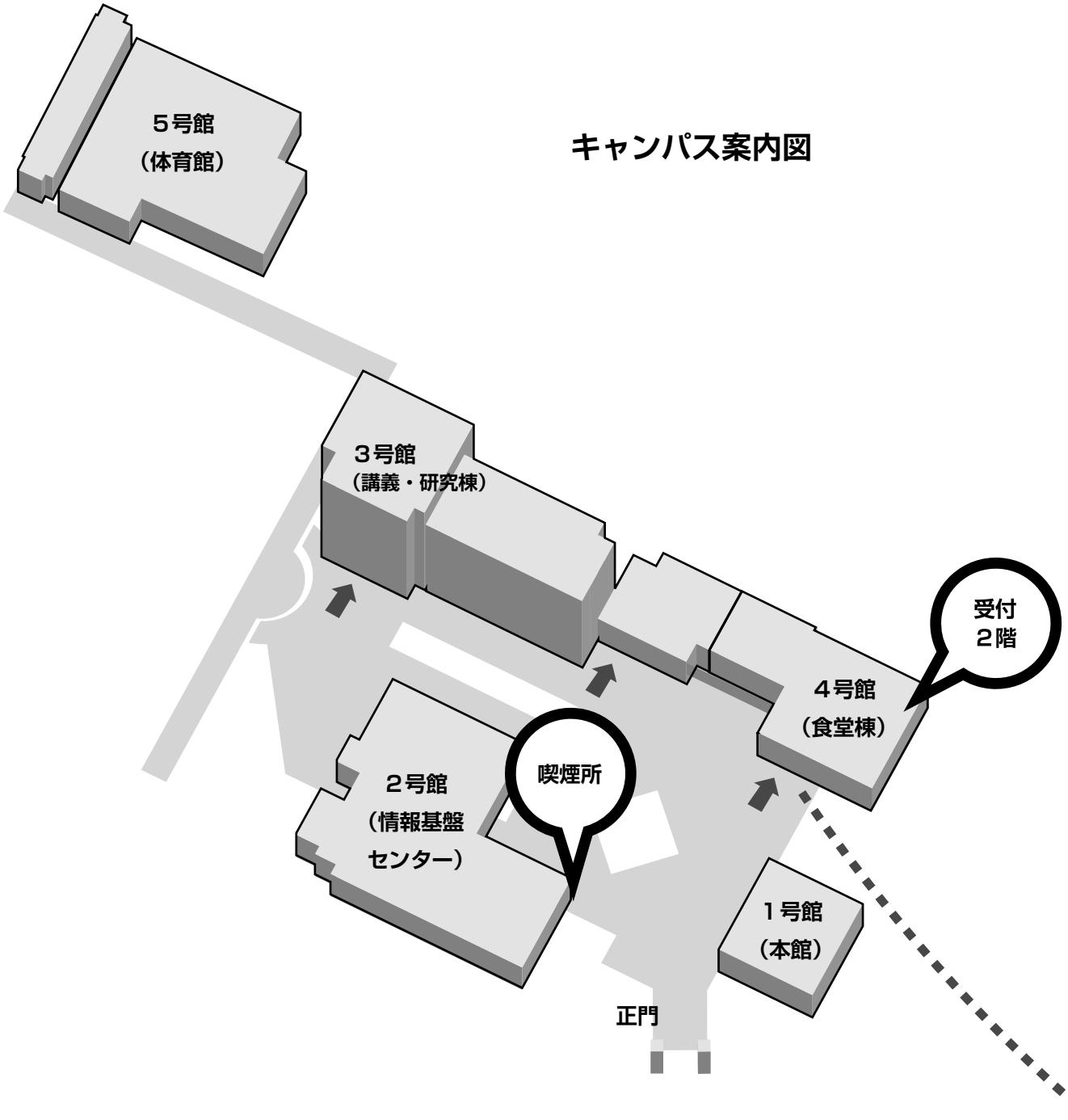
* 新幹線ご利用の方へ。横浜市営地下鉄新横浜駅より 6 駅 (約 15 分、運賃 260 円)

会場の駐車場はご利用できません。公共交通機関でのご来場をお願い致します。

* 宿泊施設をお探しの方へ

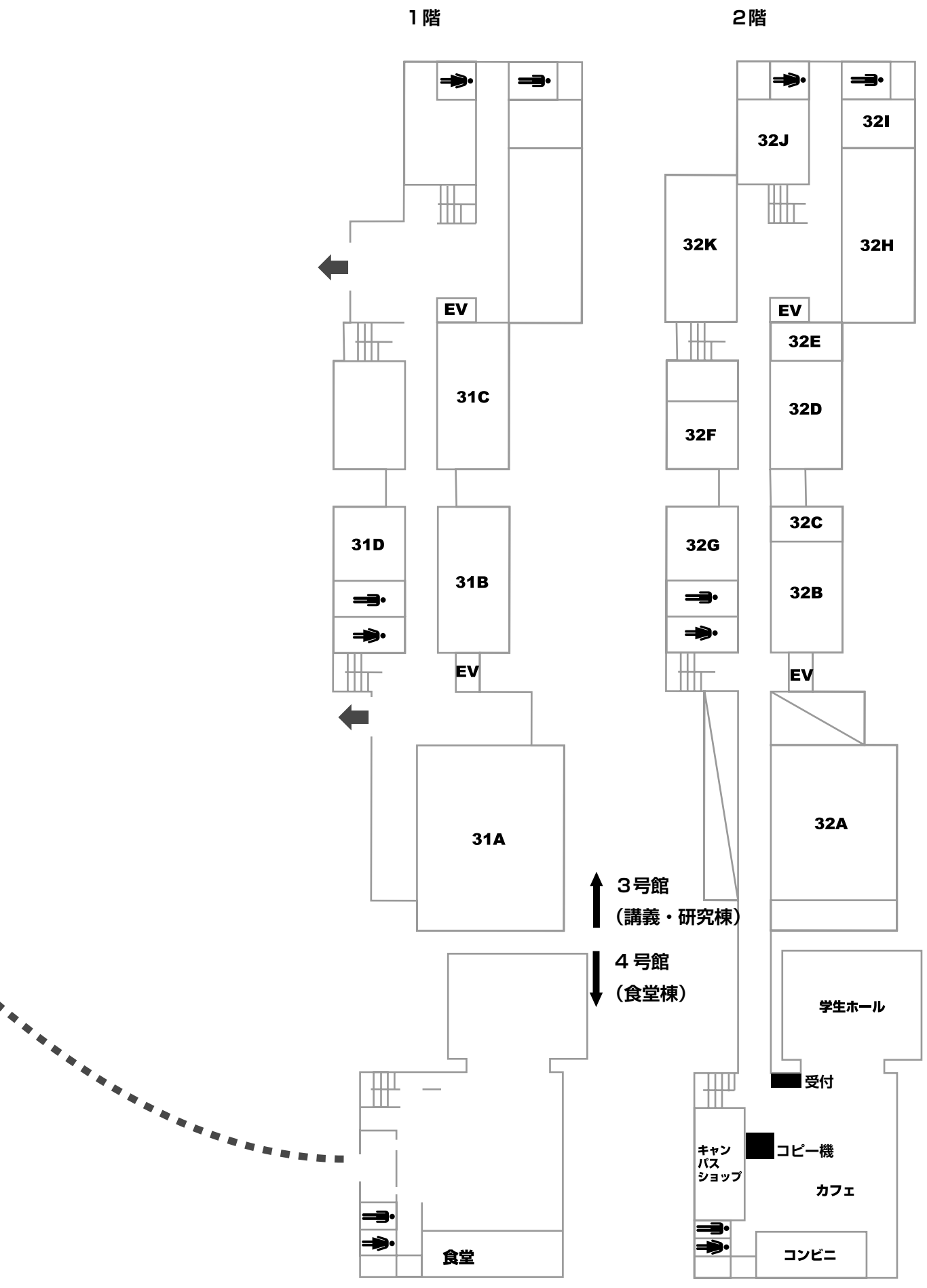
大会 1 日夜の新横浜周辺のホテルが予約しにくくなっております。

渋谷駅から中川駅 (学会会場・東京都市大学横浜キャンパス最寄り駅) まで所要時間 29 分、
横浜駅から中川駅まで 25 分ですので、東京、横浜にホテルをお取りになっても、十分通える範囲です。



□喫煙スペースについて

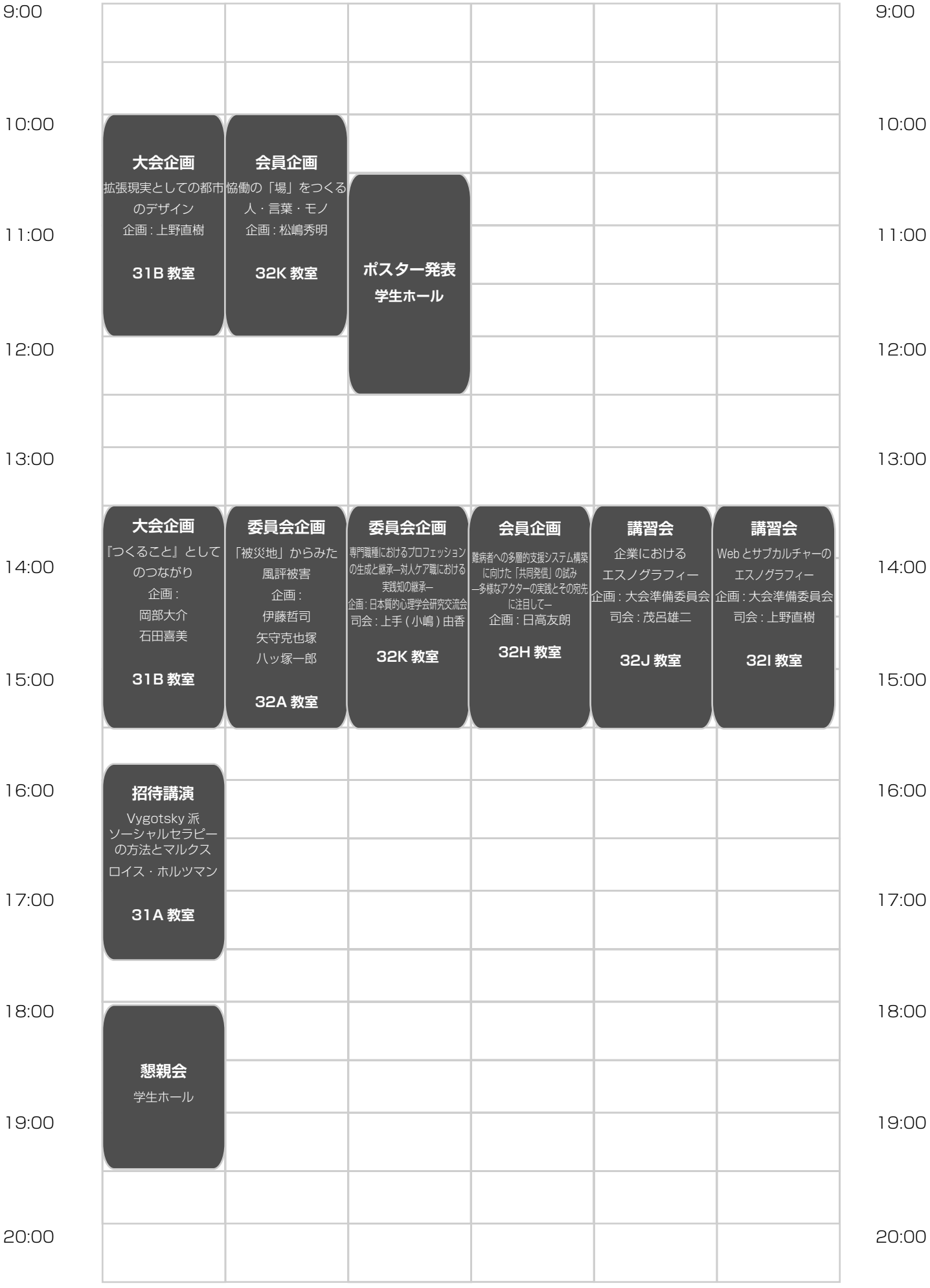
建物内は禁煙となっております。２号館（情報基盤センター）脇の喫煙所をご利用下さい。


1階
2階
32J
32I
32K
32H
EV
EV
32E
31C
32D
32F
31D
31B
32C
32G
32B
EV
EV
31A
32A
3号館
（講義・研究棟）
4号館
（食堂棟）
学生ホール
受付
キャンパスショップ
コピー機
カフェ
食堂
コンビニ

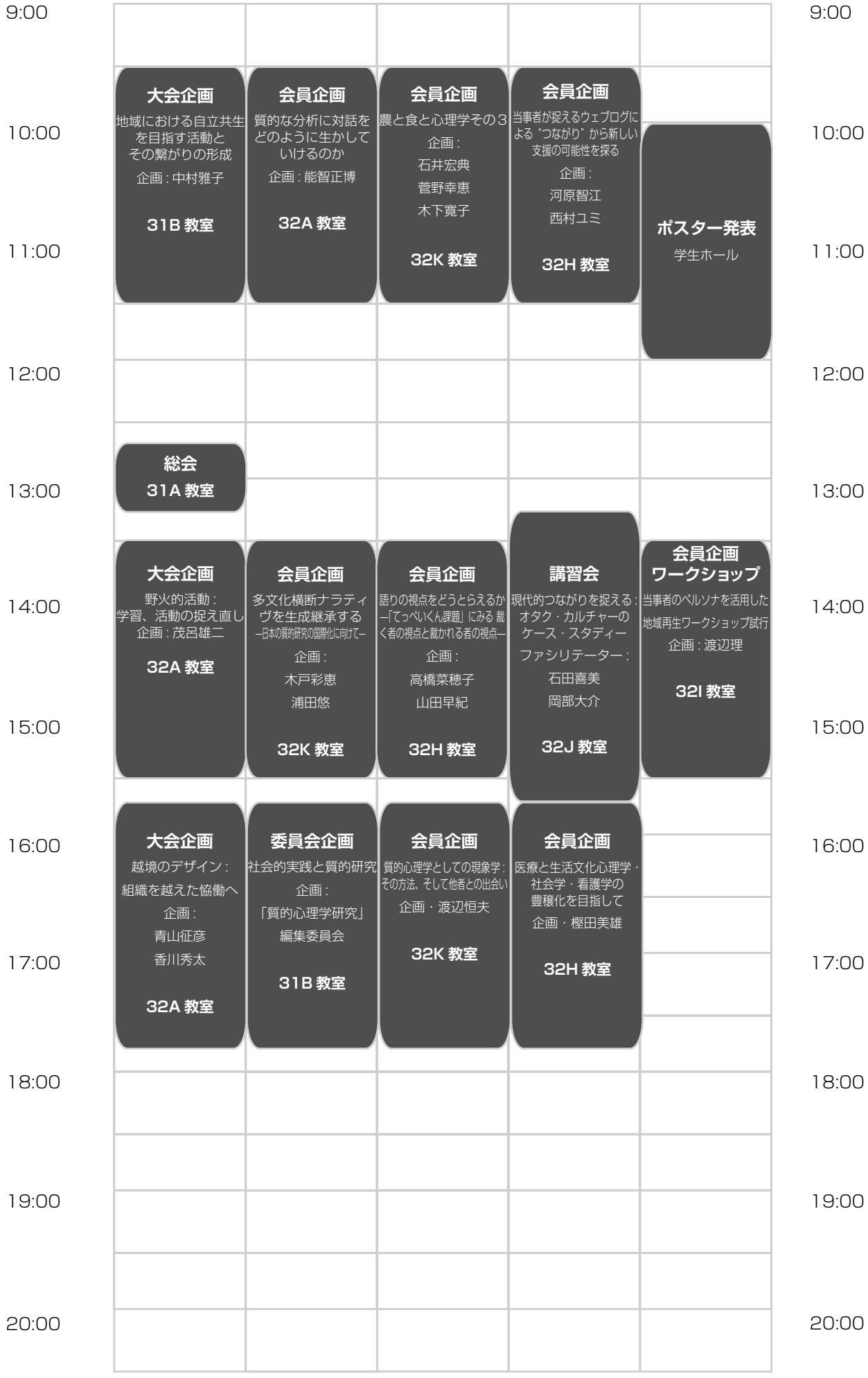
大会のスケジュール

9月1日（土）

大会1日目



9月２日（日）
大会２日目


9:00
10:00
11:00
12:00
13:00
14:00
15:00
16:00
17:00
18:00
19:00
20:00
大会企画
地域における自立共生を目指す活動とその繋がりの形成
企画：中村雅子
31B 教室
会員企画
質的な分析に対話をどのように生かしていけるのか
企画：能智正博
32A 教室
会員企画
農と食と心理学その３
企画：
石井宏典
菅野幸恵
木下寛子
32K 教室
会員企画
当事者が捉えるウェブログによる“つながり”から新しい支援の可能性を探る
企画：
河原智江
西村ユミ
32H 教室
ポスター発表
学生ホール
総会
31A 教室
大会企画
野火的活動：学習、活動の捉え直し
企画：茂呂雄二
32A 教室
会員企画
多文化横断ナラティヴを生成継承する
–日本の質的研究の国際化に向けて–
企画：
木戸彩恵
浦田悠
32K 教室
会員企画
語りの視点をどうとらえるか
–「てっぺいくん課題」にみる裁く者の視点と裁かれる者の視点–
企画：
高橋菜穂子
山田早紀
32H 教室
講習会
現代的つながりを捉える：オタク・カルチャーのケース・スタディー
ファシリテーター：
石田喜美
岡部大介
32J 教室
会員企画
ワークショップ
当事者のペルソナを活用した地域再生ワークショップ試行
企画：渡辺理
32I 教室
大会企画
越境のデザイン：組織を越えた協働へ
企画：
青山征彦
香川秀太
32A 教室
委員会企画
社会的実践と質的研究
企画：
「質的心理学研究」編集委員会
31B 教室
会員企画
質的心理学としての現象学：その方法、そして他者との出会い
企画・渡辺恒夫
32K 教室
会員企画
医療と生活文化心理学・社会学・看護学の豊穣化を目指して
企画・樫田美雄
32H 教室

大会プログラム

9月1日（土）

□シンポジウム 1　10:00 ～ 12:00

大会企画シンポジウム 1　[31B 教室]

拡張現実としての都市のデザイン P.18–19

企画・司会：上野 直樹（東京都市大学）

話題提供者：上野 直樹（東京都市大学）土橋臣吾（法政大学）
児玉 哲彦（頓智ドット株式会社）

指定討論者：岡部 大介（東京都市大学）

会員企画シンポジウム 1　[32K 教室]

協働の「場」をつくる人・言葉・モノ P.34–35

企画・司会：松嶋 秀明（滋賀県立大学）

話題提供者：伊藤 哲司（茨城大学）杉浦 淳吉（愛知教育大学）矢原 隆行（広島国際大学）

指定討論者：川野 健治（国立精神・神経医療研究センター）

□個人発表 1 日目（ポスター）10:30 ～ 12:30（P.60–68 をご覧下さい）**[4 号館 2 階学生ホール]**

在席責任時間は、発表番号が**偶数**は、10:30 ～ 11:30、**奇数**は 11:30 ～ 12:30。

□シンポジウム 2　13:30 ～ 15:30

大会企画シンポジウム 2　[31B 教室]

『つくること』としてのつながり P.20–21

企画・司会：岡部 大介（東京都市大学）・石田 喜美（常磐大学）

話題提供者：岡部 大介（東京都市大学）・加藤 文俊（慶應義塾大学）
木村 健世（アーティスト）冠 那菜奈（メディエーター、ぐるっこのいえ）
石幡 愛（東京大学大学院教育学研究科）佐藤 慎也（日本大学）

指定討論者：松嶋 秀明（滋賀県立大学）

委員会企画シンポジウム 1　[32A 教室]

「被災地」からみた風評被害～茨城・大洗町の取り組みを軸に P.28–29

企画者：伊藤 哲司（茨城大学）矢守 克也（京都大学）八ッ塚 一郎（熊本大学）質的心理学会東日本大震災ワーキンググループ『質的心理学フォーラム』編集委員会

話題提供者：近藤 誠司（ＮＨＫ大阪放送局）山崎 一希（フリーディレクター）
大洗町のみなさん　「大洗応援隊！」のみなさん
伊藤 哲司（茨城大学）矢守 克也（京都大学）八ッ塚 一郎（熊本大学）

委員会企画シンポジウム 2　[32K 教室]

専門職種におけるプロフェッションの生成と継承

―対人ケア職における実践知の継承― P.30–31

企画：日本質的心理学会研究交流委員会

司会：上手 (小嶋) 由香（安田女子大学）

話題提供者：吉村 夕里（京都文教大学）鮫島 輝美（京都光華大学）

古賀 松香（京都教育大学）前盛 ひとみ（香川大学）

指定討論者：竹内 一真（京都大学大学院）

会員企画シンポジウム 3　[32H 教室]

難病者への多層的支援システム構築に向けた「共同発信」の試み―多様なアクターの実践とその宛先に注目して― P.38–39

企画・司会：日高 友郎（福島県立医科大学）

話題提供者：橋本 操（NPO 法人 ALS・MND サポートセンターさくら会）

伊藤 史人（一橋大学）福田 茉莉（岡山大学大学院）

日高 友郎（福島県立医科大学）

指定討論者：今福 恵子（静岡県立大学短期大学部）赤阪 麻由（立命館大学大学院）

□講習会　13:30 ～ 15:30

講習会 1　[32J 教室]

企業におけるエスノグラフィー P.54

企画：大会準備委員会

司会：茂呂 雄二（筑波大学人間系）

話題提供者：鹿志 村香（日立製作所デザイン本部）臼井 東（日立製作所デザイン本部）

岩木 穣（筑波大学）

講習会 2　[32I 教室]

Web とサブカルチャーのエスノグラフィー P.55

企画・司会：大会準備委員会

運営担当：上野 直樹（東京都市大学）ソーヤーりえこ（東京都市大学）

企画協力者：谷杉 歩音、増田 陽大、藤平 一平、江島 裕斗、徳山 博章（東京都市大学）

□大会企画招待講演 15:45 ～ 17:45 [31A 教室]

Vygotsky 派ソーシャルセラピーの方法とマルクス P.16–17

講演者紹介・司会：茂呂 雄二

講演：Dr. Lois Holzman（East Side Institute for Group and Short Term Psychotherapy)

□懇親会　18:00 ～ 19:30　[4 号館 2 階学生ホール]

9月2日（日）

□シンポジウム３　9:30 ～ 11:30

大会企画シンポジウム３　[31B 教室]

地域における自立共生をめざす活動とその繋がりの形成 P.22–23

企画・司会 : 中村 雅子（東京都市大学）

話題提供者：ソーヤー りえこ（東京都市大学）中村 雅子（東京都市大学）
杉浦 裕樹（NPO 法人横浜コミュニティデザイン・ラボ）

指定討論者：土橋 臣吾（法政大学）

会員企画シンポジウム４　[32A 教室]

質的な分析に対話をどのように生かしていけるのか P.40–41

企画・司会：能智 正博（東京大学）

話題提供者：川野 健治（国立精神神経センター）大倉 得史（京都大学）
藤岡 勲（東京大学）

指定討論者：やまだ ようこ（立命館大学）

会員企画シンポジウム５　[32K 教室]

農と食と心理学 : その３ P.42–43

企画：石井 宏典・菅野 幸恵・木下 寛子

司会：菅野 幸恵（青山学院女子短期大学）

話題提供者：渡邊 芳之（帯広畜産大学）木下 寛子（九州大学）石井 宏典（茨城大学）

指定討論者：浜田 寿美男（奈良女子大学名誉教授）

会員企画シンポジウム６　[32H 教室]

当事者が捉えるウェブログによる“つながり”から新しい支援の可能性を探る P.44–45

企画：河原 智江（横浜創英大学）・西村 ユミ（首都大学東京）

司会：池田 真理（東京大学大学院医学系研究科）

話題提供者：河原 智江（横浜創英大学）A氏（ウェブログを綴っている当事者）
B氏（ウェブログを綴っている当事者）

指定発言者：南山 浩二（静岡大学）
西村 ユミ（首都大学東京）

□個人発表２日目（ポスター）10:00 ～ 12:00（P.69–78 をご覧下さい）**[4 号館 2 階学生ホール]**

在席責任時間は、発表番号が**偶数**は、10:00 ～ 11:00、**奇数**は 11:00 ～ 12:00

ポスターは、９月２日 (日)　18:00 まで提示します。

□総会　12:45 ～ 13:15　**[31A 教室]**

□シンポジウム 4　13:30 ～ 15:30

大会企画シンポジウム 4　[32A 教室]

野火的活動 : 学習、活動の捉え直し P.24-25

企画・司会：茂呂 雄二（筑波大学）

話題提供者：上野 直樹（東京都市大学）茂呂 雄二（筑波大学）香川 秀太（大正大学）

指定討論者：Dr. Lois Holzman（East Side Institute for Group and Short Term Psychotherapy）

会員企画シンポジウム 4　[32K 教室]

多文化横断ナラティヴを生成継承する―日本の質的研究の国際化に向けて― P.46-47

企画・司会：木戸 彩恵（立命館大学）浦田 悠（京都大学）

話題提供者：西山 直子（京都大学）安田 裕子（立命館大学）
家島 明彦（島根大学）浦田 悠（京都大学）

指定討論者：やまだ ようこ（立命館大学）伊藤 哲司（茨城大学）吉永 崇史（富山大学）

会員企画シンポジウム 7　[32H 教室]

語りの視点をどうとらえるか

―「てっぺいくん課題」にみる 裁く者の視点と裁かれる者の視点― P.48-49

企画：高橋 菜穂子（日本学術振興会／京都大学）
山田 早紀（日本学術振興会／立命館大学）

司会：山田 早紀（日本学術振興会／立命館大学）

話題提供者：浜田 寿美男（供述心理学研究所）高橋 菜穂子（日本学術振興会／京都大学）
村山 満明（大阪経済大学）山田 早紀（日本学術振興会／立命館大学）

指定討論者：大倉 得史（京都大学）

□講習会 3　[32J 教室]　13:15 ～ 15:45

現代的なつながりを捉える：オタク・カルチャーのケース・スタディ P.56

企画者：大会準備委員会

ファシリテーター：石田 喜美（常磐大学）、岡部 大介（東京都市大学）

企画協力者：木村 汐李、住谷 昌美、関 のどか、久保木 佑実
永山 香織（以上、常磐大学）、松浦 李恵、鰐淵 久美（以上、東京都市大学）
Stephanie Coates（La Trobe University/ 東京都市大学）

□会員企画ワークショップ　[32I 教室]13:30 ～ 15:30

当事者のペルソナを活用した地域再生ワークショップ試行 P.58-59

企画・運営：渡辺 理（富士通研究所）

□シンポジウム５　15:45 ～ 17:45

大会企画シンポジウム５　[32A 教室]

越境のデザイン : 組織を越えた協働へ

企画・司会：青山 征彦（駿河台大学）・香川 秀太（大正大学）

共催 : 日本認知科学会 教育環境のデザイン分科会

話題提供者 : 青山 征彦（駿河台大学）・香川 秀太（大正大学）倉石 一郎（東京外国語大学）
長岡 健（法政大学）

指定討論者 : 有元 典文（横浜国立大学）東村 知子（奈良文化女子短期大学）

委員会企画シンポジウム３　[31B 教室]

社会的実践と質的研究

企画・司会 :『質的心理学研究』編集委員会 田垣 正晋 (大阪府立大学) 永田 素彦 (京都大学)

話題提供者：高橋 菜穂子（京都大学大学院・日本学術振興会）
前田 泰樹（東海大学）菊池直樹（兵庫県立大学）

指定討論者：田垣 正晋（大阪府立大学）・永田素彦（京都大学）

会員企画シンポジウム９　[32K 教室]

質的心理学としての現象学：その方法、そして他者との出会い

企画・司会：渡辺 恒夫（東邦大学）

話題提供者：植田 嘉好子（川崎医療福祉大学）渡辺 恒夫（東邦大学）
田中 彰吾（東海大学）

話題提供・指定討論：西 研（東京医科大学）

会員企画シンポジウム 10　[32H 教室]

医療と生活文化 : 心理学・社会学・看護学の豊穣化を目指して

企画・司会：樫田 美雄（徳島大学大学院ＳＡＳ研究部）

話題提供者：氏家 靖浩（仙台白百合女子大学 発達心理学）
石井 俊行（四国大学看護学部 看護学）
堀田 裕子（中京大学非常勤講師 理論社会学）

指定討論者：サトウ タツヤ（立命館大学）

抄　　録　　集

Vygotsky 派ソーシャルセラピーの方法とマルクス

Lois Holzman
(East Side Institute for Group and Short Term Psychotherapy)

講演趣旨

私は 30 年前に、Fred Newman という、哲学者であり劇作家、俳優、セラピスト、コミュニティービルダー、そして政治的リーダーでもある、たぐいまれな人物と出会った。ニューマンにヴィゴツキーを教えたことで、ソーシャルセラピーといわれる心理療法は、より実践的にラディカルでユニークなものとなった。30 年の実践の中で、それはニューヨークや米国の枠を超えて広がり、多様な教育・文化状況でも応用可能な、人間の学習と発達の有効な方法論となった。

ヴィゴツキーの功績はいくつもあげることができようが、私は彼がいくつもの二元論を超えようとしたことに感銘を受ける。生物対文化、行動と意識、考えることと話すこと、学習と発達、個人と社会、こういった二元論を否定し、それに対抗しようとした。私たちは、この二元論否定を創造的に模倣する。とくに方法論に関する議論に関して、創造的模倣が必要だと思う。

ここで方法というのは、研究のテクニックではない。人間存在のユニークさを映し出すことができる、研究に必須の道具の議論である。いわゆる自然科学が与えるのは二元論的方法である。人間を科学的に扱うには非二元論的方法概念が必要である。ヴィゴツキーは以下のように述べている。

『方法の探求は、人間に固有な心理活動を理解するという取り組み全体において最も重要なものである。この場合、方法は前提であると同時に産物でもある。つまり研究の道具でもあり結果でもある。』

ヴィゴツキーが克服しようとしたのは、結果のための道具（tool for result）という科学パラダイムである。このパラダイムは、人間固有のユニークな存在は明らかにできない、直線的、道具的、二元的方法概念である。

私たちが造語したのは、『結果も道具もアプローチ』（tool and result）である。道具は対象から遊離しておらず、道具と結果は、同時に生成され、それが連鎖して探求活動という、いまここの革命的な実践が展開する。

この講演では、この方法概念を採用して私たちが行なってきた３０年におよぶ、セラピー、教育、仕事場でのセラピー実践を紹介しながら、さらにこの方法の意味を探求していく。

講演者紹介

ロイス・ホルツマン先生は、コロンビア大学で学位取得（言語発達心理学）後に、1978 年からロックフェラー大学でマイケル・コールらと行なった生態学的認知研究で非常によく知られていますが、それ以来一貫して、ヴィゴツキー理論の高度な理論的理解にもとづきながら、同時にそれを象牙の塔に閉じ込めることなく、街場のコミュニティービルディング活動を広げていく、実践的な発達臨床活動として研究を継続してきました。その成果はたくさんの書籍と学術論文にアウトプットされてきました。

ホルツマン先生が所長を務める、East Side Institute for Group and Short Term Psychotherapy は、ニューヨークのマンハッタンのど真ん中にあります。政府・行政からの資金援助をうけず、賛同者の寄付とボランティアでまかなっている、まったくの独立系組織です。

この Institute は、さまざまな発達臨床のプロジェクトを展開しています。そのうちのひとつは All Stars Talent Show Network というものです。貧困地区のアフリカン・アメリカンの子どもたちを、Institute が保有する劇場のステージにあげることで、新しい未来に結びつく経験を提供しようとしています。

また Performance of a Life Time というプロジェクトでは、遊び心に満ちた劇的パフォーマンスにもとづくワークショップを企業にアウトリーチすることで、企業内の部局の人々の自己理解や人間関係理解を促すというものです。参加企業には、AIG やティファニーなども含まれています。これらのプロジェクトのいずれもが、ヴィゴツキーの考え方の拡張、つまり遊びの ZPD の中で大人の情動も開放されるという考え方にもとづいています。

主な著作

Lois Holzman 2009. *Vygotsky at work and play.* London *:* Routledge.

Lois Holzman & Rafael Mendez 2003. *Psychological investigations : a clinician's guide to social therapy.* New York : Brunner-Routledge.

Lois Holzman and John R. Morss (eds.) 2000. *Postmodern psychologies, societal practice, and political life.* New York ; London : Routledge.

Lois Holzman 1997. *Schools for growth : radical alternatives to current educational models. Mahwah, N.J.*: L. Erlbaum Associates.

Fred Newman & Lois Holzman 1993. *Lev Vygotsky : revolutionary scientist. London ;* New York : Routledge.

受賞

Faculty Development Award, NYS/UUP Professional Development and Quality of Working Life Committee (1995, 1993, 1986)

Empire State College Faculty Lectureship for Outstanding Scholarship (1982)

Visiting Psychologist, Moscow Institute of Psychology (Social Science Research Council) (1980)

関連サイト

http://eastsideinstitute.org

http://www.allstars.org

http://www.socialtherapygroup.com

http://www.performingtheworld.org

http://www.performanceofalifetime.com

http://loisholzman.org



拡張現実としての都市のデザイン

企画 : 第 9 回大会準備委員会
司会 : 上野直樹（東京都市大学）
話題提供者 : 上野直樹（東京都市大学)
土橋臣吾 (法政大学)
児玉哲彦 (頓智ドット株式会社 tab アンバサダー)
指定討論者 : 岡部大介 (東京都市大学)

シンポジウムのテーマ

都市は、物理的、地理的な環境であるだけでなく、そこに付加される情報や、そこでの様々な人々の動き、集まり方、留まり方、および、そうしたものの痕跡から構成されている。このように考えるなら、そもそも都市はハイブリッドなものであり、また、拡張現実的なものである。また、近年におけるソーシャルメディアやスマートフォンの一般化によって、都市はより拡張現実的なものとなっている。

こうした拡張現実的な都市では、例えば、空間とコンテンツがオーバラップしており、また、都市における痕跡は電子的にマーキングされ、共有されることで新たな都市空間が形成されている。このように、現代においては、都市で生活することは、拡張現実的な空間を自らデザインしつつ与えられた空間をブリコラージュ的、あるいは、戦術的に作り変えることを含んでいる。

本シンポジウムでは、以上のような意味での現代的なハイブリッドな社会空間やそこでの体験、活動、空間のデザインのあり方を明らかにするアプローチ探ることを目的とする。

activity scape としての都市のデザイン　上野直樹（東京都市大学)

都市は、都市計画、企業の都市プラン、開発プラン、公式の地図には収まり切らない諸側面を持っている。例えば、80-90 年代にかけて、「広告都市」として計画的にデザインされた都市が作られる同時に、もう一方で、渋谷系サブカルチャーの活動の場としての都市が形成されて行った。そして、90 年代インターネットの時代の開始以降、都市は、より一層、公式の定式化では捉え切れないものになっている。

公式的な定式化によって捉えられないハイブリッドな空間としての都市は以下のような特徴を持っているように思われる。

第一は、例えば、オタク文化にとっての秋葉原が象徴するように、都市は、コンテンツ空間にほかならない。

第二に、都市は、人々が残す様々な痕跡によって構成されている。その痕跡は、落書き、グラフィティから foursquare や twitter に至るまで多様な形態を持っている。

第三に、都市は、二重の舞台を構成している。例えば、人々は都市という舞台を生きながら、同時にその場所で、モバイルを通して、拡張的な舞台を生きている。

第四に、都市においては、サブカルチャーや様々な生活形態に応じて、様々な逃避空間が作り出されている。

以上のことが示すことは、人々は、都市において、日々、独特の activity scape（活動視界）というべきものを作り出しているということである。そして、この activity scape は、特定の場所と同時に、テクノロジーによって作られた拡張現実的なものである。シンポジウム当日には、以上のようなことを示す都市のエスノグラフィー研究、ソーシャルメディア、拡張現実のデザインの具体例を示しながら、第一に、ネット、リアルな場所を統合的に扱う現代的にエスノグラフィーのための視点を示す。第二に、都市のデザインを、都市計画といったことを超えて、テクノロジーのデザインを通した都市における活動のデザイン、activity scape のデザインとして考えていく視点を提案する。

モバイルメディアと都市経験―極端な利用者 (extreme user) に見るその可能的様態

土橋臣吾（法政大学）

モバイルメディアは私たちの都市経験をどのように変えてきた、あるいは変えていくのだろうか。この問いに対して

しばしば語られるのは、モバイルメディアが都市という場のリアリティを浸食する、といったイメージだろう。実際、都市に居ながらにしてその外部の誰かとケータイで繋がっているとき、あるいは、眼前の光景よりもスマートフォンの画面に表示される各種の情報に目を奪われているとき、都市空間の「いま－ここ」は、人々にとって最優先される状況の枠組みではなくなっている。そこでの私たちは、都市という場のリアリティよりも、むしろ私的な情報空間のリアリティへ帰属していくのだ。

容易に指摘できるように、こうした議論は、リアルな都市空間とバーチャルな情報空間の対立といった図式を想定している。だが、こうした図式を採用する限り、モバイルメディアが私たちの都市経験を何かしらの形でより豊かにしていくシナリオを描くのは難しいだろう。両者が対立図式に置かれる以上、そこでは、モバイルメディアが基本的に都市そのものの経験を毀損する何かとして位置づけられてしまうからである。

このような問題意識から、本報告では、ある一人の「若者」を追尾したシャドウイング調査の結果を参照しつつ、モバイルメディアと都市空間の別の関係の可能性を探ってみたい。ここで登場する「若者」はある意味で特殊なライフスタイルを持つ若者であり、携帯電話の極端なヘビーユーザーであると同時に、街に半ば住み着いているという意味で都市空間の極端なヘビーユーザーでもあった。したがって、そこで観察される事象に一般性はまったくなく、その点で、調査として明らかな限界を抱えている。

だが、プロダクトデザインやサービスデザインの分野で用いられるように、こうした極端なユーザーの観察という手法は、変化の波頭を捉え、未だ見えていないが潜在的にあり得る物事の姿、すなわちここでの関心に即して言えば、モバイルメディアと都市空間の関係の可能的様態を探るのに適している。そして実際、この「若者」のふるまいからは、モバイルメディアと都市空間が対立というよりむしろ融合していく契機を見出すことができ、それを「拡張現実としての都市」と呼ぶことも可能だろう。

情報フェロモン : 興味関心のマーキングによって都市を構造化する

児玉哲彦 (頓智ドット株式会社 tab アンバサダー)

インターネット上での消費行動として近年注目されつつあるのが、オンラインの情報発信を通じて実店舗での購買やイベントへの集客といった都市の中でのオフラインでの行動喚起を実現する Online to Offline（O2O）マーケティングである。既存の調査によれば、国内のインターネットに喚起された消費はすでに年間 22 兆円に上るという。

一方で、O2O マーケティングは未だ普及前夜である。この理由として、筆者は既存の多くの位置情報メディアにおいて情報が空間的に構造化されていることが問題だと考える。都市の情報において、位置情報は行動のためのメタ情報としては有用である。一方で、そもそも都市の情報に興味を持つのは、食やファッションなどのジャンル、またその中での趣味嗜好との合致などが先に存在することが必要である。

そこで、筆者は、位置情報サービスにおける情報の構造化手法である情報フェロモン手法を提案する。本手法においては、動物が特定の場所において取った行動や得た体験の内容に応じて体外に分泌し、同種の他の個体の振る舞いに変化を促すフェロモンのメタファーを用いる。特定の場所の利用者が興味関心に基づくマーキングを行い、他の利用者が参照できるよう場所の情報を構造化する。本手法は、別の観点からは、オンラインの情報におけるソーシャルブックマーキング手法を都市の中の場所に対して適用するものであると言える。

本発表においては、情報フェロモン手法を用いたサービスの実装例を 3 件紹介する。まず、行動履歴を用いた屋内展示会ガイドである MapTop である。利用者の 2/3 が展示会場で興味深いブースの発見に有用だったと回答した。次に、秋葉原電気街を対象にしたソーシャルブックマーキングサービスであるここ HORE アキバである。31 人の利用者へのアンケートの分析を通じて、街についての知識の構造化への寄与と、街への親しみが増す可能性がみられた。最後に、街への興味関心を行動に変えるライフスタイルメディア、tab である。tab については、6 月中に一般公開を行う。

これらの実装例において見られたように、情報フェロモン手法は、都市空間を興味関心に基づいて構造化し、行動を喚起する O2O サービスを実現する上で、有用であると考えられる。特に tab については一般公開と継続的な運用を通じて、O2O のプラットフォームとして展開してゆく。

「つくること」としてのつながり

企画・司会：岡部大介（東京都市大学）・石田喜美（常磐大学）
話題提供者：岡部大介 (東京都市大学) ・加藤文俊 (慶應義塾大学)
木村健世 (アーティスト)
冠那菜奈（メディエーター、ぐるっこのいえ）・石幡愛（東京大学大学院教育学研究科）
佐藤慎也（日本大学）
指定討論者：松嶋秀明（滋賀県立大学）

0．はじめに：「場」を志向するネットワークから「つくること」を志向するネットワークへ

従来、人や活動をつなげるための方法として、コミュニティ・カフェなどの「場づくり」の実践が注目されてきた。しかし近年、ハードの整備へと向かいがちな「場づくり」の実践よりも、むしろ、「何か」をつくり (あるいは、つくりあげようとし)、それを理念やイメージとして共有することによって、人や活動のつながりが生み出される実践が行われている。

山崎亮（2011）は「コミュニティ・デザイン」（community design）という概念を提起し、公園や公共施設などのハード＝モノをつくるよりも、それを使用する人々のネットワークをつくることが重要であることを示した。しかし、人々のネットワークは、「つながること」そのものを目的としてつくりだされるものなのだろうか。山崎 (2011) に取り上げられている事例――主婦たちが特産品を開発する事例や、地域のための乗り合いバスを走らせる事例など――が示しているのは、むしろ、そのコミュニティにおいて人々が共有する「何か」――コミュニティの魅力や課題、理念、イメージなど――を志向して、人々がつながっていく姿である。これに関連する観点として、上野 (2012) による「オブジェクト中心の社会性」（object centerd sociality）の議論においては、現代のウェブ技術者たちが、「Linux」という具体的なモノ（＝新たな OS）をつくることを通じて、野火的なネットワークを形成した事例が検討されている。

これらの事例に共通しているのは、人々が「何か」をつくることを通じてつながり、ネットワークを形成するということである。人々は、コミュニティ・カフェ等の「場」が存在するという理由のみでつながっているわけではない。また、人々とのネットワークを形成したいという目的のみでつながっているわけでもない。むしろここで重要なのは、「何か」を志向し、それをつくりだそうとすることではないか。この考えを敷衍すれば、つくりだされる「何か」は必ずしも重要ではなく、むしろ、そのつくりあげようとするプロセスの中で生成されるもの―― 人やモノとの関係性や、スピンオフ的な活動――に焦点を当てた実践を構想することが可能になる。

本シンポジウムでは、「『つくること』によるつながり」に様々なかたちで関わる複数の話題提供者にそれぞれの実践を報告してもらう。その上で、上記のような「つくること」を志向する実践によって生み出される新たなつながりのありかたについて議論したい

1．事例１：「墨東大学」――「大学」をつくることによるつながりの可視化――

「墨東大学（ぼくとうだいがく）」は、地域コミュニティとの関わり方を＜大学＞というメタファーで理解し、日常生活や社会関係のあり方について考えることを目的としたプロジェクトである。本プロジェクトでは、墨東エリア（隅田川、荒川、北十間川によって囲まれた、墨田区の北半分を占める地域）を、「キャンパス」および「大学まち」に見立て、本プロジェクトに関わる大学教員から地域住民、地域で活動を行うアーティストまで、さまざまな講師陣による講義・実習プログラムを提供するとともに、大学らしさを演出するための仕掛けを積極的・実験的にまちなかに埋め込むことで、新たなコミュニケーションの誘発を試みた。本シンポジウムでは、「大学」をつくることを通じて生じた人々のつながりの変化について報告する。

2．事例２：「秋葉原ネットワーク」「余白ネットワーク」――「枠外感」の共有によるつながりの形成――

「秋葉原ネットワーク」（2011 年）および「余白ネットワーク」（2012 年）は、自分の属するコミュニティに対する「枠外感」（≒不適応感）を、その人が新たな居場所を「DiY」する（自力で作る）ための原動力と捉え、既存のコミュニティの「枠」（価値観、規範）に対して、オルタナティブの入り込む「余白」を作るプロジェクトである。本プロジェクトの特徴は、参加者の趣味や一見「無駄な」特技に従って、昆虫採集、散歩、進路相談会、パーティなど、仮設的なイベン

トを小規模で多数実施し続ける点にある。個々のイベントが目的とする「何か」には、ほとんど意味がなく、そこから派生する人間関係や活動も、それ単体としては、それほど重要ではない。むしろ、一見くだらない、しかし、その人にとっては大切な場や時間をつくる行為、そして、その可能性を否定しない態度にこそ意義がある。それは、既存の枠を否定するでもなく、自らが主流になるでもなく、亜流が亜流のままで、枠の隅っこに小さな「余白」を作る行為であり、それを許す態度である。

本シンポジウムでは、これら小規模イベントを多数行う中で見えてきた人々の関係性のあり方について報告し、モーリス・ブランショの「明かしえぬ共同体」を参照しつつ、異なる者が共に生きることについて考察する。





３．事例３：「演劇」を通じた地域・コミュニティの可視化

近年、演劇と社会学的エスノグラフィーを組み合わせたプロジェクトが実施されている。

本シンポジウムでは、このようなプロジェクトの事例として、山手線各駅周辺に設定した「避難所」を軸に、都市の不可視なコミュニティと観客を繋ぐシステムの構築を試みた『完全避難マニュアル東京版』（高山明）、空き家にギリシャ劇の一家がかつて暮らしていたという設定で、家や地域を再発見していく『墨田区在住アトレウス家』（長島確）などを報告するとともに、「劇場」というハードを使用しない、劇場外の「演劇」をツールとして用いた実践の意義や展望について議論する。



地域における自立共生をめざす活動とその繋がりの形成

企画：第９回大会準備委員会
司会：中村雅子（東京都市大学）
話題提供者：ソーヤーりえこ（東京都市大学）
中村雅子（東京都市大学）
杉浦裕樹（NPO 法人横浜コミュニティデザイン・ラボ）
指定討論者：土橋臣吾（法政大学）

シンポジウムのテーマ

地域における農業、エネルギー問題、地域通貨、コミュニティづくりなどの活動は、直接にイリイチの影響を受けているわけではないが、イリイチの言う「自立共生」をめざすという志向性を持っているように思われる。こうした地域の活動は、いわゆる上からの地域活性化のための活動とは異なっており、むしろ、商品経済に規格化された生活、労働に全面的に依存するのではなく、自分たちのエージェンシーを取り戻そうとするものである。

また、地域通貨、農業、エネルギー問題への取り組み、コミュニティづくりなどの活動は、テーマ的には異なったものだが、社会的には相互の活動、コミュニティは繋がっている。そして、繋がりは全国的なものでもある。その繋がりは、いずれもが、エージェンシーを取り戻そうという方向の活動によって形成されていると考えることもできる。このシンポでは、こうした地域の「自立共生」をめざす活動に焦点を当てることで、具体的にはどのような仕組みを作り出すことで個々の参加者やコミュニティがエージェンシーを取り戻したり、新たなエージェンシーを作り出しているのかを明らかにする。

地域における交換様式の再編による新たな繋がり方　ソーヤーりえこ（東京都市大学）

現代社会において商品交換は支配的であり、人々は労働やものを商品として貨幣を媒介として交換することで生活している。また、流通や経済の仕組みはすでに与えられた動かしようのない社会的なアーキテクチャであるように見える。しかし、もう一方で、地域では、商品交換には還元できない交換や新しい働き方、生活の方法、繋がり方を模索する試みも数多くなされている。

例えば、地域通貨は、ローカルにのみ使える通貨を用いて、新しいものや労働の交換様式を作り出すことで、新しい働き方、繋がり方、生活を作り出そうという試みである。あるいは、近年では、個々人の持っているもの、道具、スキルなどのアセット（資産）をインターネットで公開し、地域で、交換しあうというアセット・マッピングといった活動も盛んになってきている。

安価で簡単に入手できる既成部品や、廃品や中古部品を利用したトラクターやソーラー発電装置などの農業機械やその他の装置の設計図をオープンソース的に公開し、自作でき、自らメンテ可能な開拓機械を作っていこうという運動も、また、知識や中古部品というアセットをマッピングする活動の一種であると見なすこともできるであろう。

さらに、フリー・エコノミー運動の一例として、貨幣を使わずに生活をするという活動も行われている。また、商品経済の仕組みを利用しながらも、一つのビジネスの収入を月３万円に限定することで、より、自由な働き方、生活の仕方を目指すビジネスのあり方を模索するといった事例もある。

こうした事例は、少なくともローカル、あるいは、部分的には、私たちが、商品とは異なった交換様式のもとで、もの、道具、スキル、労働といったものを交換し、繋がり、コミュニティを形成することが可能であることを示している。

こうした事例は、このような新しい交換様式が、単に古くから存在する「贈与と返礼」の復活というものではなく、インターネットによる新しい繋がりを背景に持っていることも示している。また、この新しい交換様式は、商品交換とは全く別の世界を作っているというよりは、商品交換の形態をブリコラージュ的に再編することで、ローカルに新しい流通や経済の仕組みやコミュニティを生み出そうとしている。この発表では、以上に示したように、地域において試みられている個々人の持っているもの、道具、スキルなどのアセットの交換様式の再編の事例を見ることを通して、新たな人々の繋がり方、コミュニティ形成、働き方および新しい活動のエージェンシーの生成の可能性を探っていく。

「まちの記憶」を語ることで、地域における主体性を取り戻す
―市民デジタルアーカイブ活動―　中村雅子（東京都市大学）

人々が持つ街の歴史や情報を情報コミュニケーション技術（ICT）で共有するというアイデアは、デジタル・メディア

の普及当初からさまざまに実践されてきた。中でも 1997 年から 2000 年にかけて行われた Living Memory Project は、ICT を特定の地域の場所性と結び付け、コミュニティの中で、地域の記憶や情報を媒介とした新しいコミュニケーション空間を生み出す試みとして示唆に富んでいる。日本においても、ICT を活用して地域の歴史や情報を活用して行こうとする試みが数多く行われているが、市民デジタルアーカイブはそのひとつと位置づけられる。

地域デジタルアーカイブが生まれるきっかけのひとつは、1996 年に国の施策として「デジタルアーカイブ推進協議会（JDAA）」が発足されたことであり、各地で関連した活動が推進されることになった。この協議会では、データの権利関係の検討や、記録、撮影、スキャニング、データベース構築などの技術的検討に重点が置かれ、2005 年には、おおむねその目的を達成したとして解散した。このような試みは、大企業や公的組織からの支援が終了した時に同時に終息していってしまうことが少なくない。しかしデジタルアーカイブについては、JDAA の解散後も市民が中心になって活動が続けられたり、新たに生まれたりしている例もある。

関東近県だけでも地域資料デジタル化研究会の「甲斐之庫」や「あおばみん」、「港南歴史協議会」、「横濱写真アルバム」など、それぞれ独自の問題意識の元に活動を行っている。そのような市民主体の活動は、国の施策と異なり、単に古い記録の保存、蓄積ではなく、他の街づくり、地域活性化の活動と連動している。またインターネットなどを通じた情報提供やコミュニケーションだけでなく、対面のワークショップや紙媒体による成果の出版など、より広い活動やコミュニケーション手段の中に埋め込まれている。ブログやツイッタ、SNS など人々が web2.0 系のメディアで個人としても容易に情報発信できる環境が豊かになってきたことからも、新たな可能性が生まれている。

本報告では、住民が単に政府や行政主導の活動の協力者として動員されるのではなく、自ら活動を読み替え、アレンジしているデジタルアーカイブ活動を、自ら地域の歴史や情報を意味づける主体としてのエージェンシーを回復しようとする試みとして捉えなおす。これらの活動は、それぞれに経済的基盤が不安定で、必ずしも住民全体に広がりを持てないなど、多くの困難を抱えているが、活動の維持や発展にむけて、中心となる市民グループだけでなく、行政の複数のセクションや地域図書館、多様な市民活動グループ、地域メディア、研究者などが関与したせめぎあいが生じていることを紹介し、エージェンシーの（相互）生成という観点から考察する。

街づくりのための新しい繋がりとエージェンシーの形成

杉浦裕樹（横浜コミュニティデザイン・ラボ）

自分の街をいい街、素敵な街にしたいと思っている人は多いに違いない。そして、どのような人も、街づくりに貢献できるようなポテンシャル、知識、スキル、経験を持っている。街づくりにおいて、こうしたポテンシャルの発揮を妨げているものは、例えば、共感できるテーマでともに街づくりをできる人たちとの出会いがなかったり、時間的制約だったりといったものであろう。しかし、逆に、もし、共感できるテーマでともに街づくりをできる人たちとの出会いの機会が多くあり、また、使える時間に応じて多様なコミットメントが可能な活動が存在しているなら、地域の多くの人たちのポテンシャルを街づくりに生かせるに違いない。そして、地域の多くの人たちのポテンシャルを街づくりに生かせる機会、場をデザインするために必要な条件は、街づくりのイベントや街づくりに関係した人々、活動の所在情報を可視化することである。

ヨコハマ経済新聞や横浜コミュニティデザイン・ラボが、目指し、また、行なってきたことは、こうした街づくりに関連する人々や活動の所在情報を地域の人々に可視化し、また、共有するといったことである。こうしたことを行うために、2000 年代から広がってきた web2.0 のメディアは、その手段を与えてくれたように思われる。私たちが渋谷経済新聞に続いてヨコハマ経済を始めたのは 2004 年であった。当時、前年にはダイアリーのサービスが開始されブログが普及し始めていた。また、同年には mixi のサービスがスタートした。

こうした背景の中で、私たちは、私たちなりの価値や関心に応じて、街におけるイベントや変化を新しいメディアによって発信してきた。私たちの発信は、Twitter や Facebook などのソーシャルメディアを通して、さらに拡散され、共感を呼び、地域の中で街づくりに関わるいろいろな繋がりを形成してきた。そして、その繋がりは、街づくりのための新たな活動を生み出し、また、多くの人々の参加を可能にしてきた。

以上のようなヨコハマ経済新聞や横浜コミュニティデザイン・ラボの活動は、本シンポジウムのテーマの言葉を借りるなら、まさに、地域における新しいエージェンシーを生み出すための環境を作るものだったと言える。当日の発表では、横浜における新しい繋がりの形成とそれに伴う新しいエージェンシーがどのように生まれていったかを実際の活動事例に即して紹介する予定である。

野火的活動：学習、活動の捉え直し

企画：第９回大会準備委員会
司会：茂呂雄二（筑波大学）
話題提供者：上野直樹（東京都市大学）
茂呂雄二（筑波大学）
香川秀太（大正大学）
指定討論者：Lois Holzman
(East Side Institute for Group and Short Term Psychotherapy)

シンポジウムのテーマ

現代の状況は、Yrjö Engeström(2009) によれば、野火的な活動 (wildfire activities) が拡大している時代である。野火的な活動とは、分散的でローカルな活動やコミュニティが、野火のように、同時に至る所に形成され、ひろがり、相互につながって行くといったことを伴った活動をさしている。こうした活動のつながりは、ポストモダンの概念を使うなら、竹の地下茎のように、あるいは、樹木の根と菌類の共生形態のように複雑に、かつ、多様に絡み合ったリゾーム的な形状を取っている。リゾームという概念の出所であるポストモダン思想は、すっかりトレンドではなくなったが、時代状況は、ますますポストモダン化している。

こうした野火的な活動の中で、人々は特定のコミュニティの中に生き、活動を行うだけではなく、様々な場所、コミュニティの間を移動しながら、新たな活動を生み出している。

こうした活動は、行政組織、企業、学校といった制度的な組織や個々のコミュニティの枠を超えてひろがり、また、商品経済の枠組みでは収まりきらない労働や知識の交換形態を持っている。

本シンポジウムでは、主に、野火的な活動に焦点を当てることで、活動、学習、人々の繋がりといったことの再定式化を試みる。

野火的活動におけるオブジェクト中心の社会性と交換形態　上野直樹（東京都市大学）

野火的な活動の中で、人々は特定のコミュニティの中に生き、活動を行うだけではなく、様々な場所、コミュニティの間を移動しながら、新たな活動を生み出している。野火的な活動は、Wikipedia や Linux といった例に見られるように、制度的な組織や 地域コミュニティを超えて多くの人々が協調して何かを生み出すピアプロダクション (peer production、Tapscott & Williams、2007) という形で行われている。しかし、野火的な活動は、インターネットに限定されるものではなく、例えば、赤十字、スケートボーディング (Engeström、2009) や地域における街づくりのための市民活動、震災時の 市民による連携活動といったものの中にも見いだすことができる。こうした活動は、行政組織、企業、学校といった制度的な組織や個々のコミュニティの枠を超えてひろがり、また、商品経済の枠組みでは収まりきらない労働や知識の交換形態 を持っている。現代社会における野火的な活動の拡がりは、改めて、学習、人工物、資源 の布置といったものの捉え直しを迫っている。例えば、こうした場合の学習は、知識や情 報が上流から下流へ、あるいは、知識や情報を持つ者が、持たない者に与えるという「垂直的」な形では表現することはできない。むしろ、学習は、コミュニティ、人々、活動の 間で「水平的」、あるいは、相互的に構成される事象である。活動論や状況論にとって、このような「水平的」学習を具体的にはどのように見て行くことができるかということが 課題になるであろう。また、野火的な活動を支える様々なアレンジメントをどう行うべきかが新たな課題になるであろう。

この発表では、ソフトウェアにおけるオープンソースを中心に野火的活動おける社会的な繋がりのあり方を「オブジェクト中心の社会性」および有形、無形のものの「交換形態」に焦点を当てて明らかにする。また、こうした作業を行った上で、学習を見る観点の 再定式化を試みる。

日常・贈与・コミュニティー　茂呂雄二（筑波大学）

活動論は、生活場面や制度場面の実践における、学習と発達を研究対象とする。活動論は、分析のユニットを個体から集合に拡張して、私たちの実践の全体性（トータリティー）をある程度確保させた。全体性への目配りによって、心理学とくに認知論においては、心理過程を文化や社会との関係から理解すべきという研究のガイドラインとしてある程度の社会的な承認を受けることができた。しかしながら同時に、社会あるいは文化を変数とみなして心理過程から遊離させるという、根本的な誤解が残る場合も少なくない。しかし活動論、とくに活動システム論が総てを解決した訳ではない。全体性の眺望を与える戦略は、活動という、そのままでは可視化できない対象へのアクセスを可能にしたが、逆に活動のイメージを固定化するという負の面も与えた。このことは、活動システム論が産出＝生産を中心にしたことと無縁ではないように思える。システムは、主体が媒介を利用して何らかの対象を産出する、出力のシステムとイメージされる。この場合、コミュニティーは、出力を支えるべく用意された、スタティックな集合と思い描かれる。規則と分業を与えられ、その集まりが成熟するダイナミズムや時間性のない要素として切り取られる。人々の集まりのダイナミズムを射程におさめるのに必要なことは、交換（インタコース）の視点から、実践を見直すことである。実践を、日常的なここそこの、多数で多様な交換から成立している過程として見直すのである。もちろん商品＝貨幣交換も私たちの日常実践を作るが、これ以外にも、多数で多様な贈与によっても、人々の出会いと集まりが作られる。野火的活動の野火性とは、この贈与による人々の集まりにほかならない。

活動のオブジェクト、分裂なき関係性、野火的なイノベーション　香川秀太（大正大学）

野火的活動の議論は、従来、研究されてきた、教室の活動や医療実践といった、比較的まとまりのある、共同体や集合体やフィールドに着目して研究をすすめるものとは異なる、新たな方向性に我々に目をむけさせる。つまり、きわめて流動的で、分散的で、境界が曖昧で、中央組織的な力によらない実践をとらえる視点を示す。

しかし、次のさらなる議論が必要と考える。一つは、野火的活動の概念を、従来の共同体、集合体ありきの議論に再考を迫るものと解釈した上で、我々は、実践を、境界を引いた共同体からではなく、むしろ「境界のない関係の拡がり・動き」を前提にして見るべきだと主張したい。共同体論と関係論とは、従来は混同されるきらいがあったが、両者を一旦区分し、関係性が根源にある議論を、マルクス論もふまえて試みたい。

二つ目は、野火的活動（に限らないが）を捉える核となる、「オブジェクト」とは一体どういうものか議論したい。上野直樹（2011）は、人と人とのネットワークを記述するだけでなく、むしろ、具体的なオブジェクトを中心に記述するアプローチをとらなければ、実践の内実は依然不明であると重要な主張をしている。他方、野火的活動の例として Yrjö Engeström(2009) 自身があげた野鳥観察やスケートボーディングでは、「野鳥」や「都市空間」が、オブジェクトとされる。オブジェクトは、きわめて曖昧で未完で多義的で過渡的ものであるがゆえに、活動は野火のように拡張し、特定の管理・経営者の力の及ばない、手がつけられない形で、進化、派生、展開、或いは一時的に消失していくものであろう。オブジェクトとは一体どういうものか、改めて議論したい。

三つ目は、野火的活動を引き起こす契機となるような（どのような）実践をどうデザインしていくかという議論である。ここでは、Lois Holzman の取り組みや、先のオブジェクトの議論もふまえた、実践的な取り組みの提案、つまり、野火的にイノベーションを引き起こしていく実践の提言を行いたいと考えている。これを、ここでは、変革的実践のうねりを巻き起こす芽となるもの、「変革の結節点＝ネクサス・オブ・イノベーション」ないし「変革の交差点＝イノベーション・クロスオーバー」と呼び、批判覚悟のうえで、これを提案したい。

越境のデザイン：組織を超えた協働へ

企画 : 青山征彦（駿河台大学）・香川秀太（大正大学）
共催 : 日本認知科学会　教育環境のデザイン分科会
司会 : 青山征彦（駿河台大学）・香川秀太（大正大学）
倉石一郎（東京外国語大学）
長岡　健（法政大学）
話題提供者 : 有元典文（横浜国立大学）
東村知子（奈良文化女子短期大学）

企画趣旨

近年、活動理論の領域で注目されている概念に越境（境界横断：boundary crossing）がある。越境とは実践のコミュニティの境界を超えて協働することを指す。いわば境界を越えた協働のスタイルである越境は、たんに理論的な概念にとどまらず、現実の社会でもさまざまな実践が見られるようになってきた実際的な問題でもある。

越境に関連する研究や実践は, 国内外の様々な領域で, 次第に増大しつつある。しかし、ともすると組織間, 職能間の境界を越えることが理想化されたり，あたかも越境さえすれば良い実践であるかのように，単純に語られたりする場合も少なくない。

しかし，それは，越境という魅力的な概念が醸し出す，甘い誘惑，落し穴でもある。むしろ，こうした越境という実践ないし概念は，現実には曖昧で捉えにくい，複雑さを抱えるものだろう。そこで、今回のシンポジウムでは，そもそもなぜコミュニティを横断する必要があるのか（横断せざるを得ないのか），境界をまたぐことの意味とは何なのかについて議論したい。具体的事例をふまえつつ，経営学，社会学，活動理論，そして社会構成主義という，まさに，相違もありつつ相互に重なる，複数の立場から検討を試みる。

境界をめぐるポリティクス：越境論の現在

青山征彦 (駒河台大学) ・香川秀太 (大正大学)

エンゲストロムら（1995）によって、越境（境界横断）という概念が提唱されて、十数年が経過した。この概念が、実践のコミュニティの間の境界をまたいで行われる協働に光を当てた功績は大きい。

一方で、近年は、越境の難しさが議論されることも多くなってきた。異なる実践のコミュニティの垣根を越えて協働することは、それほど容易なことではないはずだ。というのは、コミュニティは、本来は境界を作ることによってコミュニティとして成立しているはずだからである。こうした見方からは、越境（境界横断）だけでなく、境界生成もまた、検討すべき問題となるだろう。

あるいは、越境のプロセスにおいて、境界そのものが変化していくこともありえる。同時に、越境者のエージェンシーもまた、変化していくことだろう。越境についての議論を今後深めていくためには、こうした境界をめぐるさまざまなポリティクスを検討する必要があるだろう。本発表では、越境に関する議論が、これから何を議論していくべきかを論じたい。

境越境者はいかにしてプロフェッショナリズムの罠に落ちたか：
米国スクールソーシャルワーカーの歩みからの示唆　倉石一郎 (東京外国語大学)

20 世紀初頭の誕生期から 1940 年代まで、米国のスクールソーシャルワーカーはビジティング・ティーチャー（訪問教師）の名で呼ばれていた。その初期の姿は、移民の大量流入、高まる児童労働排除の声、就学義務圧力の増大によって沸騰する大都市の学校現場と、スラム地区の家庭・地域との間を行き来し、その「結び目」たらんとする、越境者そのものであった。その原型は慈善組織協会の「友愛訪問員」で、およそ職業、まして専門職と結びつけられるものでなく、他方で都市セツルメント運動を基盤にすることで従来のチャリティを批判するラディカル性を秘めていた。ところが、ビジティング・ティーチャーはその後、米国社会から徐々にその存在意義が認められ、評価が高まってくるまさにその過程のなかで、専門職主義（プロフェッショナリズム）の罠におちいり、その性質を変貌させていった。本報告では、ラディカルな慈善事業から出発した訪問教師が、学校教育というフィールドに＜越境＞し、教師あるいは後に精神科医という強固な「他山のプロフェッション」と接触したことから、ソーシャルワークという職域の確立に向かっていった過程をふりかえる。それを通して、＜越境＞にひそむ困難を考える材料を提供できればと思う。

越境をめぐる組織内の利害関係　長岡健 (法政大学)

「学習」という言葉が企業内で違和感なく使われ、現場経験を通じた「熟達化」がビジネスの文脈で語られ始めたのは遠い昔ではない。実際、OJT を「経験学習」と読みかえ、職場を「実践共同体」とする見方が広まってきたのは、この 5 年程のことだ。

一方、「イノベーション人材の育成」が重要テーマとなってきたのもこの時期だ。そして、時代遅れとなった経験知や、組織の因習を捨て去ることが「学習棄却」と呼ばれ、この言葉もまた浸透しつつある今日、「越境」はその実現手段として注目され始めている。

本報告では、「熟達化としての学習」と「越境を通じた学習棄却」という、両立困難とも思える 2 つの活動をめぐる利害関係が複雑に交錯している企業内人材育成の状況に着目する。そして、熟達化やイノベーションをめぐる組織内の利害関係を読み解くことで、経営組織における越境実践者の不安定な位置づけを明らかにすると同時に、経営における越境という活動の可能性と課題について検討してみたい。

「被災地」からみた風評被害〜茨城・大洗町の取り組みを軸に

企画：伊藤哲司（茨城大学）
矢守克也（京都大学）
八ッ塚一郎（熊本大学）
質的心理学会東日本大震災ワーキンググループ
『質的心理学フォーラム』編集委員会
話題提供者：近藤誠司（ＮＨＫ大阪放送局）
山崎一希（フリーディレクター）
大洗町のみなさん
「大洗応援隊！」のみなさん
伊藤哲司（茨城大学）
矢守克也（京都大学）
八ッ塚一郎（熊本大学）

本企画の趣旨

東日本大震災ワーキンググループ（震災ＷＧ）では、2011 年 10 月 8 〜 10 日、2012 年 3 月 5 〜 7 日の２度にわたり、被災地でもある茨城県東茨城郡大洗町を主たる会場として研究合宿を実施した。研究合宿の参加者、ご協力をいただいた地元の方々とともに、被災の実相をあらためて学ぶとともに、復興支援と共同研究の新しいかたちを模索することが本シンポジウムの目的である。

東日本大震災のもたらした惨禍はあまりにも大きく、またあまりにも広範にわたっている。復興への取り組みはなお継続中であり、地域ごとの課題もまた多岐にわたる。被災地や復興支援を一括りで一般的に論じることはできないし、またすべきでもないであろう。具体的な事例に根ざし、多様な語りに耳を傾けながら思考するという質的研究のスタンスのもと、本シンポジウムでも、ひとつの地域から被災と復興の実相を照らし出し、そこで発生する問題と、研究者の課題そして役割を多角的に検討したいと考える。

大洗町

北海道と結ぶフェリーの発着港、茨城県内でも有数の漁業基地、首都圏から数多くの海水浴客を集めるビーチなど、大洗町は海とともに歩み、海とともに栄えてきた町である。シラス、アンコウ、カツオなど多彩な海産物に恵まれ、海のレジャーと観光によって支えられてきた。海岸地域には古くからの旅館や割烹が軒を連ねている。さらに、海と海岸についての学習活動、ライフセービング、ユニバーサルビーチ（バリアフリービーチ）など、海のレジャーを充実させ安全を高める先進的な取り組みでも知られている。

2011 年 3 月 11 日、大洗町も激しい揺れと 4 メートル超の津波に襲われた。漁港や港湾施設、海沿いの旅館などに甚大な被害が生じている。海岸から住宅地まで低地が連なっているため、水は町の中心地域まで達し一般家屋にも多くの被害が出た。

幸いなことに、大洗町では津波による人的被害はなかった。一時的な避難生活、泥かきなどの作業を経て、津波災害からは早期に復旧を遂げることができた。しかし、マスメディアの報道や、ＳＮＳで流れた風評のため、町を支えてきた海のレジャーと観光は大きな打撃を受け、いまもなお十分には回復していない。

当日の話題

シンポジウム当日は、以下に述べる大きく３つの立場から、被災の実情と復興への道程、風評という問題と新たな取り組み、質的心理学の意義と課題について報告し討議を行う。

第１に、大洗町のみなさん、「大洗応援隊！」と関係者のみなさんから、東日本大震災と津波災害、被害の詳細と復旧のプロセスについて話題提供をいただく。あわせて、風評被害の実相、報道や研究に対する不満、要望などについても一言いただく。

先述した震災ＷＧの研究合宿でも、大洗町の地元の旅館経営者、海の活動に携わるＮＰＯ関係者の方々から、風評被害の深刻さとその影響について多くのお話をうかがった。たとえばある新聞は、低気圧による遊泳禁止で無人のビーチを「原発事故の影響で人っ子一人いない」と報じたという。そうした傾向はブログやＳＮＳといった新興のメディアにも共通しており、町の復旧には言及せず、瓦礫や放射能といった話題ばかりを取り上げがちだったとのことである。

その一方、地元では、安全と安心をアピールし、レジャーと観光の人々を呼び戻す取り組みが続けられている。観光とレジャーの関係者、住民や若者、学生で結成された「大洗応援隊！」をはじめ、さまざまな活動の様子と課題についてもご発表をいただく。

第２に、質的心理学会の会員であり、メディアでの活動に携わっているお二人（近藤、山崎）から、メディアによる報道や番組作りの特性、その構造的な問題、新旧メディアの相違と共通点や内在する困難などについて話題提供をいただく。

大洗町では、津波発生時、防災行政無線の呼びかけで「命令口調」が使われたことも知られており、報道とメディアのあり方に示唆を与えている。他方、前項で述べたように、原発事故という未曾有の事態にあって、従前からのスタンスや常識的な判断に基づく報道、発言への問い直しが要請されてもいる。

メディアに携わる職業人としての見解や新たな思考について発言いただき討議を行う。あわせて、地元の人々と外部の人々、研究者を媒介する立場から、地元への提言、研究者に対する苦言や課題などについても一言をいただく。さらに、視聴者や一般住民が主体的に参加し関与する新たな番組やメディア作りなど、最前線での取り組みとそのご経験について話題提供をいただき、多角的な議論を行いたい。

第３に、震災ＷＧのメンバー（伊藤、矢守、八ッ塚）から、研究者による地域活動への支援とその可能性、内外の災害研究と復興支援の具体例と課題、アクションリサーチと質的研究への新たな視点など、幅広い観点から話題提供し討議を行う。

未曾有の大災害にあたっては、息の長い復興支援が必要であり、研究者にも長期的な視座と新しい発想とが必要である。大洗における茨城大学をはじめ、地元の研究者、研究機関による支援の取り組みは質的心理学にも多くの示唆を与えるであろう。本シンポジウムや、震災ＷＧによる研究合宿もまた、ささやかではあるがそうした試みの一端をなすものである。

もちろん、本シンポジウムで取り扱う話題は、東日本大震災という巨大な出来事のなかのごく一部、限られた側面に過ぎない。あくまでもひとつの地域に定位しながら、そこにかかわる多くの人々とともに議論を深め、さらにフロアの方々と多角的に問題をとらえ、示唆を得ていきたい。質的心理学と研究することの役割を問い直し、そして何より、地域への貢献と復興支援の一助になりたいと考える。

専門職種におけるプロフェッションの生成と継承
―対人ケア職における実践知の継承―

企画：日本質的心理学会研究交流委員会
司会：上手 (小嶋) 由香（安田女子大学）
話題提供者：吉村夕里（京都文教大学）
鮫島輝美（京都光華大学）
古賀松香（京都教育大学）
前盛ひとみ（香川大学）
指定討論者：竹内一真（京都大学大学院）

企画趣旨

傷ついた人を手当てすること、子どもを地域で育てること、悩める人の話に耳を傾けること、その人の地域での居場所を探すこと、こうした人が人をケアする関わりは、家族や地域によって担われてきた日常的な営みである。このように本来的には日常の営みであったものが、それぞれの時代や社会のニーズに合わせ、一つの専門職として体系化され、さまざまな対人ケア職が生まれてきた。しかし、対人ケアの専門家としての関わりでは、理論や技法といった概念的な知として習得したものが、生身の人を対象とする実践の場では全く役立たないこともある。ここで必要となるのは、現実の実践を積み重ねることで身についた実践知とも呼ぶべき力である。

現在、概念的な知の習得においては、ビジュアル化されたわかりやすいテキストの増産や、専門分化された養成システムなど、学ぶ環境のシステム化・効率化が進んでいる。しかし、実践知にもとづくプロフェッションの生成には、体験が熟成し、身につくまでに一定の時間が不可欠である。効率化を求める現代社会のスピードは、一人の人間が専門家として育つことを待つゆとりを欠く危険を孕んでいる。また、学び手側にも、じっくりと専門性を身につける構えは敬遠され、容易で素早く専門性を身につけることを求める傾向が見られる。それぞれの対人ケア職の養成の現場では、こうした現代社会特有の共通の課題を背負ってるように感じられる。

本企画では福祉、看護、保育、臨床心理といった対人ケアに関わる専門家養成において、どのように個としてのプロフェッションが生成され、次世代へと継承されているのかを検討し、現代における専門職種養成における課題を共有したい。さらに、指定討論者として、伝統芸能の技能の継承について研究を進めてこられた竹内氏を迎え、実践知の継承について議論を深めたい。

話題提供の概要

対人援助の学習環境における利用者の位置づけ　～精神保健福祉士の養成をとおして～

吉村夕里（京都文教大学）

福祉専門職の養成教育では保健・医療・福祉サービスの利用者 (以下 : 利用者) との接触は欠かせず、とくに実習教育にとって利用者は不可欠な存在である。にもかかわらず、利用者が福祉専門職の養成教育のなかで果たしてきた積極的な役割についての論考や、利用者が福祉サービスや養成教育に参画する権利についての論考は十分とは言えない現状がある。

実践力の向上を目指した福祉専門職の実習教育では、カリキュラムや指導者の問題等に焦点があてられがちであるが、対人ケアの学習環境における利用者の位置づけの問題にも焦点をあてる必要がある。近年、障害福祉に関わる利用者参画では、身体障害当事者の英国の障害平等研修の紹介が行われてはいるものの、身体障害以外の実践や研究は数が少ない現状である。

以上の現状認識を基盤として、本報告では社会福祉専門教育に精神障害当事者が参画する取組の紹介を行うとともに、専門職の知の継承の問題と関連させながら、対人援助の学習環境における利用者の位置づけを考察する。

専門職としての看護職養成における現状と課題　鮫島輝美（京都光華女子大学）

看護職とは、科学的根拠に基づいたケアの実践者として社会的に期待されている。看護教育が目指す専門職像とは、「主体的で能動的な学習者」である。しかし、現実的には教育すればするほど、「受動的な学習者」を養成してしまうという矛盾を抱えている。専門職養成を「近代」という枠組みで捉えた時、次のような特徴が考えられる。ナイチンゲールが導入した「私生活にも及ぶ規律・訓練」を中心とした看護教育が、明治以後採用され、「忍耐して献身的に働く看護像」が作り上げられてきた。この看護像は、1960 年前後の労働運動を契機に批判され、その後の看護教育課程の改変以後は、「合理的・科学的」看護師像が目指されるようになった。教育の高等化が叫ばれると同時に「学ぶ場」と「働く場」が切り離され、学習者である看護学生は「研究の対象」とされ、いつしか「受動的な学習者」と化したのである。また、「学ぶ場」と「働く場」が切り離されたため、それまで伝承されてきた実践知としての看護技術は、普遍的技術に取って代わられ、常に変化し、対象の状態に対応した特個的技術の伝承の「場」そのものが失われつつある。

以上の問題意識から、本報告では、「主体的で能動的な学習者」、普遍的技術・特個的技術間の対話、を回復する方向性について考察してみたい。

保育者の実践知とその継承　古賀松香（京都教育大学）

保育実践とは、園やクラス、子どもや保育者などがもつ多くの要素が絡まり合い、多様な保育の様相を生むものである。また同じメンバーで同じ方法をとったとしても、昨日の実践と今日の実践は異なり、不確実性をその本質的性格としてもっている（佐藤 , 1997; 津守 , 2002）。日々保育者は多様な実践知を用い、目の前に展開する状況に最もふさわしいと思われる対応を導き出す。その不確実性の中を生き抜く実践知は、暗黙的で身体的な部分を多く含んでいる。近年、研修の体系化もすすみ、実践を振り返るためのツール開発もめざましく、知を言語化し共有するための仕組みも多い。しかし、保育者の実践知とその継承に関する本質的な課題は、個人的でアクチュアルな実践の生活において身体的に感得している知と、言語化され共有されているかのような知識とを、いかに結びつけ、ミクロなレベルで捉え直し、新たな知の生成へと向かっていけるかということにある。例えば「子どもの気持ちを受け止める」という理念的な知識が、目の前の子どもとの今においてどのような実践となりうるのかという、状況特殊的な知へとひらかれていくことを、あらためて検証してみたい。

臨床心理士の実践知の生成と継承―自らの「体験」を通して学ぶこと、伝えること―

前盛ひとみ（香川大学）

臨床心理士は、クライエントの理解を深めるための心理アセスメントの活動、クライエントのニーズに応えていく過程としての心理学的援助の活動、理解や処遇から得られるものを知識のレベルとして一般化する研究の活動、という主に 3 つの働きを担う専門職種である。その基本姿勢はクライエントの独自性を尊重することにあるため、理論や一般性を超えて個々の事例に応じた柔軟な判断と行動が必要とされる。また、人と人との関係に直接的に関わりながら、相手の心の内面に深い関心と理解を持ち、援助を目指す専門家である以上、臨床心理士自身が専門家としての自分のあり方を常に問い続けなければならない。大学院での臨床心理士養成システムが整った現在、臨床心理士資格取得者はスタート地点においてはある程度の水準が保たれるようになった。しかし、その実践知が醸成されるには、独自な存在であるクライエントと自分自身に向き合いながら、自らの「体験」を通して知識や技術を自分のものにしてゆく、というプロセスが不可欠なように思われる。本報告では、臨床心理士の専門性や教育訓練制度の特徴を整理しつつ、制度を超えた次元で行われる専門性の生成と継承について検討したい。（本研究は、平成 21-24 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (C)「3 専門職種における生成継承性の心理的特質と発達過程に関する研究」(研究代表者 : 岡本祐子) の一部として行われた）

社会的実践と質的研究

企画・司会：『質的心理学研究』編集委員会（田垣正晋：大阪府立大学、
永田素彦：京都大学）
話題提供者：高橋菜穂子（京都大学大学院・日本学術振興会）
前田泰樹（東海大学）
菊池直樹（兵庫県立大学）
指定討論者：田垣正晋（大阪府立大学）・永田素彦（京都大学）

広義の実践と質的研究の往還の有り様

本セッションは、『質的心理学研究』14 号特集「社会的実践と質的研究」(2013 年 10 月末締め切り) への投稿を促すべく企画するものである。本特集が立ち上がった契機の 1 つは、東日本大震災、および原発事故である。以前から、実践と研究の関係は盛んに議論されてきたとはいうものの、この歴史的大災害後の現在ほど、研究が社会における実践にどれほど貢献できるのかという課題が先鋭化したことはないのではないだろうか。この課題は量的研究においても重要なことではあるが、質的研究をする者にはとりわけ敏感にならざるをえないことである。というのも、質的研究は、研究対象者やフィールドの「現実」を、量的研究よりも深く汲み取れることを自負していたからである。量的研究においては、数値に還元された「現実」を分析し、その「現実」がもつ多様性の幅や深さが捨象されてしまう。一方の質的研究においては、事象を数値に還元することなく、分析をすすめることを通じて、それまで社会的に注目されてこなかった「現実」を明らかにして、問題解決の営みに貢献しようとしてきた。

たとえば社会学や文化人類学における質的研究は、社会的マイノリティ（例、障害者、被差別部落の人々、都市の貧困地域）、文化的異邦人（「先進」国からみた、「未開」地域）の問題にしばしば取り組み、実践にも寄与しようと努力を重ねてきた。心理学の質的研究においても、慢性疾患、非行、学校教育の研究がそうであるように、社会学や文化人類学ほどではないにしてもこのような傾向は一定程度認められる。すなわち、本特集が求める質的研究は、程度の差こそあれ、社会的な実践と無縁ではない。

多様な「質的研究における社会的実践」

一口に「質的研究における社会的実践」といっても、実にさまざまなかたちがありえる。研究のテーマや対象がディシプリンによって異なるだけではない。現実や社会に対する質的研究のアプローチを大別すれば、現実をよりよい方向に変化させることに主眼をおく「実践する研究」と、そうした変化にかかわる営みを記述する、「実践に関する研究」とがある。言うまでもなく、この 2 つの間に優劣はなく、双方ともに私たちの生活に何らかの貢献をするものである。そこで本特集では、社会における広義の実践と質的研究との接点にかかわる論考を幅広く募集している。想定されるのは、たとえば社会福祉、看護やリハビリテーション等の医療、臨床心理、保育実践、教育実践など、「実践現場」が社会制度として確立している分野における介入研究である。あるいは、問題解決の方向を探るデータ分析の方法に焦点を当てたり、研究知見やモデルと実践を循環的につなげたりするような、実践的研究の方法にかかわる論考も考えられる。また、災害支援、町作りや環境保護といった住民活動、「法と心理学」における供述分析のように、必ずしも制度化されていない実践に関連した研究も歓迎する。さらに、このような応用研究から派生する、社会と質的心理学とのかかわり方を論じたり、アクションリサーチ、実践研究などといった類似概念を展望したりするような理論的な論考も求めている。

今回のセッションにおいては、社会における広義の実践と質的研究の関係について、発達心理学、医療社会学、環境社会学のそれぞれにおいて、フィールドワークと質的研究をしいる 3 氏から、実践活動から研究論文へのまとめ上げ、学会や研究論文といったアカデミック世界でえられた知見を実践に還流させていく様子について、話題提供していただく。

企画者それぞれの実践と研究　田垣正晋（大阪府立大学）・永田素彦（京都大学）

企画者の二人は、それぞれ社会的実践と質的研究を往還している。田垣は、障害者心理学、障害者福祉学の立場から、中途肢体障害者の語りの研究や、大阪府八尾市や兵庫県豊岡市の障害者施策に関するアクションリサーチをしている。

永田は、社会心理学、グループ・ダイナミックスを専門とする。現在、最も力を入れている研究課題は、東日本大震災で被災したコミュニティの復興支援。具体的には、2011 年 5 月にボランティアネットワーク「チーム北リアス」を結成し、震災で壊滅的被害を受けた岩手県野田村を拠点に、復興支援のアクションリサーチを展開している。

児童養護施設職員の語り方からとらえる 2 つの役割とその実践

高橋菜穂子（京都大学大学院・日本学術振興会）

高橋氏は、これまで児童養護施設で職員へのインタビューをおこない，そこでの支援実践の様子をモデル化することを試みてきた。児童養護施設とは，さまざまな理由で家庭で暮らすことができない 18 歳以下の子どもが入所し，家庭復帰，あるいは自立までの過程を支えられる場である。子どもと寝食を共にし，最も身近な存在として彼らを支える職員には，誰よりも子どものことを理解しているという自負もあり，親代わりとしての役割を担う。一方で，離れて暮らす親の存在は，時に大きく子どもに影響するため，職員は，親と子どもの関係を調整し，よりよい親子関係へとつなぐことも行っている。高橋氏は，その役割の二重性を，「実践者」/「媒介者」としてモデルのなかで描いてきた。本発表では，これまで構成した支援モデルの概要を提示するとともに，具体的な事例のなかでの職員の実践を追い，そのなかで，職員が自身の役割をどのように意味づけているのか，支援の難しさや葛藤も含めて明らかにしたい。

社会的実践を記述する　前田泰樹（東海大学）

前田氏は、医療にかかわるフィールドを中心に調査研究をおこなってきた。社会学のなかから生まれてきたエスノメソドロジーの考え方にもとづきつつ、いわゆる「他者理解」の問題のような方法論や理論になじみ深い問いを、実践の参加者たちにとっての課題へと差し戻して記述してきた。たとえば、医療や看護の実践において、患者によって語られる「痛み」や「不安」はどのように理解され、受け止められるのかということは、参加者たちにとって重要な課題である。こうした課題を、病いの当事者や医療の専門職を含む実践の参加者たちが、どのような「人びとの方法論」を用いて成し遂げているのかについて、『心の文法――医療実践の社会学』という著作にまとめた。現在は、もう一歩、医療や看護の実践から発せられてきた問いの方へと踏み出してみたいと思い、看護学の研究者たちと共同研究をおこなっている。前田氏は、いくつかの具体的な事例を紹介しながら、「人びとの方法論」を記述していく研究の方向性を提示する。

コウノトリの野生復帰における「聞く」という手法の実践性　菊池直樹（兵庫県立大学）

2005 年、兵庫県豊岡市においてコウノトリが放鳥されるなど、日本でも絶滅危惧生物の野生復帰プロジェクトが実施されている。野生下で絶滅した種の野生復帰は、自然再生と地域再生を包括する再生という特徴をもつ。菊池氏は、コウノトリの野生復帰プロジェクトに参加し、環境社会学をベースにした研究活動をおこなっている。

包括的な再生を推進するためには、近い過去の暮らしのなかで培われた知恵と気持ち（感性）を基盤とした共存のあり方を模索することが必要と考え、2002 年、延べ 414 人からコウノトリを「聞く」調査を実施した。「ツル」と「コウノトリ」というコウノトリをめぐる 2 つの象徴的なタームを用いて語りを分析し、但馬地方における人とコウノトリの多元的で矛盾する共存のあり方を再構成し、コウノトリとの多元的な関係の創造が課題であることを提示した。この調査研究の経験などから、野生復帰のみならず人と自然の共存という領域において、「聞く」という主張が有する実践性について報告する。

協働の「場」をつくる人・言葉・モノ

企画・司会 : 松嶋秀明（滋賀県立大学）
話題提供者 : 伊藤哲司（茨城大学）
杉浦淳吉（愛知教育大学）
矢原隆行（広島国際大学）
指定討論者 : 川野健治（国立精神・神経医療研究センター）

企画趣旨

現代社会における人々の活動は、Engestrom (2005) が「暴走する対象」と呼ぶように、多くの要因が複雑に入りくみ、からみあったものを志向している。介護・養護を必要とする人々や、被災者への支援、あるいは異文化間交流など、そうした活動にたずさわる人々は、単独で関わるには限界があり、「関係性にひらかれた主体性」（Edwards, 2005）、すなわち、いかに自分と一緒に働ける人々を探しだして協働するかが求められる。とはいえ、多くの活動はそれほど首尾よくは進まない。ある属性をもつ人々・職種へのプロトタイプな見方、価値観や考え方の相違が、私たちのつながろうとする努力をつねに頓挫させようとしている。他者への誠実な姿勢、あるいは専門職としての力量はもちろんのこと、それが上手く伝わり、絡みあう「場」（野中 , 1999）をつくる必要があるだろう。では、それはどのようにして可能になるだろうか？。どのような人が、どのような道具（モノや言葉、あるいは制度）があればよいのだろうか。登壇者は、これまでに介護、国際交流、環境問題、自殺対策や震災援助などの諸問題に実践的に関わりつつ、そこでの人々のつながりを創出し、協働する場をつくりだそうとしてこられた方々である。当日は、こうした経験をふまえてのお話から、場をつくることがいかにして可能になるのか、実践的／理論的に考えていきたい。

機能する場、機能しない場　—3 つの協働の場の事例から—　伊藤哲司 (茨木大学)

私自身が関わっている 3 つの協働の場を事例として紹介したい。比較的上手く機能している例、あまり上手く機能していない例、立ち上がったばかりでまだこれからという例である。【大洗応援隊！】東日本大震災で被災した茨城県大洗町の復興を支援するために作られた社会的ネットワークで、2011 年 5 月に立ち上がった。私を含む数人で立ち上げ、現在は約 80 人が参加。茨大生も多数。Facebook のグループ機能を活用し、学生のアクティブなコアメンバーを社会人がうまくサポートしている。ただし、一種の「災害ユートピア」的な盛り上がりにも見える。将来的にわたって持続的なネットワークにするための鍵をさぐりたい。【日本ベトナム友好協会】ベトナム反戦運動から始まった 60 年近い歴史を持つ団体。会員数は 800 人ほどで、全国各地に支部がある。ベトナムと日本の友好運動で重要な役割を果たしてきたという自負心がある。かつては大きな力を持った団体であったが、会員が高齢化しており、IT 化にもあまり対応できておらず、毎年のように「会員拡大」「組織的前進」を謳うものの、なかなか上手くいっていない。若手を育ててこられなかったことが、いま大きな問題として顕在化しつつある。私自身は現在副理事長の一人。時代の変化になかなか対応できない要因を検討したい。【小学校に協力する学生ボランティアネットワーク】私が今年度 PTA 会長を務める小学校に、茨城大学の学生が恒常的に関わる学生ボランティアのネットワークを築きつつある。校長や担当教員の理解も得ながら、Facebook 内にグループを作ったところ。学生の応募や適応は比較的早いが、小学校の先生たちが、そこにまだ十分参加することができていない。具体的な活動は、6 月上旬の運動会でのボランティアを行っただけで、まだこれから。母親たちが実質的な中心となっている PTA 活動ともどう連携しけるか、まだこれからにかかっている。

協働の場としてのゲーミング・シミュレーション　杉浦淳吉（愛知教育大学）

ゲーミング・シミュレーションにより協働の「場」をつくることを紹介する。ゲーミング・シミュレーションは，複雑な構造をもつ社会や個人間のプロセスをモデル化して表現し，ゲームを構成するモノやルール（言葉）の制約の中で参加者が行動する。ここで取り扱う「ゲーム」は現実のミニチュアではなく，現実の要素を抽出して構成されたモデルであり，プレーヤは現実の制約から解放されゲームの中で世界観を獲得していく。それでは，ゲームの世界は現実と切り離された特殊な空間なのだろうか。ゲームにおいてもそこに参加する人々が行動を繰り広げるという点で一つの世界である。つまり，現実とは異なる世界を意図的に設定することで，現実とは何であるかを認識できる世界である。以上のような発想をもとに，筆者は，個々の参加者の経験に基づいて考え，それを共有し，新たな知識を生成できるような場として機能するゲームの開発や実践を行っている。ゲームは「楽しみながら学べる」といったユーザーフレンドリーな側面が協調されがちであるが，それが全てではない。むしろ，「ゲームでしか学べない」ことがあるというべきである。また，ここで取り上げるゲームは，いわゆるデジタルゲームではなく，人々が対面的にコミュニケーションできるアナログゲームを想定している。アナログゲームのメリットは数々あるが，その一つは参加者がそれぞれの経験をもとにゲームをつくることができる点にある。ゲームをつくれば，そのゲームを別の人が遊ぶこともできる。見方をかえれば，ゲームのルールや内容をつくるということは，そこに居合わせない第三者が遊ぶことを想定することに他ならない。こうしたことから，空間や時間を超えた協働の知を生成していく可能性をもっているといえる。本発表では，ゲームをつくることによってどのように協働の場がつくられていくのかを，具体例を用いながら紹介してみたい。

ディスコミュニケーションを前提とした連携のためのコラボレイティヴ・アプローチ

矢原隆行（広島国際大学）

「協働」、「連携」、「チームワーク」といった概念によって含意される範囲はきわめて幅広く、現状において実践者、研究者らの間でその定義の明確な共通理解が得られているとは言い難いが、ひとまずそれを「複数の（ときに異なる専門領域、異なる機関の）人々が共通の目的を達成するためにおこなう協力的相互作用」と広義に捉えておくことができよう。これを推し進める際に大きな課題となるのが、当事者間におけるある種のディスコミュニケーションである。高木（2011）によれば、ディスコミュニケーションとは、言語的相互作用の単なる失敗や食い違いではなく、言語的相互作用において経験された「不全感」や「違和感」が、相手の「あるべき状態」から逸脱している反応によって生み出されていると、当事者、または、当事者の相互作用を観察している観察者が理解している事態である。ディスコミュニケーション事態への対処が困難であるのは、それが相互にとっての「あるべき状態」、すなわち規範や価値、慣習といった何らかの基準器自体の齟齬を意味しているためである。それゆえ、たとえば、異なる専門職間の「連携」、専門職とクライアントの「協働」といったものを、はじめからあるべき目標として軽々に前提とすることは、時としてその美名のもとに、当事者間に存在する権力関係や各々の基準器間の齟齬をめぐる現実を隠蔽してしまう危険性を孕むことになる。そこで報告者が提唱するのが、ディスコミュニケーションをディスコミュニケーションのままにひらくことを通じて新たな差異の生成機会を涵養するコラボレイティヴ・アプローチとしてのリフレクティング・プロセスの活用である。報告者は、これまでいくつかの文脈において専門職内、多職種間、多機関間の協働にリフレクティング・プロセスを用いてきた。報告では、その概要と、それがいかなる意味で協働の「場」を構成する仕組みとなり得るのかを紹介する。

制度的な組織の境界を超えた繋がり、活動、学習による個人の準拠枠の変容を TEM・TLMG で描く

企画・司会 : 豊田香（東京大学大学院）·サトウタツヤ（立命館大学）
話題提供者 : 水岡隆子（北陸先端科学技術大学院大学）
廣瀬太介（立命館大学）
佐藤紀代子（長崎純心大学）
豊田香（東京大学大学院）
指定討論者 : 日高友郎（福島県立医科大学）

企画趣旨

生き方が多様化する現代社会では、人は複数の組織と係わりながら、自己の準拠枠を変容させていく。本企画シンポジウムでは、 4 名が各事例から変容のプロセスを複線径路等至性モデル (TEM) と発生の三層モデル (TLMG) を用いて明らかにする。

TEM は、人の行為や感情や思考を時間的変化と文化社会的文脈との関係の中で捉え、記述するための新しい質的研究法の方法論的枠組みとして、これまで本学会で研究実績を重ねてきた。今回のシンポジウムでは、この TEM を方法論的枠組みとしながら、更にその行動や思考を規定する個人の準拠枠の変容を描くことを試みる。そのための理論的枠組みが、TLMG（Three Layers Model of Genesis: 発生の三層モデル）である。TLMG では、人間の成長や変化を、三層で捉える。第一層は『個々の行為・感情・思考が「実＝現」するプロセスのレベル』、第二層は『文脈的な枠＝促進的記号が発生し、個々の行為が体系化されるレベル』、第三層は『価値観・信念・習慣が維持するレベル・滅多に変わらない』である。

1 人の人間が、制度的な組織の境界を越えてつながり、活動し、学習する時、第一層の行動レベルが大きく変化することがある。そのような場合には、第二層や第三層に何が起きているのだろうか。 4 名の話題提供者が、それぞれの事例を用い、このような準拠枠の変容を、TLMG を理論的枠組みとして用い、丁寧に描くことを試みる。TEM と TLMG を接続する本試みは質的研究方法を発展させる上の、萌芽的な取り組みである。話題提供者のアプローチの多様性を期待するとともに、このシンポジウム参加者からの闊達な意見を期待したい。

（1）意思確認困難な高齢者への家族による胃ろう造設決定プロセスを描く

水岡隆子（北陸先端科学技術大学院大学 ）

介護家族の意思決定プロセスを研究する水岡は、自分の意思で治療を決定することが困難となった高齢者への家族による治療決定のプロセスを、人工的水分・栄養補給法のひとつである胃ろうに着目し家族内外の関わりにおいて考察する。調査対象である介護家族は、次第に食べることを厭うようになる高齢者への水分・栄養補給を、本人との日常的な関わりの中で工夫し、葛藤しながら実践している。介護方法や介護をめぐる価値観は、家族介護という文化的文脈や医療技術の急進する社会状況との相互作用において生成され、医療チームや家族成員それぞれのネットワークの関わりのなかで変容している。日常的な介護実践では、家族という制度的な境界を状況に応じて変化させ、急進する動的な外部環境との相互作用において医療技術への意味付けを変容させている。本発表では、新たな医療技術が家族にもたらす介護観の変容を TEM と TLMG によって描き、家族ならではの死生観の維持という視点から説明する。

（2）宗教カルト経験者の価値観の変容過程を描く

廣瀬太介（立命館大学）

カルト経験者の社会適応を研究する廣瀬は、彼らが体験する入信時と退会時の価値観の変容過程を、入信中と退会後に所属する組織の在り方の違いに着目しながら報告する。宗教カルト経験者は、入信する時と退会する時の２度、急激で大きな価値観の変容を経験する。入信する時には、クローズド・システムへの適応を無自覚のうちに選択させられ、オカルト的世界観を図とし、デカルト的二元論の世界観を地とする価値観を形成させられる。カルトの価値観を刷り込まれるとパースペクティヴが固定され、家庭、学校、職場など様々な場に所属していても、常に“信者としての私”としてしかいられない。それに対して、退会する時にはカルトの価値観が崩壊するため、社会的活動を営めるまでに心身が回復するには、オープン・システムへの参入を選択し、新しい価値観を形成することが必要となる。その価値観のもとでは、“娘としての私”“学生としての私”“職員としての私”“趣味人としての私”など複数のパースペクティヴを取れるようになり、多層的な自己物語が語られるようになる。

（3）大学におけるキャリアカウンセリングの事例～就職活動を経験する大学生の変容の過程を描く

佐藤紀代子 (長崎純心大学）

佐藤は私立大学のキャリアカウンセラーとして、大学生の就職支援を行っている。大学生の就職は、景気の波など社会情勢の影響を受けやすく、思い通りの就職ができるとは限らないのが現状である。一方で、学生が就職活動を通して未知の場所へ出向き、多くの人との出会いを繰り返すことで、就職という目標を達成できるかどうかにかかわらず、人間的に大きく成長することも事実である。J.D. クランボルツは「予期せぬ出来事がキャリアの機会に結びつく」として、偶発的な予期されない出来事によってキャリアが決定されること、そして、その偶発的な出来事を自らの主体性や努力によって生み出し、キャリアに活用していくことを強調している。そこで今回、クランボルツの提唱する計画的偶然性理論（Planned Happenstance Theory）をもとに、１名の女子大学生の就職活動において、「計画的偶然性」を含んだ出来事が、どのように生じていたか、また、活動の過程でどのような心理的・価値観の変容が見られたかを明示する。

（4）企業と専門職大学院ビジネススクールを行き来する社会人大学院生に起きる変容と葛藤を描く

豊田香（東京大学大学院）

専門職大学院ビジネススクールを研究する豊田は、企業組織に所属する社会人が学術界と実業界を行き来する中で起きる葛藤や価値観の変容を仕事観の変化という視点で明らかにする。企業に所属し職歴を重ねる中で、何かしらの問題意識が組織に対して生まれる。それを解決するために入学を決意するＡ氏は、昼間は企業に所属し日常業務を遂行し、夜間と土日にキャンパスに通う。そこで出会う新しい考え方や学友の多様な生き方にふれ、これまでの仕事観や生き方そのものを問い直し始める。価値観や信念に変化が現れると、これまで気が付かなかったことに気づき始める。その時、これまでも、そして現在も、またおそらく未来的にも、おそらくあまり変わらないだろう企業文化を客観視して、改めて自己の準拠枠の変化を自覚する。Ａ氏がそこでかかえる葛藤やその解決のプロセスにおいて、その都度心に思い描く促進的記号は変化していく。本研究では、特に促進的記号と信念と行動・思考がどのように繋がりつつ変化していくのかに焦点をあてる。

難病者への多層的支援システム構築に向けた「共同発信」の試み
―多様なアクターの実践とその宛先に注目して

企画・司会：日高友郎（福島県立医科大学）
話題提供者：橋本操（NPO 法人 ALS・MND サポートセンターさくら会）
伊藤史人（一橋大学）
福田茉莉（岡山大学大学院）
日高友郎（福島県立医科大学）
指定討論者：今福恵子（静岡県立大学短期大学部）
赤阪麻由（立命館大学大学院）

企画趣旨

近年病いや障害とともに生きてきた経験を語り、社会に伝えることが、病者・障害者への実践的支援に繋がる重要な課題として注目されている。「研究者」や「当事者」といった区分にとどまらず、病い・障害に関わる様々なアクターが、それぞれの研究や実践の知見を共有し、共同で社会に発信していく試みも増えている。

本シンポジウムでは、進行性の神経難病である筋萎縮性側索硬化症（Amyotrophic Lateral Sclerosis, ALS）を対象とし、「発信」から始まる多層的な支援のあり方を議論する。話題提供者に、(1) 患者の生活に寄り添いながら参与観察と共同発信の実践を続けている研究者、(2) 権利擁護活動の観点から社会制度への提言を行っている患者・研究者、(3) 子どもたちを宛先とした「病いの経験」を学ぶ企画の運営に携わった研究者を迎える。

指定討論者には臨床心理学および看護学を専門とする大学院生・研究者を迎え、共同発信によって実現される支援のありようや、当事者性をめぐる議論などを整理する。

追い詰められた人々の上質な暮らし

橋本操（NPO 法人　ALS・MND サポートセンターさくら会）

難治性疾患等克服研究事業「患者および患者支援団体等による研究支援体制の構築に関わる研究」班で初めて患者本人が主任を務める橋本班では、希少性疾患に係る研究者と患者団体とがポータルサイトを通じて協働し、患者家族が語るナラティブ（語られるストーリー）を含めた疾患データを収集する方法を構築する。「患者の語り」を治療研究に役立て、患者の満足度が向上する治療薬、医療機器、ケア技術、情報提供等の技術を生み出すことを目指す。

難治性疾患患者の情報を対象とするため、広く難病に関連する患者団体に参加を呼びかけるが、特に身体障害を呈する神経筋疾患を横断的に繋ぐ。日本 ALS 協会、脊髄性筋萎縮症家族会、CMT（シャルコー・マリー・トゥース病）友の会、PADM（遠位型ミオパチー）患者会、MS キャビン、FOP（進行性骨化性線維異形成症）患者会、フォンヒ・ペルリンドン病患者会と協力する。希少疾患の中でも活発に政策提言を展開してきた患者団体がリーダーシップを発揮し、さらに希少な難病団体をこのプロジェクトに招き入れ療養上の工夫や生きていくうえでの体験を共有し、エンパワメントを図りリードしていく体制をとる。

病気の経過を患者ごとのレジストリとしてまとめ、疾患単位で参照できるようにするので告知やソーシャルワークの向上も期待できる。

情報技術による障害者・難病患者情報の相互接続とその応用

伊藤史人（一橋大学　情報基盤センター）

情報技術（IT）の発展は，これまでとどまるところを知らずに続いてきた。インターネットの利用者は世界中で 20 億人を超え，もはや地球上のどこへ行っても利用することができる。その結果，世界のあり方は大きく変化し，中東においてはアラブの春を引き起こす原動力にもなった。100 年前にはあり得ないほどの量と速度で個人が相互接続された結果であった。一方で，インターネットや情報技術の応用は社会に黒い斑点を残しながら発展してきた。障害者や難病患者のマイノリティーは，インターネットの相互接続性を十分に生かしきれていないのが現状であり，その歪みは黒い斑点となって社会に偏在することとなった。

難治性疾患等克服研究事業「患者および患者支援団体等による研究支援体制の構築に関わる研究」（厚生労働省）は，

インターネットの特性を最大限に活用する試みであり，社会の斑点を有機的に相互接続し，収集した情報を新しい情報として醸造することを狙っている。QOL 評価や投薬情報などの基本情報の集積はもちろんのこと，これまで埋もれてきた難行患者等の何気ない生活情報やナラティブ（物語と対話）情報を蓄積し，活用可能な形で共有する。なお，ナラティブ情報は医療現場においても NBM（Narrative Based Medicine：物語と対話に基づく医療）として注目されている。それらの情報は横断的に検索可能とし，適切にデータマイニングすることで新しい情報を醸成することが可能になる。

なお，本事業の研究代表者は ALS 患者本人である。研究成果は，難病患者等と医師・研究者との相互接続を容易にすることで，治験等の研究環境を向上することを目標にしている。

難病とともにある生を伝える―子どもを対象とした当事者参加型体験授業からの報告

福田茉莉（岡山大学大学院　社会文化科学研究科）

福田は、「難病とともにある生を考える」をテーマとした小学生を対象とした体験型授業の企画や運営に 3 年間にわたり携わってきた。授業の趣旨は、大学という研究や教育の現場に子どもたちを招待するというものであり、当該研究室や関係者の実施する難病患者への支援方法を紹介しながら、当事者である ALS 患者にも協働的に参画してもらうという形で運営された。

体験型授業は、子どもたちに ALS がどのような病気なのか？を知ってもらうだけでなく、当事者の話を聞き、当事者が日常的に体験しうる状況を実際に体験してもらいながら、より当事者に近い視点から、自分たちにどのような支援ができるかを考えてもらう一つの契機になるように立案された。体験型授業の主な内容は、「ALS 患者である当事者の話を聞くこと」、「透明文字盤などを用いて、声を使わないコミュニケーションを体験すること」、「意思伝達装置を使用するためのスイッチをカスタマイズすること」などで構成されていた。授業の終了時には、参加者にアンケートを配布し、授業に関する感想や評価を回答するようにもとめた。アンケートの結果は、次年度の企画を立案する際に関係者に提示され、年ごとに少しずつ企画内容や講演内容が再構成されるというプロセスを経て実施された。

これらの企画の立案過程や授業内容、その後の参加者への影響や社会的影響などをあわせて報告することで、「発信」から始まる多層的な支援のあり方の実践例として本企画に寄与したい。

患者・研究者の協同によるシンポジウムの意義と実践―文化心理学的観点から見た記号と宛先

日高友郎（福島県立医科大学　医学部）

日本質的心理学会大会の会員企画シンポジウムの場を用いた、患者・研究者協同によるシンポジウムの試みも今年で 7 回目を迎えた。本報告においてはこれまでに同様の形式で行なってきたシンポジウムの経過と成果を概観するとともに、共同発信という実践が持つ意義と可能性について、文化心理学的な観点から整理し報告を行う。重篤な病いとともに生きる人の「生」（ライフ）を支えるためのシステムの提案、という観点から、（質的）心理学の持つ可能性と課題について、活発な議論を引き出すことが本報告の狙いである。

指定討論者には、臨床心理士として潰瘍性大腸炎患者の支援に携わる 赤阪麻由（立命館大学大学院文学研究科）、看護学の立場から難病者の災害準備・支援に携わる今福恵子（静岡県立大学短期大学部看護学科）の 2 名を迎え、多様な学範・問題意識・立場からのコメントを賜ることで、さらに発展的な議論へと繋げる。

質的な分析に対話をどのように生かしていけるのか

企画・司会：能智正博（東京大学）
話題提供者：川野健治（国立精神神経センター）
大倉得史（京都大学）
藤岡勲（東京大学）
指定討論者：やまだようこ（立命館大学）

企画趣旨

近年、質的研究の広がりに伴って、その質の管理に関する議論はますます広まっているように思われる。質的データの分析の質を高める手段として、「メンバーチェック」や「監査」など、そのプロセスに他者の目を介在させることの必要性はかねてより指摘されてきた。最近では、分析結果を対象者や同僚にチェックさせるばかりでなく、データ収集・分析の要所で他者からフィードバックを受けたり、分析を共同で進めたりする試みが提案されている。それらは、他者との対話を通じて研究者の認識を対象化し評価し修正・発展させようとする努力であるとも言える。

しかし、単に対話がなされれば常に研究の質が高まるというものではない。より重要なのは、対話という多面的で複雑な営みを研究過程にうまく生かしていくことであり、さらには、生かしていけるような質の高い対話を達成することではないかと考えられる。それでは、質の高い対話とはどのようなものなのか、また、それを担保するためにはどのような方法を用いればよいのだろうか。

このシンポジウムではまず、質的研究のなかでも特にインタビューを用いた研究の過程に対話的なやりとりを組み込んだ事例を、３人の研究者から紹介してもらう。そのやりとりは、インタビュアーとインタビュイーの間の対話、インタビュアーとその共同研究者との間の対話、３人以上の研究者の間の対話などが含まれる。次いで、ナラティヴ研究と教育の専門家である指定討論者の助けを借りながら、そこでどのような対話が求められており、そうした対話を発展させるためにどういう工夫がありうるかを検討していく。

インタビューにおけるリフレクティング・チーム　川野健治（国立精神神経センター）

川野（2008）では，妻を亡くした自死遺族へのインタビューの分析において，共同研究者とともにインタビューテープの聞き直しを行い，インタビュアーが意識していない会話の背景を反省的に眺める作業に取り組んだ。このようなインタビュー研究における共同分析を,「インタビューにおけるリフレクティングチーム」と呼ぶ。ここでのリフレクティングチームは（トム・アンデルセンによって考案された「リフレクティングチーム」と完全に対応するわけではなく），インタビュアーとインタビュイーとのやりとりをインタビュアー以外の第三者とともに観察し直すことで，インタビュアーが気づかなかったインタビュイーの回答への視点やインタビュアーの暗黙の前提について指摘し，それについて話し合うことを意味する。

本報告では、あらたに、自死遺族支援者の語りを整理する作業における、同様の分析について報告する。この作業を通して、「支援者の語り」は、インタビュー実践へと主体的に関わるインタビュアー，インタビュイー双方の参加者によって編まれたテクストに対する理解によって得られたものであることが示された。そして，一見ノイズに見える逸脱したやりとりこそが，実はインタビュー実践の参加者の主体性を示す営為として，分析者に対しても，新たな視点を与える契機となっていたことが示唆された。ここで，分析者は，インタビュー実践の参加者同様に，やはり語りの意味を解釈する解釈実践の共同体の一員であり，けして俯瞰性をおびた客観的な存在ではあり得ないことを示しているのである。そこには意味を読み取る多重の語りの空間が存在していると言えるだろう。

語り合い法における一人称的視点と他者的視点　大倉得史 (京都大学)

日常的な意味で私たちが誰かのことを「わかる」というとき、それはその人が今何を感じ、どのような体験をしているのかがこの身に感じられるということ、あるいはその人の「その人らしさ」がつかめるということを指すだろう。語り合い法は、そうした〈人間的了解〉を深め、通常はなかなか言語化されにくいその中身を記述すること、それを通じて調査者が協力者と出会った際に感じられたその人の息吹とでもいうべきものを、読者の身体にまで届けることを目指す方法である。そのために、語られた言葉そのもの（逐語録）について分析を加えるのではなく、協力者の語り口やその場の雰囲気、文脈、調査者と協力者の関係性、調査者の有していた暗黙の枠組みなどを明るみに出しながら、協力者の語りが調査者の身体にどのような感性的経験を引き起こしたかを記述する〈メタ観察〉という分析を行っていく。これは、得られたデータに対して客観的な解釈を加えていくような類の分析手法とは異なり、むしろ語り合いの現場における調査者の了解、あるいはその現場に「流れていたもの」を描き出すことに主眼を置く分析手法であり、その記述は徹頭徹尾ある種の一人称性―「私」がそのように捉えたという一人称性―を帯びている。一歩間違えれば単なるモノローグにも堕しかねないこの危険な方法において、対話的視点（他者的視点）はいかに導入されるのか。恐らくそれは、語り合いの現場を離れた「客観的分析者」たちの対話としてではなく、あくまで調査者と協力者との対話、あるいは調査者自身の内的対話、語り合う二者に自らを重ねる共感的読者たちとの対話として、構想されるものだろう。

今回の発表では、「私」と協力者の〈あいだ〉に流れたものは一人称でしか記述し得ないという現実と、「私」の視点を越えるような他者的視点の導入の必要性とに、語り合い法はどう折り合いをつけるのかということを中心に考えてみたい。

合議制質的研究と研究者間の『対話』　藤岡勲（東京大学）

質的な分析において「対話」が重視されてきているが、「対話」を用いたアプローチの実際は、十分には紹介されていない。そのため、「対話」を用いたアプローチを用いたくとも、どうしたらよいかわからいことが多いと考えられる。本報告では、合議という形で研究者間の「対話」を用いる合議制質的研究 (Consensual Qualitative Research; Hill, 2012; Hill et al., 2005; Hill, Thompson, & Williams, 1997) を紹介する。

心理学全体において量的研究に対する質的研究の重要性が増す中、合議制質的研究法は北米の臨床心理学において発展した。この方法は、心理援助におけるプロセスを扱う研究で広く用いられてきたが、近年は臨床心理学以外の分野でも使われてきている。

合議制質的研究法は、(1) オープンエンド的にデータを集め、(2) 領域（domains）という広い範囲でデータを分類し、(3) コア・アイデア（core ideas）という要点を生成し、(4) 研究協力者をまたいでみられるテーマやパターンをみるクロス分析（cross-analysis）という 4 段階からなる。合議制質的研究法の特徴は、分析の段階において、主に分析を行う主要メンバー（primary team）が合議を行いながら知見を導き出し、その知見を確認する監査（auditors）とさらなる合議を経て知見を洗練させるという、研究者間の「対話」を重視する点にある。

報告者が携わり、合議制質的研究法を援用した研究を例としながら、研究者間の「対話」がいかになされたかを紹介する。それを通して、合議制質的研究法を援用した研究者間の「対話」が、研究者のバイアスへの考慮、社会・文化的要因への配慮、客観性の担保、効率性の向上、研究能力の発展等において有益であることを示す。

農と食と心理学：その３

企画：石井宏典・菅野幸恵・木下寛子
司会：菅野幸恵　（青山学院女子短期大学）
話題提供者：渡邊芳之　（帯広畜産大学）
木下寛子　（九州大学）
石井宏典　（茨城大学）
指定討論者：浜田寿美男（奈良女子大学名誉教授）

企画趣旨

第７回大会において「農と心理学」というシンポジウムを開催した。このとき改めて浮き彫りになったのは、農の現場から遠く切り離れたわたしたちの日常であった。そこで第８回大会では、農の世界とわたしたちの日常をつなぐ契機となる「食」という視点を加え、「農と食と心理学」と題したシンポジウムを続けた。提供された３つの話題は、①ある小学校と学童保育における子どもたちの「食べる」場面に目を凝らし、②自主保育活動で試みられる野外での食・農体験に寄り添い、③豊作を願い収穫を感謝するムラの祭りから実感が薄れてきたさまを辿った。今回もまた、食を媒介として農と日常とを結ぶという視点を引き継ぎ、３つの報告を重ねることで「農と食と心理学」について視野を広げ、議論を深めたい。なお、前回までに浮上してきた課題群のなかでもとくに、農的なあり方に込められた「からだ（身体性）」の問題も扱えればと考えている。また、農的世界が媒介することになる多様な繋がりについても目を向けたい。

グリーンケア農業とその課題　渡邊芳之（帯広畜産大学）

自然や動植物，農業などが人間に働きかける力を活用した活動を「グリーンケア」とよぶことが増えている。グリーンケアという言葉は「単に受動的に自然を享受するのではなく自然による健康や幸福の促進を意図して行われる積極的介入」を意味する（Sempik et. al., 2010）。

グリーンケアの領域はいわゆる「自然や動植物によるセラピー」だけでなく、広い意味での農業を通じた障害者の自立支援、就労支援にまで広がり、農業の立場からは農業の新しい社会的役割のひとつとして期待されている。グリーンケア農業により障害者は「農業によるセラピー」を享受しつつ職業と収入を得る場所を提供され、いっぽう農業の側は慢性的に不足する農業従事者を確保できるという考え方である。

帯広畜産大学の研究グループ（研究代表者：佐々木市夫名誉教授）では 2010 年度から科学研究費を得て世界のグリーンケアの現状を調査するとともに、日本国内でのグリーンケアの取り組みについてその効果を検証してきた。ヨーロッパでは社会福祉施設が大規模な農場と食品加工設備を経営してグリーンケア農業を行ない、入所者に給与を支払えるほどの収益を上げている例、一般の農家での障害者の就農を国や地域の大学がバックアップする例などを視察した。

国内でも障害者の就労支援の場として農業分野が重視されており、各地で障害者の就農の取り組みが進められている。しかしそうしたグリーンケア農業が実際に利用者にどのような効果を与えているのか、とくに QOL を向上させるようなセラピー効果がほんとうにあるのかはよくわかっておらず、われわれの調査でも量的な方法では QOL の改善を検証することはできていない。いっぽうでグリーンケア農業に従事する利用者からも運営者からも「主観的には大きな効果」が主張されることが多く、それがこうした取り組みの拡大を支えているのも事実である。これから質的な研究法を活用してこうした「実感」の源泉やしくみを解明することが求められている。

学校の世界と「畑の体験」：小学校の日々から　木下寛子（九州大学）

「農」的ということ、また農的なあり方を取り戻すということはどういうことなのか。何をすることなのか。このことは必ずしも明白ではないようである。それでいて今、「農」的なあり方を取り戻そうとする動きはとても盛んで、白熱しているように思われる。「農」的ということから程遠いところにありそうな、学校という場もその動向と無縁ではない。「小学校学習指導要領」（文部科学省，2008）は、教科等の学習における畑作りや高齢者との交流などの「体験活動」の充実を重視する。そこには、学校を基点として、子どもの周りに、一度は失われた豊かさ――「農」の世界にあったものとして粗描される、田畑や自然に囲まれた生活や、自然や身のまわりの人やことがらとの直接的・有機的な連関に連なる豊かさ――が何らかのかたちで恢復し、そこに「生きる力」そして「確かな学力」が定着する道が開かれることが期待されている。しかし一方で、限られた学校という時間と場のなかでの体験は、それ自体がどこまでも「擬似的」と見る向きもあるだろう。

報告者が通っている小学校にも、体験活動として校区に住む高齢の方を「畑の先生」として招き、いっしょに畑を作るクラスがある。野菜を植え、よく見て収穫し、それで料理をしたり、売って「収益」を得たり、クラスの行事の折には「畑の先生」への日ごろのお礼に、収益や料理でもてなしたりして、季節をひとめぐり、ふためぐりと過ごしてしていく。こんな日々が 5 年以上続いて、畑の水遣りや休み時間の野菜販売、「畑の先生」という呼び名も、学校の内外ですっかりなじみとなった。水やりや料理の手際もよくなった。こうして学校という場に既に起こっていることを、私たちは一体、どのような性質のこととして見ることができるだろうか。強いて、この営みにおいて「農」的であると言いうるようなことがあるとするならば、何を以ってそう言えるのだろうか。この話題提供では、学校という場でなされている「畑づくり」（字面からすれば既に農的と言える）の具体的な様子に立ち入ることで、農的であること、農的なあり方を取り戻すということ、それから、今至るところで起こっているその動きに思いを巡らしていきたい。

子ども時代の食・農体験を語りあう：都市における同郷者たちの繋がり　石井宏典（茨城大学）

沖縄本島中南部都市圏において、同じ集落出身の女性たちによって構成されている 2 つの同郷コミュニティをとりあげたい。両者ともに母集落の行事には、仲間どうしが連れだって参加する。

郷里のフクギ並木にあやかった名の「福女会」は結成いらい 30 年を超え、会員が少しずつ入れ替わりながらも毎年 70 ～ 80 代の女性たち 20 名余りが集ってきた。最近は、夫の看病や介護そして看取りを体験した会員が続いている。月に一度の模合（親睦目的の頼母子講）では飲食を共にしながら、老いへの対応の仕方を伝えあい、ふるさとの思い出を語りあう。「蛍会」は 1937 年生まれの同齢女性 20 名ほどの集いで、50 代半ばに会を結成してから 20 年ほどのあいだ、月に一度の模合と年に一度の旅行を重ねてきた。沖縄戦時に小学 2 年生であった彼女たちは、中卒後にほとんどが中南部や大阪で就職した。

双方の会合ともに、子ども時代のことがよく語られる。水が乏しく山も遠かった土地柄から、共同井戸での水汲みと山への薪取りは戦前・戦中世代の共通体験であった。畑のイモ掘りや麦粟の脱穀作業、家畜のための草刈り、浜辺でのイモ洗いなども、暮らしの中で繰り返された営みだった。食事をとりながらの席ということも作用してか、幼いころの食にまつわる思い出話も多い。福女会では長い間、ある会員の自宅で彼女が作った家庭＝郷土料理を共に味わいながら談笑に花を咲かせてきた。蛍会ではここ数年、旧正月前に集まって、その時季の味である「チーイリチャー（新鮮な豚の血を使った肉と野菜の炒めもの）」を大鍋で作り食べるという機会を設けている。郷里ではかつて、年の瀬には各家庭で育てた豚を浜辺で解体し、その後この料理を食べるのが恒例だった。

ここでは、参加者たちの語りあいに特徴的な子ども時代の振り返りについて考えてみたい。他郷に暮らす者どうしが、ときに思い出の食を味わいながら、ふるさとでの共通体験を語りあう。それは、自分たちの根元を確認しあいながら、遠く離れた過去と現在とを結ぶ作業のようにみえる。

当事者が捉えるウェブログによる“つながり”から新しい支援の可能性を探る

企画 : 河原智江（横浜創英大学）・西村ユミ（首都大学東京）
司会 : 池田真理（東京大学大学院医学系研究科）
話題提供者 : 河原智江（横浜創英大学）
A氏　（ウェブログを綴っている当事者）
B氏　（ウェブログを綴っている当事者）
指定討論者 : 南山浩二（静岡大学）・西村ユミ（首都大学東京）

企画趣旨

同じような悩みや課題をもつ当事者同士がお互いに支えあう機能を持つセルフヘルプ・グループ（以下、SHG という）は、例会を中心として、Face to Face の関係がひとつの特徴であるが、SHG に何らかの関与をしたいが例会には参加できない、あるいは、全く参加したくないという当事者もいる。そのような中、最近では、当事者同士や SHG、専門家などとつながっていく方法として、ウェブを介して電子メール、ウェブログ、インターネット掲示板、コミュニティサイトなど、これらによるコミュニケーションが広がっている。このように、ウェブを介したコミュニケーションは、現代人にとっては、重要なコミュニケーションツールと言える。

急速に広がったコミュニケーションツールとしてのウェブログは、ウェブログの発信者とそのウェブログを訪問する受信者により成り立つが、発信者は、不特定多数のひと、しかも、そのほとんどの場合は、相手を知らないという状況である。また、受信者も、ほとんどの場合、発信者のことを知らない。両者は、ウェブログ上のみで“つながっている”わけであるが、ウェブログは、同じような悩みや課題をもつ当事者にとって、自己の語りやセラピーとしての役割の可能性もある（山下 ,2005）と指摘されており、Face to Face の関係が基本である SHG とは別のスタイルとして機能していると考えられる。

企画者らは、この 2 年間、認知症の妻を介護する夫（A 氏）が綴るウェブログにおける“つながり”やその経験について検討を行ってきた（日本質的心理学会第 7 回大会個人発表「認知症介護者のウエブログを通じた“つながり”の経験と意義」（第 1 報）、日本質的心理学会第 8 回大会個人発表「認知症介護者がウェブログを綴ることの意義に関する検討（第 2 報）：当事者にとってのウェブログの存在に焦点をあてて」）。

本シンポジウムでは、その成果等を踏まえ、当事者にとってのウェブログの存在、それを綴る意義を踏まえ、当事者の求める“つながり”について具体化するとともに、当事者への新しい支援方法を検討したいと考える。

本シンポジウムの概要

本シンポジウムは、現在、家族を介護し、またウェブログを綴っている当事者である A 氏及び B 氏の参画を得て、当事者の経験を語ってもらいながら進めていくものである。

池田が司会の役割を担い、以下のように進行する。

まず、A 氏、B 氏それぞれと河原の対話から、それぞれの氏にとってのウェブログの存在やそれを綴る意義を浮き彫りにする（例えば、A 氏の場合、A 氏が“師匠”と感じ、訪問や書き込みのやりとりをしているウェブログがあり、それは、A 氏の介護生活のモデル的役割を担っていた。また、変化する妻や自分の状況を記録として残すという意味があった。など）。

次に、ウェブログでのエピソードから、当事者自身が、誰の、どのようなことを、どのように“つながり”として捉えているのかを具体的に語ってもらい、当事者の求める“つながり”について、一定の整理をする。

それを踏まえ、家族社会学及びセルフヘルプの専門家である南山から、「ウェブログでのつながりと家族」についてコメントし、看護学及びケアの専門家である西村から、「支援としてのウェブログの現状」についてコメントする。

指定発言者 2 名のコメントを受け、当事者、参加者も交えて、「当事者への新しい支援方法」について自由に議論し、本シンポジウムのテーマを検討する際の論点を明確にしたいと考えている。

《参考》 日本質的心理学会第 7 回大会及び第 8 回大会個人発表抄録

認知症介護者のウエブログを通じた “ つながり ” の経験と意義（第 1 報）

【目的】 認知症家族介護者が綴るウェブログでの “ つながり ” について、介護者はどのような経験をし、それがいかなる意義を持つのかを明らかにする。
【方法】 対象は、若年性認知症の妻の介護者である夫 A 氏と A 氏の綴るウェブログ（妻の発症と同時に始めた約 4 年分の 300 件）である。A 氏は 60 代で、定期的に認知症家族会に参加している。A 氏にとってのウェブログの意味及び存在については、半構成的インタビューで聴き取った。倫理的配慮は、B 大学倫理委員会の承認を得るとともに、新たな倫理的問題に対応できるよう、発表者が主催するケア研究会独自のガイドラインを作成し研究を進めた。
【結果と考察】 A 氏はウェブログを「批判やマイナスのことは書かないこと」、「品位を保持すること」を決意して綴っていた。A 氏は、ウェブログは、「困った時ほど即応性があり、面識のない多くの人が親身になってくれて頼りになる」と感じていた。また、A 氏が “ 師匠 ” と感じ、訪問や書き込みのやりとりをしているウェブログがあり、それは A 氏の介護生活のモデル的役割を担っていた。一方、かつてやりとりをしていたウェブログも、綴る相手の状況変化に伴い、A 氏のかかわり方も変化していた。A 氏にとってウェブログは、変化する妻や自分の状況を記録して残すという意味があり、ウェブログを通じた “ つながり ” は、面識の有無にかかわらず、セルフヘルプの関係があると考えられた。

認知症介護者がウェブログを綴ることの意義に関する検討（第 2 報）：
当事者にとってのウェブログの存在に焦点をあてて

【目的】 認知症介護者は、自らの介護経験をウェブログに綴ることの意義とその存在をいかに捉えているのかを明らかにする。
【方法】 対象は、若年性認知症の妻の介護者である夫 A 氏と A 氏の綴るウェブログ（妻の発症と同時に始めた 5 年間分）358 件である。A 氏に半構成的インタビューを行うとともに、ウェブログ記事は、IBM SPSS Text Analytics for Surveys を用いて分析してカテゴリ化し、カテゴリごとに時系列で整理した。なお、本研究は B 大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。
【結果と考察】 5 年間のウェブログの月平均更新回数は 5.8 回であった。ウェブログ記事のカテゴリは、「排泄の状況とケア」「認知症の治療やケア」「妻への気持ちとかかわり方」「他の家族との関係」「専門職との関係」「近所の人びととの関係」であった。A 氏は、ウェブログは妻の排泄に関することが一貫したテーマであると認識しており、当初は、“ 自分が困ったことを教えてもらった ” が、最近は “ 妻にとってより良い方法 ” を求めていた。また、元来 A 氏は妻を大切にしているが、最近 1 年では “ 妻は幸せなのか ”“ 自分の世話は間違っていないか ” と自身に問い続けている。これは、ウェブログ仲間らにその問いの評価を期待しているようにも考えられた。また、A 氏はこれまでを振り返りつつ、今後起こりうることも予測するなど、時間の経過とウェブログ仲間らとの交流により、ウェブログを過去―現在―未来をつなげるものとして捉えていた。

※本シンポジウムは、ケア研究会（代表：河原智江・西村ユミ）の研究の一環として行うものである。

多文化横断ナラティヴを生成継承する
―日本の質的研究の国際化に向けて―

企画・司会 : 木戸彩恵（立命館大学）
浦田悠（京都大学）
話題提供者 : 西山直子（京都大学）
安田裕子（立命館大学）
家島明彦（島根大学）
浦田悠（京都大学）
指定討論者 : やまだようこ（立命館大学）
伊藤哲司（茨城大学）
吉永崇史（富山大学）

企画趣旨

私たちはこれまで，ウィーン，ロンドン，ハノイ，シカゴの 4 都市にて，多文化横断ナラティヴ・フィールドワークを行い, 多声的対話を生成する場所（トポス）を多重に重ねる試みを行ってきた。これらのプロジェクトには，国内外の教育者，若手研究者，学生等が多数参加し，それぞれが異質の声を響かせながら，協働の学びを積み重ねてきた。本シンポジウムでは，（1）これらの国際フィールドワークによってもたらされた成果の振り返り，（2）それらの成果から得られた示唆を，今後の質的研究へいかに生成継承するかという課題の検討，（3）質的研究における生成継承のあり方の模索，などのテーマを巡って議論を深め，日本の質的研究の国際化について考察したい。

（1）多声的対話が生まれるまで

西山直子（京都大学）

西山は，ウィーン，ロンドン，ハノイ，シカゴの 4 都市すべての多文化横断ナラティヴ・フィールドワークに参加した。それぞれの場における異文化体験，学際的・国際的交流，研究発表の経験を積むなかで，研究者としても成長し，プロジェクトが目指す多声的対話の生成に臨む姿勢や様式も変化してきた。最初の頃は，研究発表の場においては自分の研究内容を相手に伝えるので精いっぱいで，一方通行の発信にとどまり対話まで至らないことも多かった。また，ロンドンプロジェクトにおいては集団のなかで対話の生まれない「声を失う」経験もした。一方で，ハノイプロジェクトなどの個人と個人の会話や小集団における協働作業においては, 言葉の壁を超えて豊かに語り - 聴くことができた。そして, シカゴプロジェクトでは共通の分野・関心に基づき，互いに対等に意見を交わし合い議論を深めた。西山は，ここにきてやっと多声的対話の土壌に立つことができたように思う。国内外の一流の研究者／教育者，若手研究者，学生，協力者など様々な立場の多彩な「声」が響くなかで, その和を乱すことなく臆することなく多声的対話の場に加わっていくこと，そのような多声的対話の場を生みだすこと，そして自らも「声」を発していくこと――を，多文化横断的なナラティヴ・フィールドワークを積み重ねてきた経験を振り返ることで考察したい。

（2）共有しえないことへのアプローチ

安田裕子（立命館大学 ）

安田は，ウィーン，ロンドン，ハノイにおける多文化横断ナラティヴ・フィールドワークに参加した。研究発表，各地でのフィールドワーク，体験型ワークショップなど多彩な内容と，それぞれにおける語り - 聴く経験を通じて，知見の獲得と共有，異文化体験や交流など，個人的な経験の蓄積は余りある。ただ一方で，

異言語・異文化環境に身をおくなかで，「語りえなさ」「捉えられなさ」「共有しづらさ」「くいちがい」も数多く経験した。そしてそのことが，本来的に，表現されることの背景もしくは根底に沈み込んでいる「語られないこと」への，そして，それをも含めてかたちづくられる自己への，理解を深めることとなった。語り（さらには自己）は，「無」から「有」へ，そして「有」から「無」へと，巧みに反転しながら紡がれるものなのだろう。このことを踏まえ，また世界各地で起こる大小さまざまないさかいや紛争の存在を考えればなおさら，たとえわかり合うことが難しくても，多文化間で人びとが語りを共有しようとすることこそが重要だといえよう。本発表では，プロジェクト全体を通じた個別経験としての語りや把握の欠如，ロンドンプロジェクトを通じた集団としての語りえなさと共有しえなさ，他方で異（非）言語を前提に組み立てられたハノイプロジェクトでの実践を取り上げ，ずれや沈黙を含みそれへの理解を進めながらも，表象としての語りを捉え共有しようとする質的研究とその方法について考え，議論したい。

（3）学際的・国際的ナラティヴがもたらすもの

家島明彦（島根大学）

家島は，ウィーンとシカゴにおける多文化横断ナラティヴ・フィールドワークに参加した。本発表では，家島がウィーンやシカゴで経験した内容について紹介し，そこで蒔かれた種がどのように花をつけ実を結んだのかを具体的に示しながら，多文化横断ナラティヴ・フィールドワークがもたらした教育的効果や研究的成果を省察する。学際的・国際的な交流を重ねることによって自分自身は研究者として何を得たのか改めて振り返りながら，「学際的・国際的ナラティヴがもたらすもの」について考えてみたい。
加えて，「多声的対話」や「ナラティヴの重なり」が「学際」だったり「国際」だったりすることの意味・効果について，また，それらが質的研究の発展・生成継承とどのように関連しているのかについても考えてみたい。学問領域や国にはそれぞれ固有の（典型的な）ナラティヴ・パターンがある一方で，学問領域や国を超えて共通するナラティヴ・パターンもある。千差万別であるはずの個人のナラティヴが学際的，あるいは国際的な文脈に置かれることで余計に特徴が際立ったり，逆に没個性化したりする現象についても検討し，それらをどのようにすれば質的研究の発展や生成継承につなげることができるのかについても議論してみたい。

（4）質的研究の生成継承をめぐって

浦田悠（京都大学）

浦田は，シカゴでのフィールドワークに参加し，シンポジウムでの発表，大学や施設のフィールドワークなどを体験してきた。また，途中からではあったが，本プロジェクトの運営に関わることを通して，質的研究の営みを実地に学ぶ機会を得てきた。そのような立場から，本話題提供では，質的研究の継承という点について考えてみたい。筆者のような若手研究者にとって，文化的にも研究者グループとしても多声的な営みに参与することは，熟達した研究者の研究内容を改めて深く理解する機会になるだけでなく，普段の研究への取り組み方や研究観，さらには人間観というべきものを目の当たりにする貴重な場となる。そのような多世代的・多文化的な場を共有することは，それ自体が広い意味での研究の生成継承と言えるのではないだろうか。

本学会がまもなく 10 年を迎えるという時代的な観点からも，また筆者のような若手研究者が担うべき役割という世代的な観点からも，質的研究を継承するとはいかなることであり，今後どのような形が可能なのかということを考えることは重要であると思われる。ここでは，きわめて萌芽的な形ではあるが，シカゴの振り返りのみならず，本プロジェクトに参与する中で，筆者が何を学ぶことが出来たのか，またどのように影響を受けたのかを広くリフレクションし，質的研究の生成継承のあり方を筆者なりに考えてみたい。

語りの視点をどうとらえるか
―「てっぺいくん課題」にみる 裁く者の視点と裁かれる者の視点―

企画：高橋菜穂子（日本学術振興会／京都大学）
山田早紀（日本学術振興会／立命館大学）
司会：山田早紀（日本学術振興会／立命館大学）
話題提供者：浜田寿美男（供述心理学研究所）
高橋菜穂子（日本学術振興会／京都大学）
村山満明（大阪経済大学）
山田早紀（日本学術振興会／立命館大学）
指定討論者：大倉得史（京都大学）

企画趣旨

他者の語りを聞く時、聞き手の視点はどこに置かれているのだろうか。語り手か、語られている出来事の登場人物か、それともその出来事を俯瞰する別の第三者なのか。従来のナラティブ研究などではこの点に関してほとんど顧みられることはなかったように思われる。しかし、他者の語りを聞く際に、聞き手がどこに視点を置いているかということは、その理解にも大きく影響するのではないだろうか。そうした視点の置き方が実際に大きな問題となりうる状況の一つとして、「裁判で被告人の供述を聞く」という場面がある。被告人が出来事（事件）について語るのを聞く時、どこに視点を置くかによって事件に対する判断も異なってくるのではないか。例えば、法廷場面の裁判官の語りは、しばしば、人称的な視点を押し殺し、ほとんど無人称あるいは超人称と言わざるを得ない文体にはまってしまう。当事者が生身で生きた事実を、そこに必然的に入り込む視点性からとらえ、裁かなければならい裁判の事実認定において、個々具体的な視点を超えねばならないという客観主義が色濃くしみこみ、人々が生身の身体で抱えている視点に対して無関心になってしまうという事態が起こるのである。

こうした問題意識から、私達は「てっぺいくん課題」を作成し、他者の視点を獲得することがいかに困難なものであるかを検証することを試みた。この課題は、被告人の供述を聞いた第三者が、その外形的不自然さに囚われることなく、被告人の視点からその供述を理解できるかを調べようとするものである。今回のシンポジウムでは、てっぺいくん課題の由来、理論的背景と内容、それを用いた調査結果を報告する。課題の構成や結果の分析について質的心理学、法心理学の境を越えて議論を行なうことで、語りにおける聞き手の視点性について幅広く検討することを目指す。

話題提供：1）「てっぺいくん課題」の由来

浜田寿美男（供述心理学研究所）

「てっぺいくん課題」作成の背景について報告する。「てっぺいくん」とは、映画「それでもボクはやってない」（周防正行監督・2007 年公開映画）の主人公、金子徹平のことである。「てっぺいくん」は電車内痴漢事件の刑事被告人となった人物である。満員電車のなかで女子中学生から痴漢だと言われたてっぺいくんは、一貫して無実を主張するのだが、その弁解が不自然だとして有罪の判決を受ける。しかし、その弁解の「不自然さ」は第三者の目から見ての不自然さであり、てっぺいくんの視点からは、その不自然さこそがむしろ彼が無実であることを示している。彼に有罪判決を下した裁判官はその彼の視点に立ち切れなかったのである。この他者理解の問題は、サリー・アン課題の延長上の何かではないかとの想定の下、これを「てっぺいくん課題」と呼んで、さまざまに思考をめぐらしてきた。

話題提供：2）「てっぺいくん課題」の理論的背景

高橋菜穂子（日本学術振興会 / 京都大学）

「てっぺいくん課題」の理論的背景について報告する。私たちが他者の体験を聞くとき、時に、上空飛翔的な無人称の視点に引きずられ、それこそ客観的な真実であると思い込むことがある。これが、裁判場面では、判決の結果すら左右してしまう大きな問題となり得る。この問題は、裁判場面のみならず、広く、心理学における他者理解の問題とも関連するものである。このことを検討したのが「てっぺいくん課題」である。今後、「てっぺいくん課題」を利用していく上で、いかなる理論として位置づけられるかについて報告する。

話題提供：3）「てっぺいくん課題」の課題内容と作成

村山満明（大阪経済大学）

「てっぺいくん課題」の課題内容と作成における焦点について報告する。「てっぺいくん課題」は刑事事件の事例について、被告人の語ることばに対して、回答者（つまり聞き手）はそのことばが「真実か嘘か」について判断し、その理由について回答するものである。

話題提供：4）「てっぺいくん課題」の実施結果と分析

山田早（日本学術振興会 / 京都大学）

「てっぺいくん課題」を実施した結果について報告する。とくに判断理由の内容について回答者が被告人の立場に立って被告人のことばを理解しているのかどうかということに焦点を当て、分析を行なう。

質的心理学としての現象学：その方法、そして他者との出会い

企画・司会：渡辺恒夫（東邦大学）
話題提供者：植田嘉好子（川崎医療福祉大学）
渡辺恒夫（東邦大学）
田中彰吾（東海大学）
話題提供・指定討論者：西研（東京医科大学）

企画趣旨

難解な現象学をもとに、心理学研究者が使いこなせるよう経験科学的方法を編み出すことは容易でないが、ボランティアの現象学、自我体験の現象学、身体知の現象学と、実績を上げている研究者に、フッサールの「本質観取」の技法化を考案している現象学哲学者を迎えて、各自の技法化の実例を示すことで、現象学的心理学の発展に寄与したい。さらに、本大会テーマにも含まれる「繋がり」ということに関連させ、「現象学的な他者との出会い」を取り上げたい。現象学を質的心理学として展開するには他者が研究対象となるが、現象学における他者とは、自然的態度の中でドクサ化した「人間一般」の一例として「自己」を任意に選べば、他の人間は「他者」となるといった、「相対他者」ではない。マッハ的自画像として描かれうる現象野に出現した「絶対他者」であって、安易に「人間一般」への包摂を許さない。このことは二つの難問を生み出す。第一に、現象学独自の発見である絶対他者の次元を、経験的研究においていかにテーマ化するかという問題である。第二に、現象するのは自己と他者であって「人間一般」ではないにもかかわらず、「人間科学」としての現象学的心理学がなぜ可能なのかという問題である。これらの難問についても示唆を求めたい。

【話題提供：中高生のボランティア体験にみる自己と他者の共生の意味】

植田嘉好子（川崎医療福祉大学）

対人支援の領域では、「他者」が認識論上の問題である以上に、支援という“実践上の課題”として現れる。現場でよりよい支援を達成するためには、科学的・客観的な疾病・障害の理解だけではなく、患者やクライエント本人の立場から、その人の疾病や障害の経験を理解することが求められる。これまでにも支援や教育の領域で、対象者の経験理解を目的とした研究方法が提示されてきた（van Manen, 1997; Benner,1984, 2009 他）が、筆者は現象学の基本概念である「現象学的還元」に立ち返る必要があると考える。従来の「対象者の経験のありさまと生き生き描く」という叙述的手法ではなく、「対象者の経験が研究者にどのように映り、確かめられたのか」という研究者自身の経験の内省を通して、対象者の経験に対する理解を客観的視点から実存的視点へと転換させる手法である。これによって中高生の対人支援ボランティア体験を研究したところ、彼らは当初「誰かの役に立ちたい」など素朴な思いで活動を始めるが、支援相手は彼らの想像をはるかに超えた状況にあり、時には支援を拒まれることも経験する。自己とは大きく異なる欲求を持つ人々との直接対峙に、困難や戸惑いを覚えていた。これに反発し開き直る生徒がいる一方で、何らかの契機で乗り越える生徒がいる。後者の生徒は、これまで無自覚に是としてきた自身のあり方に気づかせ、新たな自己のあり方へと導く「他者」との出会いに驚きと喜びを表明していた。「弱い人・助けるべき人」から「かけがえのない相手」への変遷――福祉教育の目標理念である「他者との共生」が、経験的次元においていかに生成されるかを例示したものと考えられる。

【話題提供：自我体験・独我論的体験研究を通じて考案した「フッサール心理学」の技法】

渡辺恒夫（東邦大学）

私が、『質的心理学研究』に自我体験・独我論的体験の調査研究を発表しつつ（渡辺、2005, 2008, 2012）、研究方法の現象学化を図ってきたのは、これらの体験が広く見られるにもかかわらずテーマ化され

て来なかったのは常識的科学的世界観と折り合いが悪いため「間違った体験」視されていたからであり、体験の正誤をカッコ入れするフッサール現象学によってしか適切に研究できないと痛感したからである。フッサール現象学を可能な限り忠実に経験科学化したものをフッサール心理学 (Husserlian Psychology) と称する。その技法の核心は、① epochè を中心とした現象学的還元を、事例テクストを他者の体験の記録として読むのではなく自分自身が体験し記録したものとして読むという「テクストの一人称的読み」で代替し、② 本質観取を「内的体験の構造図解法」で代替するところにある。これを、Giorgi(2008) に学んだ 3 段階分析表へと統合し、自我体験の直後にキリスト教的化身教義を自力で創造した 6 歳児の事例テクストを分析することにより、技法を例示する。また、自我体験・独我論的体験の現象学的分析が、発達性エポケー（児童期における独我論的世界の実在）という発生論的仮説を導いたことも示す。このことは、企画趣旨で言う第一の難問への対応を困難にする。第二の難問に関しては、現象学的心理学における他者とは「もし私があなただったら」という「可能世界における自己」となるので、科学的心理学が「他者」で「人間一般」を代表させるのと対照的に、「自己」をもって人間一般を代表させることで躓きの石を回避することになる。「私」が誰に対して妥当するかの問題は、超越論に属するので扱えない。

【話題提供：身体知の現象学と心理学】 田中彰吾（東海大学）

企画趣旨にもあるように、心理学の方法論として現象学を定式化することは、なかなか容易ではない。教科書的には、Interpretative（解釈的）と Descriptive（記述的）の二つの主要な方法があることになっている（たとえば Langdridge, 2007）。発表者（田中）の場合、心理学方法論として現象学を学んできたというより、フッサールやメルロ＝ポンティの現象学が提起している問題意識から出発して、従来の心理学のあり方を批判的に考え直すことに力を注いできた。心身二元論や客観主義など、科学的心理学が暗に前提とする世界観を括弧に入れ、事象そのものから心理学を立ち上げようと試みてきたわけである。「身体知の現象学」も、そうした試みの一環である（田中・小河原 , 2010; Tanaka, 2011 など）。身体知とは、一般に「身体が知っている」「身体が覚えている」等と表現されるタイプの知識を指す。タイプの打ち方や自転車の乗り方など、例は豊富にあげることができる。この種の現象は、従来の心理学の枠組みでは「条件反射」や「手続記憶」の概念でとらえられてきた。前者は、心とは別の身体を機械論的にとらえる見方に立っており、後者は、特定の行動を遂行するための情報処理プログラムを脳や心に帰属させる見方に立っている。しかし、現象学から出発するなら、ドクサを排して「身体が知っていること」をありのままに記述すべきであろう。そうして見えてくるのは、心とは区別できない「生きられる身体」が、与えられた環境における行動のしかたを知っている、ということである。メルロ＝ポンティは身体図式の概念に依拠して、この事態を綿密に記述している。身体知は、身体が知の主体であることを示すだけでなく、「身体化された心」の見方を促す概念でもあるのである。

【話題提供・指定討論：フッサール現象学の根本動機とは】西研 (東京医科大学)

現象学は、いま、さまざまな質的研究法の一つとして注目されているが、しかしそれがどのような手法なのか、またその背景にどのような思想をもつものなのか、という点について、広範な合意ができているとは言い難い。その理由はさまざまに考えられるが、とくに、現象学の創始者フッサールに対して、弟子のランドグレーベ、フィンクらがハイデガーの影響下に「超越論的主観性」「超越論的還元」などの主要諸概念に対して批判――私見ではフッサール自身の根本動機をつかみそこなった批判――を繰り広げ、その結果、フッサール現象学の動機が曖昧にされてしまったことが大きい、と私は考えている。「話題提供」としては私なりにフッサール自身の動機と方法とを簡潔に再構成して示し、その上で、その方法を経験科学としての質的研究に応用するさいにどういう点がポイントになるか、を示してみたい。またその観点から他の方々との対話を試みたい。

医療と生活文化：心理学・社会学・看護学の豊穣化を目指して

企画・司会：樫田美雄（徳島大学大学院ＳＡＳ研究部）
話題提供者：氏家靖浩（仙台白百合女子大学 発達心理学）
石井俊行（四国大学看護学部　看護学）
堀田裕子（中京大学非常勤講師 理論社会学）
指定討論者：サトウタツヤ（立命館大学）

本シンポジウムの概要　樫田美雄（徳島大学大学院 SAS 研究部）

医療と生活文化の関係を、実例に基づいて経験的に検討する。氏家氏には、東日本大震災時の報告をしてもらう。氏家氏の父親は肺がんの術後で、在宅酸素療法だったが、地域コミュニティに支えられ生きながらえた。それを可能にしたコミュニティの生活文化が報告される。石井氏には、慢性腎不全患者の便秘に関する調査から、血液透析患者としての生活が、便秘に関わってどのように、生活としての複雑さと総合性を持ったもの、すなわち、「文化」になっているのか、を報告してもらう。最後に、堀田氏には、ビデオエスノグラフィーという方法によってあきらかになった、療養者の社交性（例：もてなしとしてのリハビリ）を主張してもらう。各報告では、①地域コミュニティが、メンバー間に根源的な葛藤を抱えつつも、災害時には緊急事態対応性をもって現れ得る場合がありうること、けれども、それが常に期待できることではないこと（氏家報告）、②血液透析をしている腎不全患者は、「便秘との対話」をしながら、生活を送っているが、その生活文化は、日常的には排便が望ましいけれども、透析中には、望ましくないというような療養的条件への対応という、難しさを持っていること（石井報告）、③在宅療養のリハビリ場面においてリハビリの実践が、提供者側にとって相互行為的意味をもつだけでなく、被提供者側にとっても相互行為的意味＝もてなしとしての意味＝を持つものであること、等、それぞれに「療養者における生活文化」の難しさ・面白さを指摘することになるだろう。すなわち、３つの報告はいずれも、「在宅療養者の生活文化」の「思いもかけない豊かさ」を明らかにする、個別科学（心理学・看護学・社会学）の成果といえるものになるだろう。総括討論の場では、コメンテーターのサトウタツヤ氏の力をかりて、それらが単独の学問的成果であるだけでなく、諸学の統合的な発展・豊穣化にも貢献するものになっていけるかどうかを吟味していきたい。そのようにして、療養者の生活文化を研究する、医学とは別の、太い思考と実践の道筋を作り上げていきたい。（以下、各報告ごとの要旨を発表順に掲載する）

第１報告：震災と在宅酸素療法：生をささえた災害時コミュニティと日常

氏家靖浩（仙台白百合女子大学 発達心理学）

対私は、コミュニティというもののあり様についてと、医療・福祉・教育の場において素人 (非専門職) によって専門職よりも効果が示される現象は、どういう場合であるのかについて、検討をすすめている。望んで遭遇したわけではないが、まさにリアルタイムで当事者のひとりとして、自らの研究テーマ (のようなもの) に触れる機会に出くわすこととなった。

東日本大震災で震度の大きかったエリアである宮城県北部の平野のはずれには、高齢の私の両親が暮らしていた。白内障術後の母親と肺がん術後で在宅酸素療法を受けている父親である。大きな余震と停電、猛吹雪と急激な気温の低下で最悪の状況を覚悟し、偶然比較的近くの地区で相談活動をしていた私は、地割れが目立つ道路に車を走らせ、家に駆け付けた。そしてそこで目にしたものは、病や障害を抱えた高齢の隣人たちが集まり、共に支えあって生を紡ぎ出しているコミュニティの姿であった。

ここには興味深い前提がある。普段は必ずしも、穏やかな人間関係ではない。時に不快な緊張を抱えることもある。しかし長くひとつの場所で暮らす中で生成されて混沌とした、清濁併せ飲むコミュニティの生活

文化が、結果として「生」を支えていたという解釈が妥当であると考えられた。

だとすれば、こうしたコミュニティはいつも緊急時には、共生を育めるのであろうか。いや、そうは考えられない。一方では災害時のユートピアが顕在したかもしれないが、この災害を契機として、人も場も変化がなかったのに解消 / 消滅したコミュニティの話題も枚挙にいとまがない。これらを読み解く視点として、十分に参与観察する姿勢を持つことと、時間 / 経過について考慮すべきであると提起したい。

第２報告：慢性腎不全患者の便秘に関する現状の分析　石井俊行（四国大学看護学部 看護学）

わが国の慢性腎不全患者数は 2009 年末で 29 万人を越えて、高齢患者、糖尿病性腎症患者の増加から年々患者数は増加している。慢性腎不全患者は血液透析治療だけでは腎臓の働きの代行が出来ないことから、生涯にわたって水分・食事の制限、薬物療法や運動療法など日常生活上の自己管理を継続していかなければならない。患者は水分や食事制限に加えて、腎機能の低下から腸内細菌の変化を生じて便秘しやすい高カリウム血症薬剤を服用しなければならない。また、高齢や透析後の強い倦怠感などから運動量が減少して腸管蠕動運動が低下する、カリウムの摂取制限から食物繊維の摂取量が不足するなど様々な要因によって、一般健常者より便秘の頻度は高い。便秘は虚血性大腸炎、致死性の消化管穿孔などの原因ともなり、日常生活に大きな影響を及ぼす。このことから多くの患者に対しては、緩下剤が処方されている。しかし、一日おきに行われる 4 時間をベッド上で過ごす透析治療の際に排便しないように、自宅でゆっくりと排せつできるように自分の排便をコントロールしている患者も多い。便秘時の対策としては、朝に冷たい牛乳や水を飲んだり、市販の下剤を服用してコントロールするなど患者個々が自分の排便パターンを理解して対応している。一方で体調不良から下痢が続いた日には、明日の透析中に便が出そうになったらどうしょうなど、心配し悩む患者も多い。このように、日常生活の中に透析治療がある毎日の患者は、便秘と対話しながら生活を送っているのである。シンポジウムでは、他のパネルメンバーおよびフロアの方々と意見を交わしながら、慢性腎不全患者の便秘に関する現状の分析から、生活文化的観点による血液透析患者研究の可能性を探究したい。

第３報告：ビデオエスノグラフィーで明らかになる在宅生活文化：社交としての在宅療養生活

堀田祐子・樫田美雄（中京大学非常勤講師 理論社会学・徳島大学大学院 SAS 研究部）

私は現在、ビデオエスノグラフィー（ビデオデータとフィールドワークの両方を用いるエスノメソドロジー的研究）の手法で、在宅療養の現場を記述し分析する研究を行なっている。とりわけ現象学的社会学や身体論の観点から、必ずしも意識的に行なわれることのない相互行為場面の分析に重点を置いている。

たとえばモノには、一般に人びとがそれをどう用いるかという点で、間主観的な意味世界が背後にある。したがって、モノの使い方の変化は、意味の変化であり、ある間主観的次元から別の間主観的次元への移行である。このような意味の変容は、家庭用品を「医療化」したり、医療器具を自分たちが使い勝手の良いように「脱専門化」し「家庭化」したりする、在宅療養の当事者たちの実践に見出すことができる。

また、空間の意味も当事者たちによって作られている。在宅療養生活において、療養者は介護者からの行為を「適切なかたちで」受けるのであり、ときに介護者の行為をサポートすることさえする。“ 皆さん（介護者）に気持ち良く帰っていただきたい ” と言う療養者もいる。療養者は、相手がどういった「客人」であるかによって、応じ方や「もてなし方」を工夫してもいる。在宅療養は「社交」の場でもあるのだ。

こうした意味世界は「見られているが気づかれていない」出来事をつぶさに “ 見る ” ビデオエスノグラフィーによって明らかにされうるだろう。だが、実証的研究にはデータをどう読むかという問題がつきまとう。したがって、観察者のまなざしを吟味する作業もつねに同時に行なわねばならない。また、前反省的かつ身体的レベルでの相互行為を、ビデオエスノグラフィーで記述し分析することの意義と問題についても検討しておく必要がある。シンポジウムではこれらの作業の成果を包括的に発表したい。

企業におけるエスノグラフィー

企画 : 第 9 回大会準備委員会
司会 : 茂呂雄二（筑波大学人間系）
話題提供者 : 鹿志村香（日立製作所デザイン本部）
臼井東（日立製作所デザイン本部）
岩木穣（筑波大学）

概要

最近、企業においても質的方法論が注目され、業務改善やマーケッティングの現場で採用されることが多くなっている。この講習会では、実際に質的方法論を採用し、活用した事例を素材にして、企業活動そのものを理解しながら、企業の活動のあり方を振り返りつつ、新しい活動の質や形式の創造を目指して議論する。

企業の活動は複合的で複雑である。利益追求はもちろんであるがそれと同時に、働く人々、使用する道具、人々の関係や、使用する機器との関係を、より良いものに変えつつ、企業活動の意味や活動の目的を重層化し、変化させることも求められる。このような変革は、特別なことではなく、仕事をしているものならば、ごく普通に誰でも実践することである。エスノグラフィーとは、働くものなら誰でもする、実践としての臨床過程である。言い換えれば、エスノグラフィーは、特段専門家を必要としない、人々の学びあいの過程ともいえる。

スケジュール

講習会前半では、日立製作所デザイン本部におけるユーザエクスペリエンス研究の概要と取り組みの具体的事例を紹介する。

後半では、インタビュー映像に基づいて、デザイン本部でしばしば用いられている経験の表現手法である「エクスペリエンス・テーブル」の作成を演習として行い、企業におけるユーザエクスペリエンス研究の実際を体験していただく。

参加 (受講) 可能人数：
15 名まで

参加費用：
2,000 円

Web とサブカルチャーのエスノグラフィー

企画・司会 : 第 9 回大会準備委員会
運営担当 : 上野直樹（東京都市大学）
ソーヤーりえこ（東京都市大学）
企画協力者 : 谷杉歩音
増田陽大
藤平一平
江島裕斗
徳山博章 (以上、東京都市大学）

講習会概要

現代において、web やモバイルは、活動、体験のあり方、人々の繋がりのための不可欠な部分を構成している。また、都市などの特定の空間も、また、web やモバイルで提供される仮想空間と密接に結びつき、新たな空間を構成している。すなわち、web やモバイルで作られる世界は、それ以外のリアルな世界と独立して、閉じた仮想空間として存在しているのではなく、否応なく様々な現実に結びつき拡張現実的な世界を作り上げている。このような拡張現実の拡大に伴い、エスノグラフィーも、また、新たな現実を捉えるための新たな観点および方法を求められている。

ここでは、実際にこれまで行われたエスノグラフィーの事例を紹介しながら、web やモバイルと不可分に構成された活動、体験、人々の繋がり、空間をどのように見ていくことができるかの観点および方法を提示することを通して、現代のエスノグラフィーのあり方を探る。

具体的な事例とそれを見ていく観点

この講習会で焦点を当てるのは、ギーク系、オタク系といったサブカルチャーである。こうした文化における web、モバイルの使い方の特徴は、一つには、都市や知識、情報、作品といったものにマーキングすることである。彼らは、例えば、Twitter や Foursquare を用いて、都市の至る所にマーキングし、それを社会的に共有する。それは、あたかも、都市における自分のテリトリーを可視化するかのようである。ソーシャルメディアによって多くの人々にマーキングされた場所は、また、一種の「ランドマーク」や特定の関心を持った人々が集合する「聖地」として可視化される。同様のことは、web にアップされている様々な知識、技術、作品などについてもなされる。こうした web 上の様々なマーキングは、いわば情報空間におけるランドマークや人々の軌跡を社会的に観察可能なものにしている。

多くの人々による都市や知識、作品などへのマーキングは、また、特定の関心を共有する社会的な繋がりを形成する。その繋がりは、しばしば、ネットを超えて、リアルなものへと発展する。このように、ネットとリアルは、融合し、拡張現実的な世界を作り上げている。拡張現実の形成において、彼らは、彼ら自身が「カジュアルなネットストーキング」と呼ぶ手法を用いる。つまり、関心を共有している人々のマーキングやそ軌跡を辿ることで、自分の関心の場所、領域、知識を広げると同時に、そのような人々と繋がって行く。こうした手法は、まさに、現代的な意味での「人々の方法＝ ethnomethod」と言うべきものに他ならない。

以上のようなことは、都市、知識、作品といったものが、従来とは大きく異なったコンテキストに位置づけ直されつつあることを示している。ギークやオタクは、もちろん極端なケースだが、むしろ、こうしたケースの中に近い将来の知識、技術、作品のあり方、繋がり方が示されているであろう。講習会当日は、以上のような観点でいくつかの事例を見ながら、現代的エスノグラフィーの観点を紹介し、また、議論していていく。

現代的なつながりを捉える：
オタク・カルチャーのケース・スタディ

企画者：第９回大会準備委員会
ファシリテーター：石田喜美（常磐大学）、岡部大介（東京都市大学）
企画協力者：木村汐李、住谷昌美、関のどか、久保木佑実、
永山香織（以上、常磐大学）
松浦李恵、鰐淵久美（以上、東京都市大学）
Stephanie Coates（La Trobe University/ 東京都市大学）

「制度的な組織の境界を超えた繋がり、活動、学習」をメインテーマとする本大会において、新たな人と人とのつながりのありようを捉えるためのアプローチや視点、方法論についてワークショップ形式で検討する講習会を実施する。

90 年代後半以降、特定非営利活動促進法（NPO 法）の設立に伴うボランティア活動の拡大や、web・モバイル技術の進展と拡大など、社会的・政治的・技術的な状況の変化を受け、人々のつながりのありようが大きく変化するとともに、それまでには見られなかった新たなつながりが生み出されてきている。特に近年では、中東・北アフリカ地域における大規模な民主化運動や、ニューヨークのウォール街で生じた「ウォール街占拠デモ (Occupy Wall Street)」、そして、東日本大震災による福島第一原発所事故を受けた反原発運動など、ソーシャルメディアでの呼びかけによって人々が結集し、政治的な活動を行う動きも世界中で見られるようになった。

現在生まれつつある、このような人と人とのつながりを、我々はいかに掬いとることができるのか。この問題について参加者とともに考え、新たな手がかりを見出すことが本講習会の目的である。

本講習会では、新たなつながりについて考えるためのひとつの事例として、オタク・カルチャー（腐女子カルチャー）をとりあげる。その理由は、オタク・カルチャーが「参加型文化」（participatory culture）(Jenkins, 2011) ※と呼ばれる、人と人とのつながり、生活のありよう等を有することによる。Jenkins が挙げる「参加型文化」の５つの特徴――①芸術的な表現や市民参加に対する障壁が比較的低い、②創作すること、創作物を他者と共有することに対する強力なサポートがある、③経験者のほとんどが知っていることを新参者へと伝えていくような、ある種のメンターシップ (mentorship；メンター制度) がある、④自分たちの貢献（contributions; 発言・投稿作品）が重要なものであると信じるメンバーがいる、⑤お互いに一定の社会的つながりを感じるメンバーたちがいる。（少なくとも、メンバーは、自分が創作したものについて他人がどう思っているかを気にかけている。）――は、オタク・カルチャーのみに限定して見られるものではない。むしろ、ここで挙げられている特徴は、近年新たに生み出されつつある、ソーシャルメディア等を通じた新たなつながりにも共通するものであると考えられる。

そこで本講習会では、オタク・カルチャーの当事者をゲストとして招聘し、当事者と研究者（参加者）とが直接、相互行為を行う機会を提供する。当事者と参加者との相互行為から見いだされた知見について、両者がともにディスカッションする場を設けることによって、新たなつながりのありようを捉えるための方法論について協働的に考える機会を構築したい。

（※）Jenkins, H. (2009) Confronting the Challenges of Participatory Culture: Media Education for the 21st Century. MIT Press.

当事者のペルソナを活用した地域再生ワークショップ試行

企画・運営 : 渡辺 理（富士通研究所ソフトウェアシステム研究所）

ペルソナ法とは人間中心設計に基づく設計技法である。ターゲット層を調査して作る架空のユーザ像をペルソナと称し、関係者はあたかもそこにペルソナが存在しているかのような気持でペルソナに語りかけながら設計を進めていく。これにより関係者が一体となって顧客志向な製品・サービス開発を可能にすることが期待されている。当社においては、主婦やシニアを想定したパソコンや携帯電話の開発に活用されてきた。この場合、複数の関係者が一体のペルソナを利用する。

一方、ペルソナの原義は深く、本質的な個性（人格）という意味や、音を通して（Per-Sonic) 人格が共有されることで人々の共通感覚が形成されてきたことを表している。そこで、私は、ペルソナを地域の当事者達による地域再生検討の場に応用することを試してみた。地域の様々な人々がお互いの立場や考えを相互に理解することで、新しい触発が起きたり地域全体を見渡した深い合意形成が進むのではないか？と考えたからである。学生実験、被験者実験、長野県須坂市をフィールドとする地域の当事者によるワークショップなど、様々な場で複数のペルソナを試し、およそ下記のことがわかってきた。

(1)　カウンセリング技法（意味への応答）を参考にしてインタビューを行い、当事者の成功体験やこだわり、板ばさみとなっているポイントや人となりをペルソナに反映し、打ち合わせの場でそのペルソナを参加者達の前で紹介すると、当事者が積極的に自分らしさを表出して行動してくれることがあった。これは、特に少人数（4，5 人）のワークショップで顕著であった。

(2)　当事者達がペルソナを使って新しい連携案やサービスを考え出すことは、想像力～創造力が必要とされるためか、思いのほか起こらなかった。人数が多すぎたり参加者が偏っていたためかもしれない。一方、当事者がペルソナの発言を振り返ることでお互いの論点の不一致に気づき、深い合意に向けて検討を継続することが何度か見られた。

(3)　非当事者がペルソナを並べて眺めることで地域再生のヒントを発見することがあった。

(4)　被験者実験にて、架空のペルソナ (主婦や自治会長、市長) を用意しておいて参加者に紹介すると、参加者が演技のツールとしてペルソナを使い、対話の促進剤となることがあった。

(5)　学生実験にて、模造紙に複数のペルソナを書いて眺めさせると、それぞれの利害を調整した折衷案を考えだした。

今回のワークショップでは、上記の経験を踏まえ、参加者に、簡単なペルソナの作成や活用を協同で体験してもらい、感想やコメントを集めていく予定である。

計画案 (1)：まずカウンセリング技法を援用したペルソナ作成法を説明し、数名のグループで地域再生（大学再生）を担う複数のペルソナ（役割）を試作してもらう。
計画案 (2)：次にペルソナ達が制度の枠を超えて課題に向かっていくための施策や仕組みの検討を行い、共創の過程を振り返ってもらう。

実際にやってみなければ何が起きるかわからない面も多々あるが、興味のある方に参加頂き、率直な感想やコメントを頂ければありがたいと思っています。

図１ペルソナの例

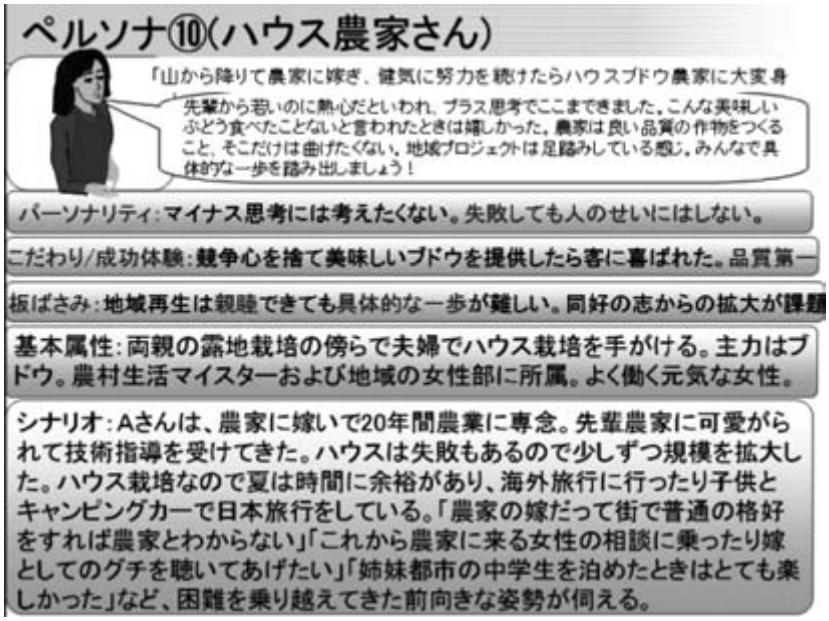


図２ 複数のペルソナを当事者に紹介

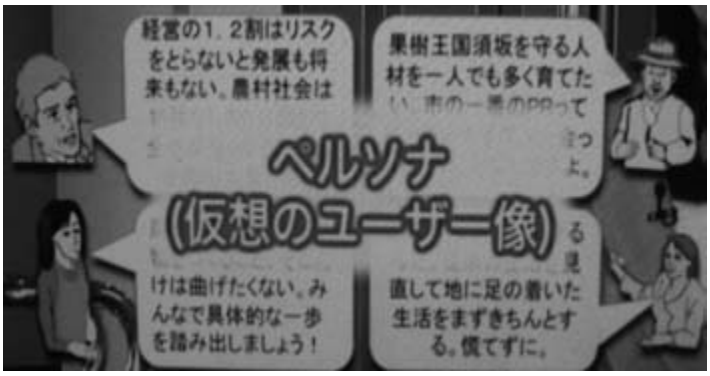
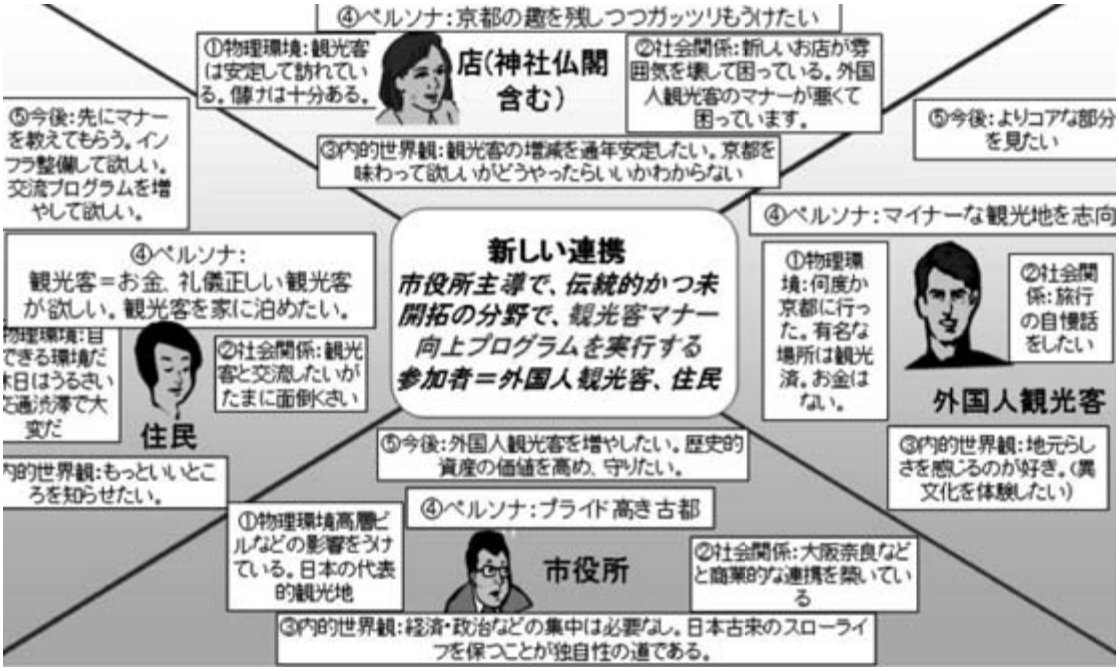


図３ 学生実験における複数のペルソナと利害を折衷した連携案



1 . 境界なきコミュニティとしてのブライトホール実践

岩男征樹（東京工業大学）

ローカルな創造性を越え，社会的な変革を促すコミュニティとは，どのようなものだろうか。残念ながら実践コミュニティやノットワーキングではそれを捉えることは難しい。なぜなら実践コミュニティには「境界」があり，ノットワーキングには核となる「中心」がないからだ。多くの人を吸い寄せ，引き込み，それ全体が重みとなって社会的に大きな力となるためには，境界変容であれ距離化であれ，可視化される境界は障害になる。同様に核のない散発的な結びつきでは，野火がやがて消えてしまうようにそもそも全体として力を持つことができない。そうではなく，あたかもブラックホールのように，核のもとへと異質な全てを飲み込み，重みを増していくことで次第に輝きはじめるような実践こそが，将来的には社会的な変革を促すのではないか。本発表では境界なき重心化としての新たな実践を「ブライトホール」と呼び，Web 自動車部の事例をもとに特徴を明らかにする。

2. 通信制高校の職員室における形態維持の様相 ～教員と生徒への参与観察を通して～

神崎真実（立命館大学大学院心理学専修）

近年、多様化する生徒へいかに対応してゆくかという議論が話題となっている。約 20 年ぶりに中央教育審議会で高校制度を巡る議論が始められ、これまで置き去りにされてきた高校教育への関心が復活することが見込まれる。しかし、多様な生徒へのよりよい対応は未だ各学校・各教員の技量に任されており、参考となる枠組みは極めて少ない。そこで本研究では、30 年ほど前から多様な生徒を受け入れてきた通信制高校という場でフィールドワークを行い、帰納的な分析法であるＫＪ法を用いて教員の生徒対応の特徴と機能を見出した。さらに、システム論的観点から、三層モデルを用いて教員の多様な対応を可能せしめる促進的記号および価値観を仮定し、全日制高校への転用可能性について考察した。

3. 秩序維持発話が観察ない小学校授業の事例分析 ―教師の権威性に着目して―

川島哲（東京大学大学院教育学研究科）

授業内において児童が教師の望むよう動かない場合があり、それに対して教師は秩序維持発話を行う。活動間の移行時には教師は言葉かけを行うが、児童の反応によっては 2 度以上の発話が必要になる。また、活動中に教師が求めている行動をとれない児童にも教師は発話を行う。これらを秩序維持発話と定義し、分析を行った。その中で、授業中に一度も秩序維持発話が観察されない授業が 2 授業あり、それぞれ異なった特徴を持つことが明らかになった。ある授業においては、授業を構成する活動の数が少なく、ゆえに移行を促進する秩序維持発話が観察されにくくなっていた。活動は主に教師と児童の双方向的発話が行われ、教師が児童同士の発話をつなげていく活動となっていた。他方の授業において教師は謝罪や限定の語を伴った指示を行い、児童の注意を引きつけていることが確認された。両授業の共通点として、教師の権威があまり強調されていない点を指摘できた。

4. 文化的アイデンティティの再構成にむけて
―対話的自己論の視点から追及する新たなる可能性―

Prymakova Kateryna（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

今や様々な分野から注目を集めている文化的アイデンティティだが，その定義や研究方法に対して基礎研究並びに多文化カウンセリングから多くの問題提起がなされている。本発表では，文化的アイデンティティを対話的自己論に基づいて捉えることで，概念の再構成と新たなる可能性，及び基礎研究や多文化カウンセリングの今日的課題の追求を試みる。

対話的自己論の視点から捉えた文化的アイデンティティは，自己の中で幾つも存在しうるもの，互いに対話的関係を持ち今・ここで様々な意味体系を構築しうるもの，他のアイデンティティと関わり合い，総合的なアイデンティティにおける位置づけを流動的に変化しうるものとして当事者によって体験される。そして，このようなダイナミズムは個人内のみならず，時空間的な拡がりを持った過程であると考えられる。面接調査の結果得られた語りの事例を紹介しながら，文化的アイデンティティ研究のこれからの検討を試みる。

5. 概念変化を支える仲間の役割
―数学の授業における 1 人の生徒に着目して―

山路茜（東京大学大学院 教育学研究科）

学習は個人の訓練や反復練習によってのみならず、他者との関わりの中で成立すると考えられる。加算的な学習と区別される認識の質的変化としての学習は、概念変化 (conceptual change) と呼ばれ、実験室における質問課題や教室における介入実験により、そのメカニズムが明らかにされてきた。統制によらない実際の教室における社会的要因の追究が課題とされている。そこで本研究では、概念変化を仲間との協働の中で経験される学習と捉え、生徒が概念を形成する過程における仲間との関係の様相を明らかにすることを目的とする。

グループ学習を行う中学 1 年の数学の授業を半年間観察し、概念変化を経験した生徒 1 人に着目して分析を行う。わからなかったことがわかるようになる概念変化の過程を描き、仲間とどのような関係を築いているか、仲間にどのような役割を担わせ、何を引き出しているかに焦点を当て、わからないと言える関係がいかにして概念変化を支えるかを検討する。

6. 子どもの観察データを質的に読み解く試み：
構造的記述とプロセス的記述の比較から

境愛一郎・中坪史典・中西さやか（広島大学大学院・広島大学・広島大学大学院）

保育・幼児教育分野では、子どもの観察データを基に、彼、彼女らの意味世界を理解し教育的な示唆を得ようとする試みが積極的に行われてきた。これらの研究では、テクスト化された事例を間主観的に解釈し、報告書では、事例を添えて解釈結果を提示するという手法が採用されてきた（e.g. 鯨岡 2005）。こうした手法では、事例の個別的理解や実践の省察が促される一方で、子どもが関わった現象を構造的に捉えることは困難である。また、子どもの姿が文章ストーリーとして再構成されるため、時系列に沿った子どもの経験のプロセスが記述されないと言える。

本発表では、現象の構造を記述する手法として M-GTA（木下 2003）、経験のプロセスを記述する手法として TEM（サトウ 2009）に着目した。ここでは、双方の手法に基づいて観察データの分析・記述を行い、その内容を検討することで、各々の特徴を明らかにする。そして、観察データから子どもを理解する方法としての可能性を探る。

7. 障害者と人生途中からきょうだいとなる意味 ――義理姉きょうだいの 1 事例分析――

高野恵代・岡本祐子（広島大学大学院教育学研究科・広島大学大学院教育学研究科）

高齢化社会を迎えた今，障害者家族は障害者の高齢化と同時に親の高齢化の問題を抱えた「二重の介護問題」に直面しており，きょうだいの援助的役割が大きくなると指摘されている（三原, 1998）。これまで様々な障害者のきょうだい研究がされてきたが，義理のきょうだいについて検討した研究はみられない。そこで本研究では，人生途中から障害者のきょうだいとなる意味を明らかにするために，半構造化面接を用いた 1 事例分析により検討した。

対象者は A さん（44 歳女性，会社員）。X-25 年に結婚し，X-23 年より夫の家族と同居。夫は 3 人きょうだいで，第 2 子で次女の B さん（46 歳女性）が障害をもつ（障害名は不明）。B さんは，食事はなんとか自分でとれるが，他は介助を必要とする。なお，X-2 年よりグループホームへ入所した。

本発表では，A さんの語りからみえる義理のきょうだいとしての役割や，将来の課題などを取り上げ，A さん自身の生き方も提示する。

8. 発達障害児をもつ保護者に対する教員の支援 ―保護者の障害受容過程に応じたニーズの変容―

奥村直子・川合紀宗（広島大学大学院教育学研究科）

教員が保護者を支援することは，保護者と信頼関係を構築し，連携する際に必要であり，また保護者の障害受容のあり方にも大きな影響を与える。しかし，実際には連携が進んでいないことが多い。そこで本研究では，発達障害児をもつ保護者の障害受容の状況と教員に対するニーズについて，保護者の語りを通して明らかにし，保護者の障害受容の状況に応じた教員の適切な支援のあり方を検討した。

まず保護者の障害受容に関する質問紙調査を行った後，時間軸に沿って，保護者の気持ちの移り変わりや教員とのやりとりについて半構造化面接法を用いて調査した。

その結果，保護者は，教員に不安と期待を抱いているが，教員との信頼関係を望んでおり，それが裏切られたりすると反発したりあきらめてしまうことが示唆された。また，教員が保護者の話を積極的に聞こうとする姿勢や子どもに対して真摯に向き合おうとする姿勢が大切であることも示唆された。

9. 子どもの「非行」と向き合う親たちの語りにおける笑い ―相互行為における意味や機能の検討―

北村篤司（東京大学大学院教育学研究科）

本研究では、子どもの「非行」と向き合う親たちの語りにおいて生じる笑いに注目し、それが生じる文脈や機能を明らかにすることを試みる。「非行」と向き合う親たちのセルフヘルプ・グループにおいて、笑いは、物事の見方を変えて話の深刻さを和らげたり、参加者に元気をもたらしたりといった効果をもち、重要な行為となっていると考えられた（北村 ,2011）。そこで、本研究では笑いがどのような場面で生じ、語りの場や、語り手や聞き手に対してどのような機能をはたしているかを検討する。具体的には、①インタビュー場面での発話を会話分析の手法を援用して分析し、笑いが生じる文脈やそこで生じている相互行為のパターンを同定する、②グループの語り合いで参与観察を行い①の結果と比較する、③参加者が笑いに言及している語りを分析する、の３つのアプローチを用いる。本発表では特に①に焦点を当て、笑いが生じるパターンとその相互行為上の意味を検討する。

10. 人付き合いを好まない高齢者の QOL 理論化 (2).
――人付き合いを好まない高齢者は人付き合いが出来ないだけの人なのか？

福島和俊・長谷川芳典（岡山大学大学院文化科学研究科・岡山大学大学院社会文化科学研究科）

「和を以って尊しと為す」を是とする文化において、人付き合いを好まない人はネガティブに評価されがちである。この問題に対して、われわれは人付き合いを好まない人たちの QOL 理論化を目指している。QOL 理論化の意義を探索的に示した前回発表の調査過程で、人付き合いを好まない高齢者たちは、単に人付き合いを避けているのではなく、それぞれに一人でいることを優先させる理由があることが示唆された。その選択において彼ら／彼女らは自分たちの人付き合いをどのように捉えているのかを今回のリサーチ・クエスチョンとし、2 施設の協力を得て、人付き合いを避ける傾向にある男性入居者 2 名（82 歳、88 歳）に面接を行った。彼らからは、一人でいたいという気持ちは自分の中ではきわめて「普通」のことであって、集団との接触を避けているつもりはないというデータを得た。このことは、彼らの人付き合いにおける QOL の規定因の同定につながるものとなろう。

11. ペルソナの地域再生への応用：
当事者の特徴を事前提示することが当事者によるワークショップにもたらす連携効果について

渡辺理（富士通研究所ソフトウェアシステム研究所）

ペルソナ法とは人間中心設計 (HCD) に基づく技法である。ターゲット層の利用者を調査して作り上げる架空のユーザ像をペルソナと称し、関係者はあたかも実在するようにペルソナに語りかけながら設計を進めていく。一方、ペルソナの原義は深く、本質的な個性（人格）という意味や、人格が音を通す（Per-Sonic) ことで人々に共有されて共通感覚を作り上げてきたことを表している。筆者らは、地域の当事者による地域再生構想へのペルソナの適用を試行中である。この場合のペルソナは、原義に則り簡潔な表現で深い内容を表すことが必要であろう。このようなペルソナを示すことで、当事者達は自分と他者との関わりについて理解を深め、地域全体に目を向けることが期待できる。発表では、長野県須坂市の農家や農業体験ツアー企画業者の 4 名によるペルソナワークショップの様子を説明し、ペルソナがもたらす役割演技の効果を検証する。

12. 産後うつ病発症に関連するアタッチメント・スタイル（AS）の変化

池田真理・上別府圭子（東京大学大学院医学系研究科　家族看護学分野）

[目的]AS が不安定であると産後うつ病の発症リスクが高くなるが、妊婦の AS の特徴が産後の精神状態に及ぼす影響を捉えた研究はない。本研究では、AS を構成する 7 つの態度に着目して産後の精神状態との関連を明らかにすることを目的とした。

[方法] 都内大学病院 1 施設において、妊娠後期に AS 面接（ASI）を受け、産後 1 ヵ月の時点で産後うつ病と診断された 16 名の女性を対象とし産後面接を行った。分析は ASI 及び産後面接の逐語録をもとに質的内容分析を行った。本研究は研究倫理審査委員会承認を受け実施した。

[結果・考察] 対象者は普段から不安な時は、夫・重要他者に打ち明け（アタッチメント行動）をして共感を得ていた。夫・重要他者以外に対しては AS を構成する 7 つの態度を用いて対処していた。出産によってアタッチメント行動は活性化され、産後の育児支援状況等と合わせて AS が変化し、産後の 1 ヶ月時点の精神状態に関連することが明らかになった。

13. 若年性認知症の親を介護する子どもの介護体験 ―認知症の受けとめと現在の気持ち―

河原智江・西村ユミ・池田真理・林由美・塩田藍・渡辺陽子
(横浜創英大学・首都大学東京・東京大学大学院医学研究科・
ケア研究会・逗子市障がい福祉課・尾道市立尾道市民病院)

＜目的＞本研究は、若年性認知症の親を介護する子どもが、親の認知症と介護体験をどのように受けとめているのかを明らかにした。

＜方法＞対象は、A 市内在住で、若年性認知症の親を介護している子ども（娘）5 名であり、調査期間は、2011 年 5 ～ 12 月であった。対象者には、介護を始めてから今までのことを自由に話してもらった。分析は、逐語録から、親の認知症の受けとめ、介護の体験などについて内容分析を行った。なお、本研究は B 大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

＜結果と考察＞対象者は、全員 30 代、きょうだいがいない者は 1 名であり、認知症の親の要介護度は、要支援 2 ～要介護 2、発症からの期間は、2 ～ 5 年であった。

親の認知症の受けとめの「認めたくない」と「症状が進んでいる」は、全員に共通しており、介護体験からの現在の気持ちでは、認知症ではない親やきょうだいのことを考え、自分の仕事や結婚をあきらめているという状況があった。

14. 認知症高齢者の場所に対する認知の特徴： 語りにおける場所の意味づけ

奥村直子・川合紀宗（広島大学大学院教育学研究科）

教員が保護者を支援することは，保護者と信頼関係を構築し，連携する際に必要であり，また保護者の障害受容のあり方にも大きな影響を与える。しかし，実際には連携が進んでいないことが多い。そこで本研究では，発達障害児をもつ保護者の障害受容の状況と教員に対するニーズについて，保護者の語りを通して明らかにし，保護者の障害受容の状況に応じた教員の適切な支援のあり方を検討した。

まず保護者の障害受容に関する質問紙調査を行った後，時間軸に沿って，保護者の気持ちの移り変わりや教員とのやりとりについて半構造化面接法を用いて調査した。

その結果，保護者は，教員に不安と期待を抱いているが，教員との信頼関係を望んでおり，それが裏切られたりすると反発したりあきらめてしまうことが示唆された。また，教員が保護者の話を積極的に聞こうとする姿勢や子どもに対して真摯に向き合おうとする姿勢が大切であることも示唆された。

15. 子どもの「非行」と向き合う親たちの語りにおける笑い ―相互行為における意味や機能の検討―

田中元基（淑徳大学大学院総合福祉研究科）

施設に入居している認知症高齢者が、施設を職場として語るといったことがある。このような現象は、記述、解釈されることは多いが、やりとりの中でどのように現象が生じ、意味づけられるかといったプロセスが検討されることは少ない。本発表では、施設を祭り会場や自宅と語る、一人の認知症高齢者（以下、A）と筆者のやりとりを対象に、A が施設をどのように意味づけ、他者に語るか、会話分析の手法を参考に検討した。

その結果、A は、例えば施設を祭り会場と語る際、室内の照明を提灯と説明するなど、筆者の注意を特定のモノに向け、その場にふさわしいモノとして語っていた。また、祭り会場にあるはずの屋台が存在しない理由を、片付けたからと説明するなど、その場にあるはずのモノがない理由をもっともらしく述べるといった、いくつかの特徴が見出された。これらの特徴を、A がやりとりの中でどのように用い、施設を異なる場として語るのか考察する。

16. 医療者・家族とは異なる側面から小児患者の入院生活を支えるボランティアの試み —K 病院小児科遊びのボランティアグループ「にこにこトマト」の活動から—

鮫島輝美・高尾知憲（京都光華女子大学健康科学部・元京都大学大学院人間環境学研究科）

小児にとっての「入院」とは、成人とは異なり、病識や入院・治療の目的を十分理解している訳ではない。そのため、小児にとって「入院」は、「非日常」の連続であり、治療がすべてにおいて優先され、「日常」は削ぎ落される。そんな中、ある患者の母親が「からだが病気であってもなくても子どもにとって必要なものは同じ、だから普通の子どもと同じ豊かな時間を、病院からでられないからこそ、外から運びたい」という思いから始めた活動が、「にこにこトマト」である。日替わりで様々な遊びが子どもだけでなく、同伴の家族にも提供されている。彼らは自らを〈自立したボランティア〉と呼び、活動費のすべてを寄付金でまかない、様々な活動を〈病院の外から吹く風〉と表現する。本発表では、この活動を関係論的視点から考察し、分析を試みる。結論として、彼らの活動は、既存の制度的な関係とは異なる「第三の関係」を創り出す活動と位置づけることができた。

17. 養育者の「巻き込まれ」体験

増井秀樹（京都大学大学院人間環境学研究科）

発達心理学の領域では、親を主体とみなした研究が増えている。具体的には、親になることを通じて人格的発達を遂げること、子どもを育てる中で夫婦関係が変化すること、親としての自覚は育児へのかかわりによって大きく変化することなどが分かっている。また、特に父親においては、育児時間にかかわる要因として、年収や性役割観などが検討されている。

しかし、先行研究の多くでは、育児を行動（例：おむつを替える）の頻度、あるいは育児の時間といった、数量的な指標から検討しており、養育者が何を感じながら育児に取り組んでいるのか伝わってこない。

そこで、本研究では育児を営んでいる夫婦への非構造化インタビューを通じて、上記の問題について探り、養育者の世界を協力者の生活実感に即して描き出すことを試みた。その中で、「巻き込まれ」体験というオリジナルな概念を打ち出した。

18. 神経症者のセルフヘルプ・グループにおける「リーダー」の実践と体験の分析

三好真人（明治大学大学院臨床心理学専修）

本発表ではセルフヘルプ・グループ (以下 SHG) におけるグループのリーダーたちの実践と体験を「神経症者の SHG」へのフィールドワーク (参与観察・インタビュー調査) を通じて検討する。

SHG は何らかの問題や症状を抱える人々が集うことで回復への知識を伝達しあっている。SHG 活動にはイデオロギーが存在し、参加者は蓄積されていく回復の知識を伝達し学習しあうことで、自らの問題や症状への理解を深めていく。

一方で SHG は「参加者同士はこの場では相互に平等である」ことを掲げるが、知識の伝達の過程には「教えるもの - 教わるもの」という構図が必然的に生じていた。グループ内には「リーダー」が存在し、リーダー達は症状を抱えた【当事者】でありながら、症状から回復するために訪れる人々を支援する【支援者】でもあるという二側面を持ち合わせて活動を継続している。リーダーの体験を二側面からとらえることで、SHG という心理社会資源のあり方の考察を行う。

19. 共感研究の歴史 part1

中妻拓也（立命館大学大学院文学研究科）

本研究では共感の概念についての歴史的変遷を概観し、共感がいかなる歴史を経て現在の概念に至ったかを提示することを目的としている。共感は、一般には「他者への思いやり」と類似、もしくは一致したものと考えられている傾向にある。今回の発表では、共感研究において歴史的変革といえる、共感を測定するまでの歴史を概観し、測定するのではなく、現象を記述し、理論を構築することを主としていた時代の様子を示す。この時代の研究動向は現在の共感の概念にもつながる示唆に富み、研究を概観することが、新しい研究への視座につながる重要な知見につながると考えられる。

20. 国境を越えた移住にともなう家庭内役割分担の変容過程の記述

滑田明暢（立命館大学大学院・文学研究科）

国境を越えた移住を行う際には、個人を取り巻く環境や個人の考え方に変化が起こると仮定される。では、家庭内の役割分担のような、個人にとってより私的な生活圏の事象においても移住にともなう変化が起こるのか。本研究は、家庭内役割分担の実践およびその実践に対する意味づけが、国境を越えた移住においてどのように変容するのかを検討する。海外に移住して 3 年以上居住あるいは現地に永住の意図のある日本出身の方々からインタビュー調査の協力を得た。具体的には、30・40 代（米国 7 名・英国 2 名）と 50・60 代（米国 0 名、英国 2 名とフォーカスグループインタビュー）の方々の協力を得た。就業するかしないかの次元においては、移住を経ても家庭内における役割分担実践の形に大きな違いは起こっていないように見えた。

一方、移住にともなって出現した対応するべき物事も家庭内の役割として捉えられており、微視的な次元での変化は起きていた。

21. 造形活動に媒介された世界の現象と行為の透明性について

松本健義・神保悠・藤田仁美（上越教育大学・兵庫教育大学大学院・上越教育大学大学院）

造形活動はその場や状況に新たな世界を現象させ，同時に，その世界の現象をかたちづくる造形行為それ自体についても自明な方法として自他間で「透明性」（Lave & Wenger, 1991）を成り立たせていく活動であるといえる。造形活動に媒介された世界の現象と行為の自明化の過程で，環境世界や周囲の事物，自他の行為は，新たな結び目をつくりながらその意味やはたらきをつくり変え，社会的で文化的なものへと質的に変化している。

本発表では，小学生の活動事例をもとに，事物と世界，自他と世界の結び目を造形物をとおしてつくる行為としての造形活動に着目し，結び目を媒介にして現象する世界と透明化する行為の具体性とを記述することで，従来の個人の経験やイメージの表現といった視点ではない，ものとものとのあいだやものと行為とのあいだを媒介し，自他の境界を超えて世界を現象させ行為を触発する造形活動のはたらきについて報告する。

22. 学校における長期実習を通した教職志望者の視点の転換と教師像の変容

岸野麻衣（福井大学）

学校での実習において、学生は「実習生」でありながら「教師」でもあるというアイデンティティの危機を経験し、それまで持っていた教師像にジレンマを感じ、転換していくことが大きな学習である。本研究では、学校における1年間の長期実習を通して、教職志望院生が、「教師」や「実習生」という枠組みを越えた「私」の視点を獲得し、教師像を自分のものとしていく過程を明らかにした。5名の院生がそれぞれ経験と省察を記述した報告書を分析対象とし、実習を経験する過程でのアイデンティティの危機、自己の視点の確立、教師像に関する信念の変容、変化に関わった要因と作用について、分析を行った。初めは立ち位置の揺らぎを経験しながらも、学校で熟練教師の振る舞いとそれに伴う子どもたちの成長を目にしつつ自分自身は失敗を経験する中、大学で教員や他校の熟練教師との対話により自分の見方や経験した失敗を省察し、視点の転換が図られていた。

23.「被災者の声」はどのように語られるか（1）
―震災と喪失をめぐるディスコース―

能智正博・北村篤司・向後裕美子（東京大学大学院教育学研究科）

本研究では、東日本大震災の1週間後に始まった朝日新聞の連載「いま伝えたい 被災者の声」を素材として、震災で生じた喪失についてのディスコース実 践の特徴や機能を明らかにすることを試みた。喪失の体験は、個人の内的なプロセスとしての側面もあるが、社会的状況の中で生じ、意味づけられるものでもある。個人は、喪失の体験を語るときにディスコースと呼ばれる社会的な観念の枠組みの型を利用し、またそれに制約される。本研究では、連載の3・5・7・9月の各1週間分の〈語り〉を対象として、「語りにおいてなされている行為」や、「構築されている被災者像」に注目して共同的な分析を行い、背景にあると考えられるディスコースの特徴を推察した。その結果、〈被害者レパートリー〉と〈復興者レパートリー〉という対照的な2つの語りの型が見出され、①それらが相補的に機能していること、②他方で特定の語りを抑圧する可能性があることが示唆された。

24. 複数の言語を背景にもつ子どもは
「自分らしさ」をどのように捉えているか

相浦裕希（早稲田大学大学院日本語教育研究科博士後期課程）

国境を超える人々の移動が大量に、かつ迅速に行えるようになった現代では、複数の言語に触れながら成長する子どもの数が世界的に増加している。本発表は、複数の言語を背景にもつ子どもが、「自分らしさ」をどのようなものと捉えているかを考察したものである。

年少の日本語学習者を対象に、日本語能力や学習を振り返る半構造化インタビューを実施した。「定性的コーディング」（佐藤 2008）の分析を経て、語りから「自己認識」「他者認識」「自己と他者の関係に対する認識」という3つの認識の焦点的コーディングを抽出した。コードを考察した結果、①日本語能力の伸長、②各認識の変容、③「自分らしさ」の内実や表明の仕方を考えていく過程、の3点の相関関係が示唆された。3点の相関関係によって明らかとなる子どもの「自分らしさ」の捉え方から、「全人的発達を支える教育」として位置づけられている年少者日本語教育のあり方を論じたい。

25. 自殺防止ＮＰＯ相談員の実践共同体への参加動機と活動維持に関する研究

東内祐広（静岡大学創造科学技術大学院自然科学系教育部博士後期課程）

自殺既遂者が 14 年連続で年間 3 万人を上回る事態となっている。自殺問題が再生産され、14 年間で 45 万人以上自殺によって命を失っている日本社会において、もはや自殺は個人の問題ではなく、社会の問題であると考えることが適切かつ妥当である。

自殺防止活動は一般的には非常に困難な仕事であると位置づけられているが、それにもかかわらず、「ボランティア」という無償の仕事として自殺防止相談に取り組もうとする市民活動がある。彼らが困難を乗り越え、職場や家庭という生活空間を超えたこの実践共同体に参加し、継続する動機について、自殺防止相談活動の相談員に焦点を当てた半構造面接調査を実施した。

SCAT 法を用いて 4 名のストーリーライン分析を行ったところ、最初の参加動機は多様であったが、相談員が「相談員になっていく」過程において、多様な他者との関係性から得た繋がりなどの影響及び相談員の内的過程における意味づけの変容がみられた。

26. 希死念慮をもつターミナル期の患者とのインタビュー

向後裕美子（東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース博士課程）

慢性疾患の増加と、患者主体の医療の広まり、医療情報へのアクセシビリティの向上により、近づく死を意識しながらターミナル期を生きる経験をする人が増加している。しかし、緩和ケアを受ける患者の希死念慮について国内外の先行研究をレビューした赤澤ら（2004）によれば、ターミナル期の患者の 8.5 ～ 22.7％に希死念慮が認められていた。ターミナル期の心理的援助を考える上で、希死念慮は重要なテーマと言えるだろう。

本研究では、自らを「末期患者」と呼ぶ 50 代女性が継続的なインタビューの中で語った希死念慮について、その変化の過程と要因について検討する。インタビューでは、早めにケリをつけたいという思いと長生きしたいという思いが、いずれも家族に迷惑をかけたくないという一つの思いから発していることが語られた。インタビューは、2012 年 5 月現在も月 2 回のペースで続けられており、今後の変化についても報告したいと考えている。

27. 解説活動における「熟達」について

並木美砂子（千葉市動物公園）

来園者に展示動物を解説することを通じて、いったい何を「知って欲しい」と思っているのだろうか。発表者は、これまで「博物館等施設における解説者の熟達化」をテーマとし、複数の解説者へのインタビューを通じてそのプロセスを追究してきたが、今回は、自身の解説活動を丁寧に省察し、その内容を他の解説者とともに検討してきたことを発表する。ここで「熟達」とは、来園者一人ひとりの世界理解に迫ろうとする態度と、自らの「見え方」への誘いかたの問題である。

28. すでにある具体的なものへの新しいまなざし ―福祉施設の地域化に向けた可能性―

石幡愛（東京大学大学院教育学研究科、NPO 法人クリエイティブサポートレッツ）

福祉施設の閉鎖性に対する問題意識から、福祉施設の地域化が叫ばれて久しい。福祉施設の地域化とは、1) 施設利用者が地域社会の一員として生活していくこと、2) 施設設備・機能を地域住民が利用できるようにすること、3) 施設職員が知識や技術を提供し、地域社会の資源となることを指す (大橋 ,1978)。本研究では、福祉施設の地域化を課題として掲げるある施設の参与観察と職員へのインタビューから、この課題に対する職員の意識を探った。職員は「社会」「地域」という言葉に対して縁遠いイメージを抱いていた。しかし一方で、近隣との付き合いから、具体的な個人としての地域社会を意識しており、利用者の生活圏を広げるという観点から、周辺地域における施設の役割や障害者の仕事を探っていることが明らかになった。彼らの姿勢を「すでにある具体的なものへの新しいまなざし」と名付け、福祉施設の地域化において、そのような姿勢が持つ可能性ついて論じた。

29. 知的障がい者のきょうだいにおける青年期のライフコース選択プロセス：複線径路・等至性モデルを用いて

笠田舞（東京大学大学院教育学研究科）

本研究では知的障がい者（以下，同胞）の兄弟姉妹（以下，きょうだい）であることが，進路や職業，配偶者の選択など自立の時期にある青年期のきょうだいのライフコース選択をどのようなプロセスで導くか，その体験過程について「今，ここ」の視点から明らかにすることを目的とした。青年期のきょうだい男女 12 名を対象として個別に半構造化面接によるインタビュー調査を行い，時間を捨象せず人間の多様性や複雑性を扱うための方法論（サトウ，2009）である複線径路・等至性モデルを援用し分析を行った。進路・職業選択の時期は原家族に対する役割の転換期であり，将来の同胞のケア責任を感じやすいが，親からの働きかけによって主体的なライフコース選択に広がることが示された。きょうだいにとって親から直接的な言葉で，自由な選択を保障されることは過度なケア責任を感じずに育った家庭から巣立っていくための重要なサポートになることが示された。

30. 災害救援ボランティアをめぐる“社会的なリアリティ” ～　東日本大震災の報道内容分析から　～

近藤誠司（ＮＨＫ大阪放送局）

東日本大震災では，「災害救援ボランティア」が当初不足した原因に関して，①被害が甚大かつ広大だったこと，②アクセスが困難だったこと，③ガソリンや燃料が不足していたこと，④余震や津波などの二次災害が懸念されたこと，⑤原発事故による放射能被曝リスクが懸念されたこと，⑥被災地側の受け入れ態勢が整わなかったこと，⑦ボランティアの「秩序化のドライブ」が進んだことなどがあげられてきた。
加えて，被災地で実際に救援活動をおこなっていたボランティアなどからは，『マスメディアによる報道のありかたにも、支援の不足や遅れを招く原因があった』とする指摘がなされてきた.

そこで，本研究では、地震発生から 1 ヶ月間の，災害救援ボランティアをめぐるテレビや新聞の報道内容を分析することで，どのような “ 社会的なリアリティ ” が構築されていたのか検証し , ボランティアとメディアのインタラクションに関して考察をおこなう.

31. 統合失調症患者のきょうだいとの語り合い ―発症前後における関係性の変化と連続性に着目して

原田満里子（東京大学大学院／日本学術振興会）

本発表では、精神障がいのひとつである統合失調症患者のきょうだいである楠さん（仮名）が、病気を発症した弟との関係性をどのように語るのか、発症前後で変化した点と連続性がある部分に着目して考察することを目的とする。筆者と楠さんは障がい者のきょうだい同士として「語り合い」（大倉 2008）を 4 回（約 9 時間）行なった。語り合いの中では、発症前の弟の面倒をよくみる兄と兄を慕う弟という関係性が「兄の声」という弟の幻聴を生み、発症時の行動を「命令」させたのではないかという関係性の連続性による楠さんの苦悩が見られた。発症後については、弟の人生への責任感を兄が抱くという点などの関係性の変化も見られた。これらから、弟と自分の関係性への綾に入り込む様が窺え、きょうだいとしてのアイデンティティや関係性の再構築といった課題が浮かび上がってきた。また、筆者との語り合いの展開についても考察に加えることとする。

32. 新任保育者はキリスト教保育をどう捉えているのか： 就職前のインタビューの分析から

鈴木幸子・江村綾野 (静岡英和学院大学・お茶の水女子大学大学院)

保育実践の根幹として重要な保育目標や方針等は、保育施設の全職員に共通理解されることが必要であるため、新任保育者にとっても重要である。キリスト教保育の保育目標や方針、保育の特色はキリスト教に基づいている。しかし、新任保育者たちは、キリスト教の信者とは限らず、キリスト教にかかわった経験は様々である。そのため、新任保育者たちがキリスト教保育をどのように感じながら実践していくのかを示すことは、保育者を支える上での示唆となるだろう。分析対象は、キリスト教の経験が異なる新任保育者 2 名に対して 2012 年 3 月に行ったインタビューの記録とする。分析には SCAT を用い、2 名の共通点や相違点を示す。

33. サグラダ・ファミリアに集う人々： 建築続行要因としての協力・葛藤

仲根聰子・伊藤哲司 (茨城大学人文科学研究科）

本研究は、スペイン・バルセロナのサグラダ・ファミリアに集う人々（ガウディの研究家や建築現場で働く人々）を対象にして行ったフィールド研究である。

1882 年に贖罪教会として着工され、130 年も経過する現在も建築が続行されているが、その要因を参与観察とインタビューで明らかにすることが本研究の目的である。

これまでに行った彫刻家、石工、模型職人等へのインタビューを通して、ガウディの意志の読み解き、建築物を次世代に残すことに多くの人々が協力していることが浮き彫りになった。他方、水面下ではさまざまな葛藤が繰り返されてもいる。ガウディの構想にないものが建築されたり、職人たちの意見が食い違っていたり、技術の伝承が十分なされていないといったこともわかってきた。

そのような協力のみならず葛藤も、結果的に建築が続行されていく要因であると考えられる。その具体的な様相をさらに研究し分析することが今後の課題である。

34. インタビューにおける研究者の視点の反映：ダブルインタビューによる検討

川崎隆（東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース）

質的研究においては、データ収集及び分析過程で研究者の視点が反映され、研究プロセスや結果を強く規定する可能性がある。例えばインタビューでは、語り手と聞き手の相互作用によって言語データが産みだされ、研究者の視点が不可避的に語りに影響を及ぼしている。しかし、研究者の視点は、実際にどのように反映していてどのような問題を有しているのかは不透明である。本研究では、2つのアプローチから、データ収集における研究者の視点について検討した。1点目として、修士論文執筆者に研究計画から執筆に至るまでの過程を語ってもらい、視点の変遷を検討した。2点目として、本研究ではデータ収集方法を工夫した。

具体的には、一人の語り手に同一のテーマに関して異なる研究者がインタビューを行い、生成される語りはどのように変わるのかを検討した。本発表では、特に後者に焦点を当て、質的研究のインタビュー過程で生じる問題点と改善案の考察を行う。

35. 災害復興過程における“社会的なリアリティ”の共同構築～台湾古坑郷華山村の事例をもとに　～

李勇昕・近藤誠司・矢守克也
（京都大学大学院情報学研究科・京都大学大学院情報学研究科・京都大学防災研究所）

被災後の復興過程にあるコミュニティでは、まちづくりが課題となることが多い。特に、中山間地域のような、被災前から高齢化、過疎化が進んだ集落におけるまちづくり活動では、どのような問題が現れるのか。どのような支援が必要なのか。外部者（行政、メディア、専門家）との交流はどのような影響を与えるのか。

本研究では、1999年の集集大地震で被害を受けながらも地域の再生に成功した台湾の古坑郷華山村という中山間地の農村の事例をとりあげ、「住民」、「行政」、「メディア」という各アクターが互いに影響しあう中で華山村における復興の「社会的なリアリティ」はどのように構築されたのかについて考察する。研究方法としては、関係者への聞き取り調査を行うとともに、メディアの関連報道の内容を質的に分析する。同時に、本事例を通じて、東日本大震災の被災地の今後の復興のための道筋についても考察を進めたい。

36. うつ病休職者における復職支援の動向－心理学的アプローチに注目して－

川本静香（立命館大学大学院文学研究科）

近年うつ病による病休・休職者が増加しているといわれている。それを受け、うつ病患者の職場復帰の問題に大きな注目が集まっている。企業では、メンタルヘルスの専門家を職場内に配置したり、民間の支援機関等の外部資源を活用する等の対応策がとられているものの、一部のうつ病休職者はこうした対応策では復職に至らず、うつ病休職者の病態に応じた復職支援を提供することが求められている。

こうした背景を受け、本研究では、うつ病休職者の病態に応じた支援を検討する上で、まずはうつ病休職者が現状でどのような支援を受けているのかについて概観する。具体的には、これまで企業内および企業外の施設にて行われてきた復職支援の状況をレビューし、その動向について考察することを目的とする。

37. 統箱庭療法の言語的応答における箱庭制作者の主観的体験に関する研究

二上裕丞（明治大学大学院文学研究科臨床人間学専攻）

箱庭療法とは、1929 年英国の小児科医ローエンフェルドが子どもの治療法として考案した世界技法を、スイスのカルフがユングの理論をもとに発展させた心理治療技法である。箱庭療法は箱庭制作の過程と言語的応答の過程からなり、この２つの過程は「箱庭療法という車の両輪」と言われているが、言語的応答における箱庭制作者の主観的体験を捉えようとした研究は非常に少なく、その機能は十分に検討されていない。心理臨床の実践場面においても、この言語的応答は「ともに味わうような感じで」ということが強調されているのみで、箱庭作品について具体的にはどのような扱いをするべきなのかあいまいな部分がある。以上の問題意識より、本研究では箱庭療法の言語的応答における箱庭制作者の主観的体験を質的に捉えることを目的とし、箱庭療法における言語的応答の機能や意義に迫ることによって、心理臨床の実践に寄与できればと考えている。

38. 新ソーシャルメディアにおける震災後の地震予知流言

上村晃弘・白石理佐・サトウタツヤ
(立命館大学立命館グローバルイノベーション研究機構・所属なし・立命館大学文学部)

2011 年の東日本大震災では様々な流言が拡散した。本研究では特に東日本大震災後にソーシャルメディアを媒介として拡散した地震予知流言に焦点を当て、その特徴を明らかにした。まず、記事やツイートの出現パターンは、福原ら（2005）の分類における突発型であった。次に、流言の特徴である「同化」「強調」を確認できた。ただし、これらははっきりと区別されるものではなく、流言のとらえ方によってどちらにも取れる場合があることがわかった。また、地震に対して注意喚起を促す内容や読み手に配慮をしつつ情報の伝達をする内容があった。これは、東日本大震災をきっかけに防災意識が向上し、他人の安全を気遣う意識も高まったためと考えられる。このことから、安全確保などポジティブな意味で流言をツールとして使用している可能性も見出された。

39. 2歳児クラスの散歩場面における幼児同士の対話のあり方の変化
－眼前の物を話題とする事例に着目して－

淀川裕美 (東京大学大学院教育学研究科博士課程 / 日本学術振興会特別研究員）

本研究では、2-3 歳児同士の散歩時の対話のあり方を検討した。6 ～ 11 月の半年間参与観察を行い、幼児同士の対話は 29 事例観察された。事例を 3 ヶ月毎に 2 期に分けたところ、眼前の物を話題とする事例は前期 5 事例、後期 5 事例であった（後期に三者間対話と五者間対話が 1 事例ずつ、他は全て二者間対話）。前期には、他児が話題として提示した物に関心を示さず対話がすぐ終わる、物に関する互いの主張を受け入れられず泣き出す、他児の所有物に関心を示し話しかけるが、応答がなく対話がすぐ終わる等、対話が維持されにくいものの他児との対話を行いたい気持ちが見られた。一方、後期には、他児が話題として提示した物に関心を示し、物についての理解を共有する、あるいは物について表現を変えながら言い合う、他児が扱っている物をどうしたいか確認し、援助しようとする等、互いの思いや理解を共有しながら、他児との対話を楽しむ様子が見られた。

40. 健康科学研究における Thematic Analysis の応用可能性について

土屋雅子（千葉大学大学院看護学研究科）

健康科学 - 健康心理学，看護学，保健学などの人類の健康を扱う学問分野 - では，個々の分野の境界を越えた研究手法を駆使し , よりよい人間理解につながる研究が求められている。健康科学分野研究の要となる bio-psycho-social model では，量的研究法，質的研究法のどちらか 1 つのみを使用しての真実の探求は困難を極める。

量的研究の根幹となる ”universality” の追求，質的研究の根幹となる ”speciality” の追求は，相容れないものと考えられがちであり，両者の意見の相違は，マクロ対ミクロ的な視点の衝突にとどまり，両研究法の協働的方法論を生成していない。本発表では，協働的方法論として Boyatzis の Thematic Analysis を紹介し，その方法論を紐解く。そして，健康科学研究における Thematic Analysis の応用可能性について考察を行う。

41. カウンセリングにおける個人的ポジショニング
—モラルオーダーを軽減するクライアントの発話行為に注目して—

綾城初穂（東京大学大学院教育学研究科）

本発表では，子どもの問題を主訴として来談したクライアントとカウンセラーとのやり取りをポジショニング理論（Harré,1998）によって分析する。ポジショニングとは，語り手が自分や他者を言説上で位置付けるあり方を示す概念である。Harré はポジションを言説上の権利と義務のクラスターと定義している。これに従えば、カウンセラーやクライアントといったポジションは、それぞれに許される（許されない）語りや義務づけられる語りといった制約を課せられていると考えられる。本発表では，クライアントが「自分の問題」といった語りを見せる場面に注目した分析を行い，その語りがポジションの制約に対してどのような影響を与えるのかについて検討した。分析の結果，クライアントがポジションの制約以上の発言権を得るために自己の個別性を主張し（個人的ポジショニング），権利や義務の制約をローカルな関係において軽減していたことが示唆された。

42.「被災者の声」はどのように語られるか（2）
—〈子ども〉というディスコースの実践—

広津侑実子・橋本望・原田満里子・綾城初穂（東京大学大学院教育学研究科）

本発表では、朝日新聞「いま伝えたい　被災者の声」欄に掲載された子どもに関する表現を対象にディスコース分析を試みる。分析対象は、中学生以下の子ども本人の声・大人が子どもに言及する声・写真という視覚的な声の３つである。目的は、これらの声においてどのような社会的効果や意味がもたらされるのかを検討することであった。共同的な分析の結果、これらの３つの声において構築されている〈子ども〉像は、欲求を直接的に表出する、ボランティアなどを通じて周囲を鼓舞し勇気づける、体験を肯定的に意味づけ将来につなげる、といった特徴をもつことが明らかになった。従来の〈子ども〉観の一部を拡大・強調したこれらの特徴は、多かれ少なかれ大人の欲望の反映であり、３つの声が相互に補完しあいながら、読み手に一種のカタルシスを与えると同時に、「再生への希望」を構築する道具性が〈子ども〉に付与されていると考えられた。

43. 日本の安全文化研究における「文化」の意味

竹内みちる（(株）原子力安全システム研究所）

近年、産業事故の防止にあたっては、技術・個人要因のみならず、組織的な要因に注意が払われるようになった。その一つとして、日本においても、1990 年代以降、「安全文化」に関する研究が発達し、多様な分野（エネルギー・輸送・化学・医療界等）で研究の蓄積がなされてきた。一方で、日本での安全文化研究の特徴は、その工学的手法への固執と、歴史的、思想的な観点の欠如であるという批判がなされてもいる（福島 , 2010）。本研究は、上述のように批判される既存の産業分野における安全文化研究 150 件において、安全文化はどのようなものとして捉えられ、どのような面が検討されているのか／いないのかということを、組織文化研究の知見に照らして整理し明確化する。発表では、特に、文化的環境（組織を取り巻く業界や社会に特徴的な文化的枠組み）が、安全文化の研究の中でどのように扱われているのか／いないのかということを論じる。

44. 子どもの学校観と学校経験：「終焉」しない物語、そしてナラティヴ・アプローチへ

山崎一希 (茨城大学大学院人文科学研究科)

本研究は、学校を秩序づける「物語」（社会学的には終焉したとされる）について、子どもの側からの有意性を再評価するものである。子どもたちは「物語」の素朴な信奉者ではないが、かといって「物語」が絶望をもって彼らの中から消え去るのではなく、「本当かも知れない物語」として彼らの経験を規定しつづける。そのことによって、物語を突き詰めた「ゼロ・トレランス」のような施策がときにリアリティをもって迎えられてしまう。

本研究では、ある高等学校でのＦＷ、およびインタビュー調査をもとに、子どもが共有する「物語」としての学校観がどんなもので、どのように形成されているのか、「物語」に回収されにくい出来事はどう認識されているのか、といった課題を明らかにする。さらに、その学校観と個別的・具体的相互行為とを関連づけながら新たな物語＝学校観を構築するナラティヴ・アプローチとしての「学校観の脱構築」実践の可能性に言及する。

45. web における時間に焦点を当てた社会情報システムのデザイン

高木徹 (東京都市大学大学院環境情報学研究科）

ここ最近注目を集めているタイムラインインターフェースを用いた情報表現においては、時間軸にそって情報を見せることで、複数の物事の関連性や前後関係を容易に把握することができ、情報に文脈を与えて見せることを可能にさせる。しかし従来のタイムラインにおいては、時間軸のみにとらわれ過ぎることで線形的な表現に縛られがちな場面もあると考える。これまでの研究を通して、タイムライン上での情報は時間軸によって整理されながらも特定のカテゴリごとにエリアを形成していたり、情報同士が複雑に結びついているのではないかと考える。これらを可視化することで非線形性を生み出し、よりインタラクティブな表現や情報へのアプローチ手段を増やすことを可能にすると考える。本研究では時間軸上において情報のエリアや結びつきを可視化させ、非線形的な表現を取り入れたタイムラインの考案とシステム開発を行い時間軸上における情報のデザインを行っていく。

46. ソーシャルメディアとしての AR の可能性

増田陽大（東京都市大学大学院環境情報学研究科）

都市は、そこにある物理的、地理的な環境だけではなく、都市に付加される情報やそこでの様々な人々の動き、集まり方、留まり方、及びその痕跡から構成されている。また、近年におけるソーシャルメディアやスマートフォンの一般化によって、都市はより AR 的なものとなっている。この AR の多様な形態は、特定の場、コンテンツの配置、ソーシャルメディアといったプラットフォームに依存して作られている。そして、AR とは与えられたものではなく、プラットフォームに依拠しながらも人々が集合的に作り出すものだということである。

そこで本研究では AR を利用した興味や関心の近いユーザー、知り合いのユーザー同士による「擬似同期」的な街歩きを可能とし、尚且つ人と人とがコミュニケーションを行うツールを作成する。そして、このサービスを用いてユーザーはどのようなコミュニケーションをとるのか調査する。

47. 地域キュレーターの活動の分析と活動を促進するためのシステムの開発

谷杉歩音（東京都市大学大学院環境情報学研究科）

近年、Web 上の情報発信は急速にポピュラーになってきているようにみえる。しかし、地域や特定の関心などのローカルな情報は充分に共有されておらず、検索サイトで一般的なキーワードで検索するだけではユーザーが満足いく情報が得られない場合がある。そのため独自の観点で情報を収集し、得た情報を選別して新しい文脈と価値を付加し再発信する「キュレーター」の活動が重要になってきている。本研究はローカルな情報を再発信している「地域キュレーター」の活動に注目し、彼らがどのようなネットワークを持ち、どのような情報を重要視した上で収集、選別、再発信しているのかを調査する。また、彼らが情報を収集・再発信する活動を助ける Web システムを提案する。「キュレーター」の活動を助ける事でローカルな情報の共有を促進することが期待できる。最後に本システムのプロトタイプである横浜市港北地区の情報収集システムについて述べる。

48. レスポンスシフト―EBM と NBM の狭間に位置するものとして

菅波澄治・松川絵里・藤原彩・土井裕貴・紀平知樹
（大阪大学大学院人間科学研究科・大阪大学コミュニケーションデザイン・センター・大阪大学大学院人間科学研究科・大阪大学大学院人間科学研究科・兵庫医療大学共通教育センター）

「レスポンスシフト」とは自己評価式のデータで生じる現象であり、特に臨床場面においては患者の QOL 評価に影響を及ぼすことが知られている。そのメカニズムについては Spranger & Schwartz（1999）や Rapkin & Schwartz（2004）らが仮説を提示しているものの、実態の解明は未だに進んでいない。

レスポンスシフトは Pre-test/Post-test デザインにおける Pre-test と、Then-test（回想による Pre-test）/ Post-test デザインにおける Then-test の差として示される。このうち、Pre-test/Post-test デザインが EBM に基づく客観的指標であるのに対して、Then-test/Post-test デザインは患者のナラティヴに基づく主観的指標であると言える。しかしながら、医療の自然科学的なパラダイムの中で、後者はこれまで患者の QOL を評価する際に見過ごされてきたという経緯がある。本発表では個別的 QOL 評価尺度である SEIQoL を使用して、哲学的観点と臨床心理学的観点から、レスポンスシフトの新たな解釈を試みる。そして、NBM 実践の方法論としてレスポンスシフトを捉え直すことの意義についても論じることとする。

49. 帯同赴任から単身赴任を選択するまでのプロセス ―母親の語りを通して

春日秀朗・渡邉卓也・富岡沙紀・宇都宮博・サトウタツヤ
（立命館大学大学院文学研究科・立命館大学大学院文学研究科・株式会社トライグループ・立命館大学文学部・立命館大学文学部）

本研究は、父親の転勤にともなって帯同赴任していた家庭が、どのような要因によって帯同赴任から単身赴任を選択したのか、単身赴任を選択するに至ったプロセスを母親の語りから明らかにすることを目的とした。子どもを持つ 5 人の母親に対してインタビュー調査を行い、複線径路・等至性モデル（TEM）により分析を行った。その結果、単身赴任を規定する最大の要因は子どもの年齢であり、単身赴任を選択するようになるのは、主に長子が中学生に上がった頃であることがわかった。子どもの成長段階によって母親の単身赴任に対する感情が異なり、子どもが幼い時は育児不安が大きいため帯同赴任を選択するが、小学生になる頃には子どもへの影響を考えるようになり、中学に上がる頃には子どもの環境の安定を優先するというような変化が見られた。また、住宅の管理や老親の世話、母親の就業状況も、赴任形態の選択に影響を与える要因として挙げられた。

50. 青年期におけるキャリア意識の変容要因の検討 : 高校 1 年・高校 3 年・大学 4 年・就職 3 年目の語りを比較して

安達仁美 (信州大学教育学部)

本研究の目的は、青年期におけるキャリア意識の変容要因について検討することである。近年、学校教育でのキャリア教育の推進が謳われている。キャリア教育は、「一人一人の社会的・職業的自立に向け必要となる、基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」（中教審 2011）と定義されているが、その成果は捉えにくいものである。そこで、本研究では、高校入学時から就職 3 年目までを長期的に追跡した縦断的データを用いて、キャリア意識の変容過程とその要因を描き出す。多様な人生の選択肢からどのように生き方を選択していくのだろうか。

方法としては、U さん（男性）に対して、高校 1 年生、高校 3 年生、大学 4 年生、就職 3 年目の計 4 回実施したインタビュー調査をもとに、各時点の様相を複線径路等至性モデル（TEM）を用いて可視化し、比較することを通して、キャリア意識に変容をもたらした要因について検討を試みる。

51. よそおいの発達と変容―化粧行為・着装のに纏わる語りの分析 ナラティヴ・プラクティスの転用可能性の検討 : 化粧による心理支援の可能性に向けて

木戸彩恵 (立命館大学衣笠研究機構生存学研究センター)

人は，社会・文化的文脈における選択肢の中から「自分らしさ」を選び取り，構成しながら生きる存在である。男性らしさ・女性らしさとは，社会的デザインがルーティン化され，あらゆる場面の背景に深く埋め込まれ，自明化された結果として表出されているものである。そうした属性を他者が見出すことが可能なのは，社会的デザインによってそれらの行為が支えられているからである。よそおい（ここでは，化粧と着装を扱う）は，そのような社会的デザインに基づく行為であるが，多くの場合に自明視されており，日常の中での実践的な側面が特に意識されにくいと考えられる（尾出，2012）。本発表では，個人の社会・文化的文脈におけるよそおいの発達と変容を社会・文化的アプローチから捉えることで，その実践の様相に迫りたい。

52. 慢性疾患病者のケアのあり方の検討
―ピアサポートの場の生成と記述から

赤阪麻由（立命館大学大学院文学研究科）

慢性疾患病者のケアにあたり，医学モデルだけではなく心理社会モデルからのアプローチの必要性が認識されつつある。従来の慢性疾患病者のケアは病院内での個人を対象にした支援が中心であったが，慢性疾患病者にとって病いは日常生活とともにあるものであること、心理士が病院という現場で支援にあたるには制度上、立場上限界があることから、病院外の支援のあり方を検討する必要がある。

本研究は慢性疾患病者のケアの一つのあり方として，同じ困難を持つ当事者同士が語り，支え合うピアサポートに注目した。ピアサポートに注目した取り組みはさまざまな場で行われているものの，その実態は不明瞭であるのが現状である。そこで，発表者が実際にピアサポートのための場を立ち上げ，実践を行っていくプロセスを記述し，場がどのように動き，発展していくかを明らかにする。さらに，ケアのあり方や専門性そのものについても考察していく。

53.「書く」行為にみえる「場」の移行と多声性
―他者、自己、ことばの関係―

工藤育子（早稲田大学大学院日本語教育研究科博士後期課程）

本発表は、第二言語として日本語を学ぶ日本語学校の学習者の作文の第 1 稿から第 2 稿へと書き直した動機や目的の語りを、書き手の何らかの「行為」ととらえ、「ヴィゴツキーの三角形」(山住 2008) による図解化を経て、「書く」行為とは何かという課題を問うために書き手の思考過程に迫ったものである。

考察の結果、①他者や第 1 稿とのかかわりを契機として、他者と共有した場と自己の内面という場の往来があることがわかった。これは a.「精神間機能」⇔「精神内機能」(ヴィゴツキー 2001) の概念で表される。

さらに、自己の内面を経て第 2 稿が生成されることから、b.「話しことば」⇔「内言」⇔「書きことば」(ヴィゴツキー上掲同) の関係でも説明され得る。また、②自己の内面の場から第 2 稿を書くまで、つまり「内言」には、書き手自身の内部での活発なやりとりの繰り返しがあったことが明らかになった。これはバフチンの「多声」(1995) 概念で説明することができる。

54. 就労女性の妊娠に伴うアイデンティティ管理

足立にれか（白百合女子大学大学院文学研究科）

妊娠は身体や体調の変化を伴うとともに人生移行（山本・ワップナー , 1992）の時期でもあり，ときに環境や人との関係や価値観の変更を迫られる契機となる。たとえば働く女性は妊娠することによって，仕事や人との新たな心的関係の構築や再構築を行うとされる（Hilfinger Messias, & DeJoseph, 2007）。働きながら妊娠期を過ごす女性たちはまた，効率性，継続性，安定性，予測可能性等に価値を置く組織・企業の中で〈働き手〉アイデンティティを維持する必要に迫られる（Greenberg, Ladge, & Clair, 2009; Gross, & Pattison, 2007）。本調査ではインタビューデータをもとに、〈働き手〉アイデンティティ管理に関わる外的資源として，主に国や組織内部の制度、職種や就労形態、組織内での対人関係に焦点を当てた探索的な分析を行い報告する。

55. 帰国した日本語学習者と創る日本語学習コミュニティー

當銘美菜（早稲田大学日本語教育研究科大学院生）

本発表は、日本留学を終え帰国した日本語学習者が実践する日本語学習コミュニティーの変容過程から、教師と学習者が Web 上のやりとりを介してどのように日本語学習コミュニティーを創造していたかを明らかにするものである。

分析の結果、日本語学習コミュニティーは、教師を含むコミュニティー成員の実践をめぐるデザインの交渉により、コミュニティーを構成する成員やコミュニティーの機能を変化させながら、日々動態的に構築されていることが明らかになった。また、日本語学習者は、コミュニティー成員とのやりとりの中で、実践者や教師、学習者と、自らの立場を変化させながら、コミュニティーに参与していることが明らかになった。

56. 和文化の教育場面における幼児の社会的行動の発達とその発生機序

宮本知子・浅川潔司 (兵庫教育大学大学院・兵庫教育大学大学院 学校教育研究科)

本研究の主たる目的は，公立幼稚園における年中・年長児計 11 名による「こども茶道教室」での修道場面を参与観察する中で得た印象的なエピソードを分析することで，園児たちが茶席を離れた日常の場面においても「個性」化した思いやりを他者に向け，相補的で心地よい居場所と心理的紐帯を形成し得る可能性と配慮・コミュニケーションとの着地点を探索することである。本研究で，茶道の修道場面に焦点化した理由は，主客相互の好意の交感を醸成する茶席特有の空間的機能が，こどもたちの自己受容と他者受容の往還を支え，さらには日常的場面での配慮・コミュニケーションに反映されるのではないかと考えるからである。わたしたちは，自らの身体でもって，〈ここのいま〉を主体的に生きている。園での日々の営みの中で，配慮・コミュニケーションを基盤とした自他関係の新たな地平が拓けてくる様態を，茶道空間という「場」と身体知というフィルターを通して検討する。

57. リレー作文における児童の相互行為過程の検討

小野田亮介（東京大学大学院教育学研究科）

本研究では，複数人が数行ずつ文章を書き加えるリレー作文を使用し，リレー作文という課題を通してどのように対話が生起するのか，及び，課題の導入によって学級内の人間関係にどのような影響がおよぼされるのかについて明らかにすることを目的とした。都内の公立小学校 3 年生の 1 学級（女児 13 名，男児 14 名）において，2011 年 2 月中旬より 3 週間リレー作文を実施し，作文の内容，および教師の日記報告から，児童間の相互行為を分析した。その結果，児童は他者と文脈を共有することで一貫性のある文章を作成しており，自分の前の書き手から影響を受けて作文を行っていることが示された。また，リレー作文課題を媒介して，普段あまり話さない関係にある児童同士が会話するようになっていたことから，「他者へ向けて書く」経験が児童の相互行為への志向性や，コミュニケーションの範囲にも正の影響を及ぼしている可能性が示唆された。

下川昭夫 編

コミュニティ臨床への招待

つながりの中での心理臨床

つながりを作り支援に活かすプロセスを実践例とともに紹介。 A5判並製332頁／3570円

重野 純 編

キーワードコレクション 心理学 改訂版

ロングセラーを大きくパワーアップ。最新の心理学術語集。 A5判並製472頁／3570円

宇賀貴行 編

社会脳シリーズ1 社会脳科学の展望

脳から社会をみる

科学研究スタイルに革命をもたらす社会脳研究の最前線！ 四六判上製272頁／2940円

渡部信一 著

超デジタル時代の「学び」

よいかげんな知の復権をめざして

超デジタル技術を活用した新しい「学び」のすがたと可能性。 四六判上製264頁／2835円

阿堂哲雄 監修／村尾泰弘 編

看護・介護・保育の心理学シリーズ③

人間関係の心理と支援

グループ・アプローチのすすめ

集団の力を活用して人間関係を変容させ，問題解決をめざす。 A5判並製232頁／2310円

日本発達心理学会 編／岩立志津夫・西野泰広 責任編集

研究法と尺度

発達科学ハンドブック2

実験、観察、質問紙、量的・質的研究等の方法をいかに使うか。 A5判上製344頁／3780円

中村英代 著

摂食障害の語り

〈回復〉の臨床社会学

インタビューにより回復者に初めて光を当てたナラティブ研究。 四六判上製320頁／3360円

D・A・ノーマン 著／伊賀聡一郎・岡本 明・安村通晃 訳

複雑さと共に暮らす

デザインの挑戦

現実世界の複雑さにどう対処すべきかに正面から立ち向かう。 四六判上製346頁／2940円

日本質的心理学会 編

質的心理学研究 第11号

特集 病い、ケア、臨床

病いや障害とともに暮らす当事者に関わり、その意味を問う。 B5判並製228頁／2940円

茂呂雄二・有元典文・青山征彦・伊藤崇・香川秀太・岡部大介 編

ワードマップ 状況と活動の心理学

コンセプト・方法・実践

人のこころの営みは、社会、文化、歴史、状況のエコロジーのなかに織り込まれている。社会文化的アプローチ、状況論、文化歴史的アプローチ、活動理論など様々に呼ばれてきた心理学のアプローチを多角的に解説。 四六判並製352頁／2835円

佐藤公治 著

音を創る、音を聴く

音楽の協同的生成

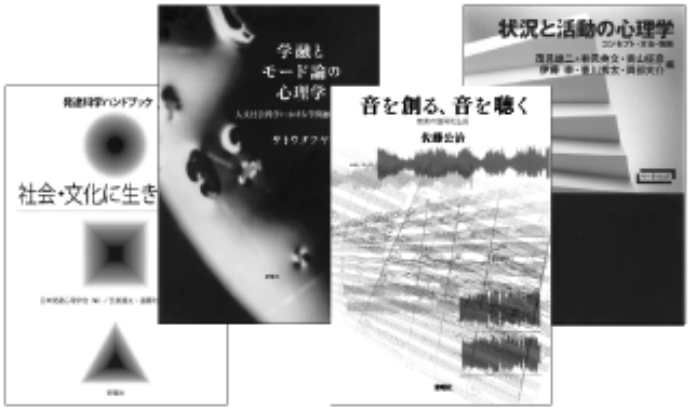
言葉にできないものをいかに伝えるか。西田幾多郎・ヴィゴツキーらの思想をたどりつつ、理性主義を越える行為論の視点から、オルフェウス室内管弦楽団などの練習を通して音楽を生成するすがたを描く。 四六判上製304頁／3360円

サトウタツヤ 著

学融とモード論の心理学

人文社会科学における学問融合をめざして

学際から学融へ！ 現代社会に山積する問題解決のために、諸学問が問題を共有するだけでなく、解決の共有を目指さねばならない。研究と社会との関係を考える枠組み「モード論」の視点からの提言と実践の報告。 A5判上製320頁／3465円



日本発達心理学会 編／氏家達夫・遠藤利彦 責任編集

社会・文化に生きる人間

発達科学ハンドブック5

発達が起こる場としての「社会・文化」と、発達内容としての「社会・文化」。この二つの視点を基盤に、生まれと育ち、社会行動の発達、情動と動機づけ、自己など、多様な切り口で発達のかたちに迫る。 A5判上製360頁／3990円

日本発達心理学会 編／無藤 隆・長崎 勤 責任編集

発達と支援

発達科学ハンドブック6

多様化する現場のニーズにどう応えるか ― 発達心理学をベースに、教育心理学、臨床心理学、障害科学、保育学、教育学など学際的な知見を幅広く結集。研究と実践の相互関係を視野に入れた今後の支援のあり方。 A5判上製376頁／3990円

やまだようこ著作集 第10巻

世代をむすぶ

生成と継承

「人生と学問の関係は？」「人生の転機は？」「なぜ質的研究をはじめたのか？」さまざまな世代をむすぶ語りと著者のライフストーリーを重ねあわせたナラティヴ実践の記録。やまだ心理学の理解にも誘う書。 A5判上製344頁／3990円

株式会社 新曜社

■〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 多田ビル

■TEL：03-3264-4973（代） ■FAX：03-3239-2958 （表示価格は税込）

■E-mail info@shin-yo-sha-co.jp ■URL http://www.shin-yo-sha.co.jp/

好評発売中

デザインド・リアリティ
―半径300メートルの文化心理学―
有元典文・岡部大介 著　四六判　二三〇円



コーヒーショップ、焼き肉屋、コスプレ、オタク、プリクラ…人間の人間らしさを支える文化的メカニズムをユニークに論考した「半径300mの文化心理学」。文化的につくられる世界を身近な切り口から柔軟に鮮やかに論じる。文化心理学の立場から世界とそのつながりを読み解いた好著。

みる きく しらべる かく かんがえる
―対話としての質的研究―
伊藤哲司 著　四六判　一六八〇円

質的研究の方法、基礎知識をバランスよく具体的に解説。質的研究の醍醐味が分かるようユニークな課題を盛り込み編まれた新鮮な入門書。

常識を疑ってみる心理学【改訂版】
伊藤哲司 著　A5判　二四一五円

ライフストーリーの社会学
山田富秋 編著　A5判　一八九〇円

薬学生のための医療社会学
小松楠緒子 編著　B5判　一九九五円

新刊案内

メディアのフィールドワーク
―アフリカとケータイの未来―
羽渕一代・内藤直樹・岩佐光広 編著　A5判　予価二三一〇円

北樹出版　〒153-0061　東京都目黒区中目黒1-2-6　URL：http://www.hokuju.jp
TEL：03-3715-1525・FAX：03-5720-1488　E-mail：hokuju@hokuju.jp

ナカニシヤ出版
TEL 075-723-0111　〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15
FAX 075-723-0095　http://www.nakanishiya.co.jp/　〔表示は税込価格〕

コミュニケーション研究法
末田清子・抱井尚子・田崎勝也・猿橋順子 編著
研究倫理などの心構えから、フィールドワークや実験法、質問紙法、統計まで、多彩な研究手法を解説。　3360円

質問紙デザインの技法
鈴木淳子 著
尋ねたい質問だけの質問紙からは卒業しよう！　計画・準備・技法から倫理的配慮まで体系的に解説。　2940円

グラウンデッド・セオリーの構築
◎社会構成主義からの挑戦
K・シャーマズ 著／抱井・末田 監訳
社会構成主義版グラウンデッド・セオリーを生き生きと解説。　3045円

ラディカル質的心理学
イアン・パーカー 著／八ッ塚一郎 訳
◎アクションリサーチ入門
基本原理から論文作成まで、質的研究の理論と方法を詳説。　2940円

自分で作る調査マニュアル
北折充隆 著
◎書き込み式卒論質問紙調査解説書き込んで完成する解説書。　2520円

協同学習入門
杉江修治 著◎基本の理解と51の工夫
形ばかりの「活発な授業」に陥らないために、協同の原理を踏まえた学級経営を具体的に解説する。　1890円

大学1年生からのコミュニケーション入門
中野美香 著　【ワークシート課題付】
キャリア教育に最適なコミュニケーションテキストの決定版。　1995円

大学生からのプレゼンテーション入門
中野美香 著　【ワークシート課題付】
プレゼン能力とプレゼンをマネジメントする力をみがく。　1995円

人間科学研究法ハンドブック【第2版】
高橋順一・渡辺文夫・大渕憲一 編著
人間科学全般にわたった実証研究の方法論と技法を網羅。　2940円

子ども理解のメソドロジー
中坪史典 編◎実践者のための「質的実践研究」アイデアブック
子ども観察をぐっと楽しくする9つの方法論！　2100円

あなたへの社会構成主義
ケネス・J・ガーゲン 著／東村知子 訳
社会構成主義の重鎮ガーゲンによる、平易で格好の入門書。　3675円

社会構成主義の理論と実践
◎関係性が現実をつくる
ケネス・J・ガーゲン 著／永田・深尾 訳
社会構成主義アプローチのバイブルたる大著、ついに翻訳。　6090円

北大路書房

〒603-8303　京都市北区紫野十二坊町12-8
☎075-431-0361　FAX 075-431-9393
http://www.kitaohji.com
振替 01050-4-2083
▶価格は定価(税込み)で表示しています

あなたは当事者ではない
ー〈当事者〉をめぐる質的心理学研究ー　宮内　洋・今尾真弓編著　A5・216頁・2625円　患者学・障害学など〈当事者〉の取り組みが広がる中，フィールドワークや質的研究では，研究者－研究対象等の固定化した関係の絶びに自覚的になりつつある。第一線の研究者が〈当事者〉とは誰なのかを探る。

〈当事者〉をめぐる社会学
ー調査での出会いを通してー　宮内　洋・好井裕明編著　A5・228頁・2940円　フィールドワークや質的研究での「研究する側」と「研究対象とされる側」の対人関係論的な視座を越え，社会的装置・舞台・制度といった〈場〉へメスを入れ，調査研究における実証性の意味をあらためて問う。

人間科学のための混合研究法
ー質的・量的アプローチをつなぐ研究デザインー　J. W. クレスウェル・V. L. プラノ クラーク著　大谷順子訳　A5・328頁・3465円　研究プロセスの各段階において，質的・量的アプローチでデータを収集・分析・混合し，各々のアプローチの長所を組み合わせることをめざした研究方法論。

質的データの取り扱い
L. リチャーズ著　大谷順子・大杉卓三訳　A5・304頁・3360円　文字テキストなどの定性（質的）データの取扱説明書ともいうべき，質的研究手法のガイドブック。「はじめにデータありき」のスタンスで，研究を行うために必要な手順や，特定の研究手法に依存しないテクニックの詳細な説明を行う。

アスペルガーと定型を共に生きる
ー危機から生還した夫婦の対話ー　遠藤バンダ編　東山伸夫・東山カレン著　四六・212頁・1785円　一方が障がいをもった夫婦が長年のコミュニケーション葛藤の経験を当事者どうしで語り合う。二人がいかに認め合い，その関係を大切なものと感じるに至ったか，その経過を立体的に浮かび上がらせる。

ナラティヴから読み解くリジリエンス
ー危機的状況から回復した「67分の9」の少年少女の物語ー　S. T. ハウザー・J. P. アレン・E. ゴールデン著　仁平義明訳　A5・286頁・2940円　一握りの者だけが虐待・養育放棄などの破局的状況に打ち克てたのは何故か。縦断的インタヴューに基づく対照群との比較から見えてきた真実。

愛とユーモアの社会運動論
ー末期資本主義を生きるためにー　波連　太著　四六・232頁・1890円　末期資本主義の帰趨と労働の変容について考察したうえで，世界各地の抵抗運動の諸相からその戦略としてのユーモアに注目。筆者自らの社会的実践も挙げつつ，誰もがただ生きていることを肯定できる新たな公共空間の創造を探る。

日韓　傷ついた関係の修復
ー円卓シネマが紡ぎだす新しい対話の世界2ー　伊藤哲司・山本登志哉編著　四六・328頁・2310円　日韓の映画作品に表現されたさまざまな「傷ついた関係」の感覚を語り合う。異なる文化背景をもつ人々が同じ映画を見て互いの理解の仕方，感じ方の「ズレ」を認識することから始める新しい異文化理解の試み。

心理学マニュアル　観察法
中澤　潤・大野木裕明・南　博文編著　1365円

心理学マニュアル　面接法
保坂　亨・中澤　潤・大野木裕明編著　1575円

心理学におけるフィールド研究の現場
鬼頭康博・伊藤哲司編著　2940円

体験と経験のフィールドワーク
宮内　洋著　2310円

質的研究法による授業研究
平山満義編著　3360円

新 保育ライブラリ 保育実践のフィールド心理学
無藤　隆・倉持清美編著　1785円

アジア映画をアジアの人々と愉しむ
山本登志哉・伊藤哲司編著　1680円

心理学者，裁判と出会う
大橋靖史・森　直久・他著　2625円

狭山事件 虚偽自白【新版】
浜田寿美男著　2520円

http://kongoshuppan.co.jp/

みんなのベイトソン

学習するってどういうこと？



野村直樹 著

グレゴリー・ベイトソンが遺したモダンクラシックス『精神の生態学』を精読し，学習論の現代的な意義をポップな語り口で探る。 **定価2,415円**

終末期と言葉

ナラティヴ／当事者



高橋規子，小森康永 著

死を前にした心理臨床家と精神腫瘍医（サイコオンコロジスト）が進めた終末期フィールドワーク／当事者研究の記録。 **定価3,150円**

モティベーションをまなぶ12の理論

鹿毛雅治編 幻想の自由意志神話と虚構の模性論＝精神論に支えられてきたモティベーション論を，最新の心理学理論でリノベーション。 3,360円

ヒルガードの心理学（第15版）

S・ノーレン＝ホークセマ他著，内田一成監訳 半世紀前に初版が出版されて以来，改訂を重ねる心理学領域随一の世界的なベストセラー。 23,100円

初心者のための臨床心理学研究実践マニュアル（第2版）

津川律子，遠藤裕乃著 臨床心理士や臨床心理学を志す読者に向けて「研究の進め方と論文の書き方」を解説した好評既刊マニュアル第2版。 2,730円

精神現象の宇宙へ

佐藤裕史著 「劇場型社会」としての現代にみられる〈こころ〉の現象を音楽，絵画，小説，映画等の作品をもとに読み解き，その実相を明らかにする。 3,570円

統合的心理療法の事例研究

新保幸洋編著／出典著者：村瀬嘉代子 本書は，これ以上望むべくもない最良の「統合的アプローチ」入門，「村瀬嘉代子臨床」の解説書である。 4,410円

事例でわかる心理学のうまい活かし方

伊藤絵美，杉山崇，坂本真士編 ケーススタディで学ぶ基礎心理学の臨床応用。心理学用語を整理しながら臨床力のバージョンアップを図る。 2,940円

Ψ 金剛出版 〒112-0005 東京都文京区水道1－5－16 ＊価格は税込（5％）です
Tel .03-3815-6661 Fax.03-3818-6848 e-mail address : kongo@kongoshuppan.co.jp

日本質的心理学会第 9 回大会　準備委員会・実行委員会

委員長　上野直樹　（東京都市大学）

事務局長　岡部大介　（東京都市大学）

準備委員

中村雅子（東京都市大学）
小池星多（東京都市大学）
茂呂雄二（筑波大学）
吉岡有文（立教大学）
有元典文（横浜国立大学）
青山征彦（駿河台大学）
香川秀太（大正大学）
石田喜美（常磐大学）

実行委員

ソーヤーりえこ（東京都市大学 客員研究員）
秋元慶太 (WEB アーキテクチャ , 東京都市大学 OB)

学生実行委員

青木蔵人
江島裕斗
大崎敬志朗
小林信明
谷杉歩音
徳山博章
長谷川義宗
藤平一平
古川 英幸
増田陽大
宮崎悠
安田駿一　（以上、東京都市大学）

広告・展示

株式会社　北大路書房
株式会社　金剛出版
株式会社　新曜社
株式会社　ナカニシヤ出版
株式会社　北樹出版

日本質的心理学会第 9 回大会プログラム抄録集

発行日　2012 年9月1日
発行者　日本質的心理学会第 9 回大会準備委員会
委員長　上野直樹
準備委員会事務局　横浜市都筑区牛久保西 3-3-1
東京都市大学　岡部大介研究室
印　刷　（株）ポートサイド印刷